

文学博士学位請求論文

日本語形容動詞の研究

A Study on Japanese Keiyoudousi

2005年 8月

仁荷大学校 大学院

日語日本学科 日本語学専攻

権 善 和

文学博士学位請求論文

日本語形容動詞の研究

A Study on Japanese Keiyoudousi

2005年 8月

指導教授 李 成 圭

仁荷大学校 大学院

日語日本学科 日本語学専攻

権 善 和

이 論文을 權善和의 博士学位 論文으로 認定함

2005年 8月

主審 _____

副審 _____

委員 _____

委員 _____

委員 _____

〈目 次〉

第 1 章 序 論

1. 本論文の構成	1
2. 本論文の立場	2
3. 本論文の内容	4

第 2 章 形容動詞の研究

1. はじめに	8
2. 形容動詞の概念	9
2.1. 形容動詞という名称	9
2.2. 形容動詞の種類と活用	11
2.2.1. 形容動詞の種類	11
2.2.2. 形容動詞の活用	15
3. 形容動詞についての研究の展開	23
4. 形容動詞論	31
4.1. 特設論	32
4.1.1. 吉沢義則(1932)	32
4.1.2. 橋本進吉(1935)	37
4.2. 否定論	41
4.2.1. 松下大三郎(1928)	41
4.2.2. 時枝誠記(1950)	43
4.2.3. 水谷静夫(1951)	46

5. 他の品詞との関係	51
5.1. 形容詞との関係	51
5.2. 名詞との関係	54
5.3. 連体詞・副詞との関係	57
6. おわりに	58

第 3 章 漢語の名詞と形容動詞語幹について

1. はじめに	62
2. 先行研究の検討	63
2.1. 吉岡郷甫(1912)	64
2.2. 水谷静夫(1951)	66
2.3. 塚原鉄雄(1970)	68
2.4. 鈴木英夫(1986)	71
2.5. 先行研究のまとめ	73
3. 名詞と形容動詞語幹の特徴	74
3.1. 名詞と形容動詞語幹の形態的特徴	75
3.2. 名詞と形容動詞語幹の意味的特徴	81
3.3. 名詞と形容動詞語幹の辞書的分類と用法	86
4. 同形漢語の名詞と形容動詞	101
4.1. 同形漢語に現れる品詞	101
4.2. 同形漢語の名詞と形容動詞	104
4.3. 同形漢語の名詞と形容動詞の用法の分析	107
5. おわりに	112

第 4 章 形容動詞化する接尾辞「的」について

1. はじめに	114
2. 先行研究	115
2.1. 藤居信雄(1957)	115
2.2. 遠藤織枝(1984)	116
2.3. 山下喜代(1999)	118
3. 「的」形の語	119
3.1. 漢語 + 「的」	119
3.2. 和語・カタカナ語・混種語 + 「的」	124
4. 「的」の意味	128
4.1. 「的」の意味の多義性	128
4.2. 「的」の評価的意味	137
5. 「的」の用法	140
6. 「的」形の語の連体修飾形	144
6.1. 「的な」と「的」	144
6.2. 「的な」と「的の」	147
6.3. 連体修飾の「的な」と「の」・「な」	156
7. おわりに	162

第 5 章 カタカナ語の連体修飾形「な」について

1. はじめに	165
2. 連体修飾形の「の」と「な」	167
2.1. カタカナ語の連体修飾形「な」	167
2.2. 漢語の連体修飾形「の」と「な」	171
2.3. カタカナ語の連体修飾形の「な」と「の」	174

3. 「～な」形を取る語の意味的考察	176
3.1. 同一語幹の形容動詞と形容詞	177
3.2. 同一語幹の連体詞と形容詞	183
4. 名詞的なカタカナ語に見られる「～な」の意味的特徴	186
5. おわりに	190

第 6 章 形容動詞の日・韓対照

1. はじめに	192
2. 問題提起	195
3. 「永遠」の連体修飾形	197
4. 韓国人の「永遠な」使用についての解釈	201
5. 「名詞述語」の連体修飾形に現れる「～な」	207
6. 「永遠」の分析	212
6.1. 「永遠」の形容動詞的特徴	212
6.2. 「永遠な」の文の分析	217
7. おわりに	224

第 7 章 結 論

◀参考文献一覧及び用例出典目録▶	234
------------------------	-----

国文抄録	245
------------	-----

英文抄録	248
------------	-----

第1章 序 論

1. 本論文の構成

本論文は、日本語の形容動詞が、日本語の体系の中でどのように位置づけられ、また、いかに運用されているのかについて考察したものである。

具体的には、日本語における形容動詞の成立と展開を中心に、先学の研究成果を吟味し、その補正を行いつつ、日本語の形容動詞のもつ意味的特徴を他の品詞との比較などを通じて明らかにする。そして、最終的には日本語の形容動詞の意味範疇についての新たな解釈を試みたい。

本論文は次のように構成されている。

第1章 序 論

第2章 形容動詞の研究

第3章 漢語の名詞と形容動詞語幹について

第4章 形容動詞化する接辞「的」について

第5章 カタカナ語の連体修飾形「な」について

第6章 形容動詞の日・韓対照

第7章 結 論

2. 本論文の立場

日本語の形容動詞は、事物の性質・状態を表現する働きをもち、意味の面では形容詞に類似しており、他の語との接続などの面では動詞と同じ機能をする。また、自立語で活用があるという特徴も有するが、口語と文語とではその活用形が異なる。口語の「静かだ・稀だ」などは「ダ・ナ活用」と呼ばれる。一方、文語の形容動詞には「ナリ活用」と「タリ活用」といった二つの活用形が認められ、「静かなり・稀なり」「堂々たり・整然たり」がそれぞれにあたる。

もともと、形容動詞とは、連用格にしか立つことができなかった「静カニ」「堂々ト」などの副詞に、動詞「アリ」が付いて「静カニアリ」「堂々トアリ」となり、さらに縮約(母音脱落)して「静ナリ」「堂々タリ」になったものである。

口語の形容動詞「ダ・ナ活用」語においても、「安全」「貧弱」など、情態概念の体言に「～だ」を付けて形成されたものが多い。それゆえ、情態概念の副詞、あるいは情態概念の体言から作り出された形容動詞については、これを一語として認めるかそれとも二語とすべきかといった問題をはじめ、形容動詞の認定論と否定論に至るまで、形容動詞をめぐるさまざまな議論が行われている。

このように、形容動詞の研究は、その認定・否定論を中心とした形態的な面の議論が多く、とりわけ、文における機能に着目して、名詞との品詞関係の究明が試みられてきたように見受けられる。

形容動詞の認定論と否定論については、第2章で詳しく言及するが、これは研究史を探る程度の水準にとどめておき、本論文では、この問題を飛び越して、運用上の特徴を中心に考察を進めたい。

形容動詞をめぐる議論において主要な論点になるのが、形容動詞語幹と名詞との類似性の問題である。つまり、「健康だ」の「健康」が名詞であるのか形容動詞語幹であるのかということであるが、簡単に答えられる問題ではない。次の例を見てみよう。

(1) 大切なのは**健康だ**。

(2) 彼はとても**健康だ**。

用例(1)(2)は共に「○○+だ」という形をしているが、(1)は名詞として、(2)は形容動詞として、はっきり区別できる。他の用法においても殆んど同じ形態であるが、連体修飾の場合、名詞は「～の」で、形容動詞の場合は「～な」という異なった形をしている。従って、連体修飾形は名詞と形容動詞語幹を区別する基準としてよく使われている。しかし、形容動詞の連体形には「～な」だけではなく、「～の」が用いられる場合もある。

(3) 車の運転には、常に**細心**の注意を払わなければなりません。

このような、連体形のゆれは接尾語「的」を付けて形容動詞化した語においても見られる現象である。つまり、連体修飾形の「的な」と「的の」の混用が同一人物によって作成された文においても見られるし、「～な」を省略して「～的+体言」を用いる例も漢語では一般的な現象として現れる。

ところで、新造語の形容動詞は、漢語、もしくは、カタカナ語に代表される外来語に「～だ・な」が付いてでき上がったものであり、そ

の優れた造語力と生産力は、多数の新しい形容動詞を作り上げている。形容動詞は情態概念を表わす語彙であるから、本来、外来語の形容詞に語尾「～だ」を付けて作るのが一般的であろうが、实例を調査してみると、「名詞+だ」という語が多く見られ、特に「カタカナ語+だ」の語形が多い。この問題の考察も形容動詞の意味特徴などの解明につながるものと考えられる。

本論文は、以上のような内容を中心にしつつ、形容動詞の語種と用法を主な考察対象とするが、最終的には、形容動詞が今後どのように変化・展開するのであるかという問題について展望を加えてみたい。

3. 本論文の内容

本論文は、七つの章から構成されており、それぞれの章は独立した形を有していて、基本的には各章ごとに結論を出している。第2章以下の内容を簡単にまとめると次の通りである。

第2章では、形容動詞に関する基本的な事柄や形容動詞についての研究史を概観することによって、形容動詞の発生と展開過程などをまとめる。特に、形容動詞論で対立している認定論と否定論の主張はどうして両立するのかをはじめとして、この両論を比較し、これらがそれ以降の形容動詞の研究にどのように尾をひいているのかを検討する。

第3章では、漢語の名詞と漢語を語幹とする形容動詞との区別を形態的な側面と意味的な側面で検討する。

名詞と形容動詞は、基本的に「名詞+助動詞(だ)」と「形容動詞語幹+語尾(だ)」の形態をしており、用法においても「名詞+助詞(に・で・なら)」と「語幹+語尾(に・で・なら)」の形で、同じである。

意味的には、一般的に名詞は実体的概念を表しており、形容動詞は情態的概念を表している。

このような形態的ないし意味的特徴による区別が名詞と形容動詞の分類において、必ずしも当てはまるわけではない。

本章では、形態的な、または意味的な特徴においてのゆれを指摘した上で、名詞と形容動詞の範囲をどのように規定すればよいかを辞書的な分類と用法を通して検討してみる。また、同形の漢語に現れる品詞の種類にはどういうものがあるかということをはっきりさせるために、同形の漢語名詞と形容動詞の特徴と用法を、用例を通して調べてみる。

第4章では、形容動詞化する接尾辞「的」の意味と用法、及び連体修飾形「～の」と「～な」との関係を、意味の分析を通して検討する。

「的」は、抽象的な意味を表す漢語名詞や体言的な語に付いて、形容動詞の語幹を作る接尾辞であるが、和語・カタカナ語にも「的」が付いた語が現れるようになり、「的」形の語の数も増えつつある。

「的」形の語が増えていくというのは、「的」の意味の拡大と変化がおこっているということを意味する。このような接尾辞「的」に見られる変化を、辞書での「的」の意味と用法を通して検討してみる。ま

た、その際には、辞書に採録されていない「的」の用法を提示することもある。

「的」形の語の増加とともに、「的」そのものの意味だけではなく、「的」形の語に、語レベルもしくは、文レベルで評価義を付加するようになった。つまり、「的」の接続で、語の固有の意味のほか、プラスあるいはマイナスのイメージが加わるのである。評価義が現れる語と文には、どのようなものがあるかについて検討してみる。

「的」の用法には、一般の形容動詞とは違う形態が現れる。つまり、「的」の連体修飾形に「な」が付く語と、付かない語がある。また、「的の」の形態もあって、「的」の連体修飾形の各々のタイプによる文の特性についても言及しておきたい。

そして、同形漢語の名詞と形容動詞に現れる連体修飾形の「の」と「な」と「的な」を比較して、その微妙な意味の差について考えてみる。

第5章では、カタカナ語の連体修飾において「～な」の形が形容性の語だけではなく、名詞性の語にも接続することについて考察を行う。

連体修飾形に「～な」を取る名詞性のカタカナ語を対象として、その語に見られる共通点はいったい何であるかを検討する。

また、漢語の連体修飾形「～の」と「～な」の意味分析を通して、連体修飾語の「～の」と「～な」の意味的な特徴を規定してみる。さらに、名詞性のカタカナ語に「～な」が接続する傾向を把握するため、「な」形の語、つまり形容動詞の連体修飾形と「な」形の連体詞の意味を分析して、「な」形の語に現れる共通的な特徴を明らかにする

。

このように、第5章では、「な」形の語の意味分析を通して、名詞性のカタカナ語に「～な」が接続することによって付与される意味と語性を検討する。

第6章では、形容動詞の日本語と韓国語の対応において見られるずれについて考察する。

日本語の形容動詞「～だ・～な」の韓国語の対応は、一般に、「～hada・～han」である。逆に、韓国語の「～hada・～han」の日本語の対応をみると、「～だ・～な」だけではなく、連体修飾形に「～の」の形も現れる。

本章では、韓国語の形容詞「永遠han」の日本語の対応において、「永遠の」と「永遠な」の混同が見られることに注目し、その対応関係等について考察を進める。

まず、韓国人と日本人に、韓国語の「永遠han」の日本語の対応はどうであるかを質問して、韓国人と日本人の言語の感覚と傾向性を調べる。また、この現象が現れる理由を、他の用例の検討を通して考えてみる。さらに、「永遠な」文が現れる理由を「永遠」が持つ性質とそこに含まれている意味とに関連させて検討してみる。さらに、「永遠な」文を通してこれからの形容動詞の変化と展開の方向を予測してみる。

第7章では、本論文での主張を改めてまとめ、且つこれからの形容動詞研究の展望を述べる。

第2章 形容動詞の研究

1. はじめに

形容動詞とは、形容詞と同じく事物の性質や状態、人間の感覚・感情などを表す自立語で、意味的な性質は形容詞と同じであり、活用は動詞のラ変活用と同じくナリ活用・タリ活用をする日本語の品詞の一つである。

日本語の形容動詞には、文語において「静かなり・まれなり」の「ナリ活用」、「堂々たり・整然たり」の「タリ活用」があり、口語には、「静かだ・まれだ」の「ダ・ナ活用」がある。

このような、文語の「語幹+なり(語尾)」と口語の「語幹+だ(語尾)」は、形態的に「名詞+なり(助動詞)」と「名詞+だ(助動詞)」と同じである。二つの異なる品詞の語が、同じ形態をしているのは、品詞の設定や用法などで混乱を引き起こす可能性があることを示している。

このような形容動詞の設定と用法は、形容動詞を一語と見なすかそれとも、二語と見なすかという問題と、そこからはじまる形容動詞の認定論と否定論の両論化の現象を生み出しており、形容動詞についての研究の主なテーマになっている。

「形容動詞」という名称を初めて用いたのは、大槻文彦(1897)であるが、これは日本語の形容詞が、英語のadjectiveの訳語としての形

容詞との混乱を避ける目的で提案したものである。現代と同じ意味で「形容動詞」という名称を最初に使ったのは芳賀矢一(1904)である。

吉岡郷甫(1912)は形容動詞を口語についても適用しているが、形容動詞が一品詞として定着されたのは、吉沢義則(1932)と橋本進吉(1935)による。

反面、形容動詞を認めない説も現れている。

佐久間鼎(1940)は形容詞と形容動詞を一括して「性状語」と呼んだ。

否定論の代表的な学者である時枝誠記(1950)は、形容動詞を全面的に否定して語幹を体言とし、語尾を断定の助動詞とすべきであると主張した。

本章では、「形容動詞」という、日本語だけが持っている独特な名称が生まれた理由と過程について検討しており、形容動詞の種類と用法を中心とした形容動詞の展開と変遷についても検討する。また、形容動詞の研究において認定論と否定論に代表される形容動詞論を、先行研究を通して考察し、今後の形容動詞の研究方向を見通す契機にしたい。

2. 形容動詞の概念

2.1. 形容動詞という名称

「形容動詞」という名称を初めて用いたのは、大槻文彦(1897)であり、著書『広日本文典別記』で次のように述べている。

英語ノAdjectiveハ、大抵、名詞ニ冠ラセテ、其形狀性質等ヲイフ。我ガ形容詞モ、名詞ノ形狀性質等ヲイフハ、相同ジケレドモ、語ノ成立ニ至リテハ、甚ダ相異ナリテ、語尾ニ、変化アリ、法アル事、動詞の如クニシテ、且、名詞ノ後ニ居テ、文ノ末ヲモ結ベリ。(羅匈、仏、獨、等ノ形容詞ニハ、変化アリ、且、或ハ、名詞ノ後ニ用キルモアリ、然レドモ共ニ文ノ末ヲ結ブコトハ、無キガ如シ、)サレバ我ガ形容詞ハ、Attributive verbトイフベク、直ニ「形容動詞」ト命名セバ、Adjectiveノ譯語ノ形容詞ト混ゼズシテ可ナラム、トモ考フルナリ。

大槻文彦(1897)は、日本語の形容詞は述語として用いられるなど、用法が動詞に以ているため、形容動詞と呼び、英語のadjectiveとの混乱を避けようとした。つまり、日本語における形容詞を、adjectiveの訳語として用いられる形容詞と区別するため、形容動詞という名称で呼んだので、現代の形容動詞の概念とは異なる。

現代と同じ意味で「形容動詞」という名称を用いたのは、芳賀矢一(1904)で、『中等教科明治文典』で次のように述べている。

形容詞のありに連りて、動詞の如く各種の助動詞の連るものを形容動詞と命名し、形容詞の一部として説けり。性質に於ては形容詞にして、活用¹に於ては動詞なればなり。立派なり、詳なりの如き、從來多くは立派に詳にの副詞よりありに連るものと説けり。この相違に注意せられんことを望む。

芳賀矢一(1904)は、形容動詞を、一部の副詞(情態副詞)に「あり」

が付いてでき上がったものとして、ラ行変格活用をするナリ活用・タリ活用を一括して形容動詞とした。形容動詞という名称は、形容動詞が性質は形容詞と等しく、活用は動詞と等しいからと説いているが、まだ一品詞としては独立させず、形容詞の一部として扱った。

吉岡郷甫(1912)は、形容動詞という名称を口語についても適用させたが、形容動詞という名称が定着したのは、吉沢義則(1932)・橋本進吉(1935)の説が発表されてからである。

形容動詞という名称を使っても、山田孝雄(1908)は「カリ活用」だけを形容動詞としており、研究者によって異なりも見られる。また名称に対しても異議が唱えられ、鶴田常吉(1924)は形容動詞の名称が適当でないということを指摘して「別格形容詞」と命名した。小林好日(1922)は、形容動詞を「準形容詞」と命名した。

2.2. 形容動詞の種類と活用

2.2.1. 形容動詞の種類

形容動詞は、もと、「静カニ」「堂々ト」などの一部の副詞に、動詞「アリ」をつけて「静カニアリ」「堂々トアリ」となり、さらに縮約(母音脱落)して、文語の形容動詞「静ナリ」「堂々タリ」になったものである。それが漢語の流入によって、属性概念の漢語に「～ナリ」「～タリ」が接続した形態に発達し、後には「ダ・ナ活用」になって、今日の形容動詞の形態に定着したのである。

形容動詞は、意味的には事物の性質・状態を表わす自立語で、活用があるという特徴を有するが、文語と口語で活用が異なる。

文語の形容動詞にはナリ活用とタリ活用といった二種類が認められ、「静かなり・稀なり」「堂々たり・整然たり」などがそれぞれにあたる。一方、口語の形容動詞には「ダ・ナ活用」と呼ばれる「静かだ・稀だ」などがある。

文語の形容動詞ナリ活用・タリ活用に属する語例を整理したのが〈表1〉である。

〈表1〉 文語の形容動詞の種類

ナリ活用			タリ活用	
うらかなり	がすかなり	なごやかなり	峨々たり	赫々たり
さだかなり	すこやかなり	安らかなり	蕭々たり	堂々たり
をかしげなり	平らかなり	あわれなり	沈々たり	漫々たり
あえかなり	清らなり	静かなり	漫々たり	冥々たり
豊かなり	珍かなり	正直なり	颯々たり	平然たり
美麗なり	健康なり	安易なり	泰然たり	自若たり
温和なり	適当なり	遙かなり	悄然たり	清明たり
健なり	急なり	切なり	渺茫たり	整然たり
愚なり	急なり	異なり	惨たり	確たり
稀なり				

橋本進吉(1935)の以前の研究ではカリ活用を形容動詞と認める見解もあるが、現在の研究では、カリ活用は形容詞の範疇とし、ナリ活用とタリ活用とを、形容動詞の範疇とするのが一般的である。

形容動詞の発達に目を向けると、和語の「副詞+アリ」の形態から始まった和語の形容動詞から漢語、更にカタカナ語にまで形容動詞の

範囲を広げている。

口語における和語・漢語・カタカナ語の形容動詞の例を挙げると次のようである。

和語形容動詞

あべこべだ	あやふやだ	ありのままだ	おおげさだ
おおまかだ	おろそかだ	きちょうめんだ	きまじめだ
きらびやかだ	きゃしゃだ	いきだ	うつろだ
かすかだ	きざだ	こっけいだ	淑やかだ
しなやかだ	ぞんざいだ	つぶらだ	のどかだ
遙かだ	密かだ	ぼうべんだ	むやみだ
ろくだ 等			

漢語形容動詞

安全だ	適宜だ	固有だ	勇敢だ	簡単だ	悲惨だ	正常だ
壮大だ	陰気だ	同等だ	残酷だ	優勢だ	危険だ	非常だ
整然だ	素朴だ	円滑だ	独自だ	柔軟だ	優美だ	強烈だ
敏感だ	盛大だ	大事だ	円満だ	特別だ	詳細だ	良好だ
緊急だ	貧困だ	正当だ	大胆だ	穏和だ	特有だ	真実だ
冷酷だ	軽快だ	貧弱だ	多様だ	対等だ	簡易だ	鈍感だ
親切だ	精密だ	軽率だ	貧乏だ	単調だ	怠慢だ	簡潔だ
熱心だ	迅速だ	切実だ	元気だ	複雑だ	痛切だ	多忙だ
頑固だ	薄弱だ	精巧だ	善良だ	健全だ	便利だ	好調だ
明瞭だ	簡素だ	漠然だ	清純だ	早急だ	厳密だ	未熟だ
巧妙だ	明朗だ	高尚だ	未練だ	孤独だ	猛烈だ	強情だ

明白だ 等

カタカナ語形容動詞

アドバンスト(advanced)だ

ハード(hard)だ

エレガント(elegant)だ

オリジナル(original)だ

オープン(open)だ

パワフル(powerful)だ

トロピカル(tropical)だ

クリア(clear)だ

デジタル(digital)だ

シンボリック(symbolic)だ

シンプル(simple)だ

ストレート(straight)だ

テクニカル(technical)だ

セキュア(secure)だ

エスニック(ethnic)だ

ダイナミック(dynamic)だ

メイン(main)だ

スタティック(static)だ

アカデミック(academic)だ

トータル(total)だ

ベーシック(basic)だ

ミステリアス(mysterious)だ

ウェット(wet)だ

エキゾチック(exotic)だ

シック(chic)だ

カラフル(colorful)だ

コンビニエント(convenient)だ

キュート((cute)だ

コンパクト(compact)だ

シアトリカル(theatrical)だ

クール(cool)だ

スパイシー(spicy)だ

スケーラブル(scalable)だ

マシー(mussy)だ

グローバル(global)だ

ドラマティック(dramatic)だ

ソフト(soft)だ

ユーモア(humor)だ

ハイグレード(highgrade)だ

タイムリー(timely)だ

バーチャル(virtual)だ

クラシカル(classical)だ

ナイス(nice)だ

マニアック(maniac)だ

ホット(hot)だ	ロマンチック(romantic)だ
フォーマル(formal)だ	ビッグ(big)だ
リズムカル(rhythmical)だ	モバイル(mobile)だ
フリー(free)だ	メモリアル(memorial)だ
ハンサム(handsome)だ	ヤング(young)だ
メタリック(metallic)だ	ビジュアル(visual)だ
レトロ((retro)だ	パーソナル(personal)だ
フローラル(floral)だ	リアル(real)だ
プライベート(private)だ	ミニマル(minimal)だ
ピュア(pure)だ 等	

2.2.2. 形容動詞の活用

形容動詞は、文語と口語の二つの形態に分けられており、その活用形も異なる。形容動詞の活用の展開過程を検討してみる。

芳賀矢一(1904)は、〈表2〉のようにカリ活用も形容動詞の範囲に含めて、活用図をあげている。

〈表2〉 芳賀矢一の形容動詞の活用図

	カリ活用	ナリ活用	タリ活用
未然	よから	詳なら	整然たら
連用・終止	よかり	詳なり	整然たり
連体	よかる	詳なる	整然たる
已然・命令	よかれ	詳なれ	整然たれ

(『中等教科明治文典』(1904)巻二により)

〈表2〉で見た通り、カリ活用・ナリ活用・タリ活用はいずれもラ行変格のように活用し、その分担もラ行変格と全く同じである。

三矢重松(1908)は、形容詞を二類に分け、第一類にク活用・シク活用を、第二類にナリ活用・タリ活用・カリ活用を収め、〈表3〉のように示している。

〈表3〉 三矢重松の形容詞の活用図

	第一変化		第二変化		第三変化		第四変化		第五変化	
ク活	○		く	バ ト	テ シテ	し	ヤ	き	カ カナ ヲ	○
シク活	○		しく	トモ	ヤ	し	ナ	しき		○
ナリ活	なら	バ ズ ム マシ シム	になり	キ	に	なり	モ カ シ	なる の	ニ モ ガ	なれ
タリ活	たら		とたり	ケリ	ゾ	たり		メ リ ラン ベシ ラシ マジ		ヨ ヤ カシ
カリ活	から		かり	シ	と	かり		かる		かれ
				ヌ	バ カ リ					

(『高等日本文法』(1908)により)

三矢(1908)は、カリ活用の第二変化に「く」を認めず、ナリ活用の第四変化に「の」を認めている。

吉岡郷甫(1912)は、形容詞の中に形容動詞を入れており、「固定的属性を表すこと形容詞の如くで、而も動詞の如く活用する」と規定している。そして、「甲:第一種形容動詞」にカリ活用を、「乙:第二種

形容動詞」にナリ活用とダナ活用とデス活用を「丙:第三種形容動詞」にはタリ活用を分類している。

〈表4〉 吉岡郷甫の形容動詞の活用図

		甲（第一種）	乙（第二種）	丙（第三種）
文語	語幹	おほ(多)=	しづか(静)=	さん(燦)=
	否定形	=から	=なら	=たら
	連用形	=かり	=なり	=たり
	終止形	(=かり)	=なり	=たり
	連体形	=かる	=なる	=たる
	既然形	(=かれ)	=なれ	=たれ
	命令形	=かれ	=なれ	=たれ
口語	推量形	=から	=だら(う) =でせ(う)	
	連用形	=かり	=だつ(た) =でし(て・た)	
	終止形	—	=で	
	連体形	—	=だ =です	
	假定形	—	=な	
	命令形	(=かれ)	=なら・なれ	

（『文語口語対照語法』（1912）により）

吉岡(1912)は、「なら」活用と「だら」活用を一系列にしている。
形容動詞を新しい品詞として認める吉沢義則(1932)は、形容動詞の活用を、次のように示した。

〈表5〉 吉沢義則の形容動詞の活用図

	第一活用	接辞	第二活用	接辞	第三活用	接辞	第四活用	接辞	第五活用	接辞	第六活用	接辞	第七活用	接辞
カリ	から	バズ	かり	キ	かり	ト	かる	メリ	かれ	バ	かれ	ヨ	く	テ
ナリ	なら	ム	なり	ケリ	なり	ヤ	なる	ベシ	なれ	ド	なれ	ヤ	に	シテ
タリ	たら	シム	たり	ツヌ	たり	ナカシ	たる	ラシマジ	たれ	ドモ	たれ	カシ	と	

（「所謂形容動詞に就いて」『国語国文』（1932）により）

吉沢の活用図は、三矢の活用表の第二変化を第二活用と第七活用にわけた点に、相違があり、第七活用は中止法と副詞法をつかさどるものである。

橋本進吉(1935)は、文語形容動詞を第一・二・三種に分け、その中の第一種形容動詞は形容詞の補助活用と見なし、形容動詞から除外すべきであると主張する。橋本の文語の形容動詞の活用図を見てみると次のようである。

〈表6〉 橋本進吉の文語の形容詞と形容動詞の活用図

	形容詞	第一種形容動詞	第二種形容動詞	第三種形容動詞
未然形	面白く バ		静かなら バ	判然たら バ
		面白から ム ズ	静かなら ム ズ	判然たら ム ズ
連用形		面白かり キ ケム	静かなり キ ケム	判然たり キ ケム
	面白く トモ		静かなり トモ	判然たり トモ
	面白く テ シテ		静かに テ シテ	判然と テ シテ
	面白く イフ ナル		静かに イフ ナル	判然と イフ ナル
終止形	面白し	(多かり)	静かなり	判然たり
連体形	面白き 事 ナリ	(多かる)	静かなる 事 ナリ	判然たる 事 ナリ
		面白かる ベシ ラム	静かなる ベシ ラム	判然たる ベシ ラム
已然形	面白けれ バ ド	(多かれ バ) ド	静かなれ バ ド	判然たれ バ ド
命令形		面白かれ	静かなれ	判然たれ

※()の中のは古代語に用いられたもの

(橋本進吉「国語の形容動詞について」(1935)により)

第一種の活用には、中止法・副詞法を表わす形がない。これは形容詞の活用において不足した部分を補うために用いられたもので、形容詞によって表わされる場合は、第一種の活用を用いる必要がない。第二種・第三種の形容動詞は、第一種形容動詞とは対照的にそれ自体の活用体系の中に必要な用法を備えている。

口語の形容動詞「ダ・ナ活用」における活用形式は、「な」の系統のものと「だ」の系統のものを別にして取り扱うのが普通である。

山田孝雄(1954)と松下大三朗(1961)における口語の形容動詞の活用
を見てみる。

〈表7〉 山田孝雄の口語の形容動詞の活用図

	未然形	連用形	終止形	条件形
静か(丈夫)	なら	○	な	なら
静か(丈夫)	○	○	だ	○

(『日本口語法講義』(1954)により)

〈表8〉 松下大三朗の口語の形容動詞のナ・ダ活用の活用図

特別ラ行変格	静か	ならバ	なり	なり、	なコト	なれば
同	静か	だらウ	ツ だり	タ だり	だコト	だれ
ニ活	静か	○	にテ	○	○	○

(『標準日本口語法』(1961)により)

口語の形容動詞において、「な」の系統は「にあり」から出たものであり、「だ」の系統は「にてあり」から出たものであるから、語源が異なる。終止する場合は、「静かだ」であり、体言に連なる場合は「静かな事」である。助動詞「ウ」「タ」につづく場合に「静かだらウ」「静かだつタ」であり、仮定の「バ」につづく場合に「静かなれば」である。

現代の口語の形容動詞においては互いに重複することなく、それぞれ他の不足部分を補って一つの活用形式として形成したと見るべきものである。

橋本進吉(1935)は、口語の形容動詞について次のように説明してい

る。

〈表9〉 橋本進吉の口語の第一種形容動詞の活用図

未然形	連用形		ウ音便形	終止形	連体形	假定形
白からウ	白く	白かつタ	白うゴザイマス	白い	白い	白ければ
苦しからウ	苦しく	苦しつタ	苦しうゴザイマス	苦しい	苦しい	苦しれば

(橋本進吉「国語の形容動詞について」(1935)により)

口語の第一種形容動詞の活用は、未然形と連用形（音便形）が主に用いられるが、未然形は口語の形容詞の欠けた部分を補うために用いられており、連用形は形容詞の連用形とは違う用法に用いられる。命令形は、「よかれあしかれ」「遅かれ早かれ」など、特殊の語において用いられるだけで、一般の活用形式には用いられない。

従って、第一種の形容動詞は、口語の形容詞の活用形式の中に融合したと見てよいのである。

〈表10〉 橋本進吉の口語の第二種形容動詞の活用図

未然	連用	終止	連体	假定	命令
静かだらウ	だつタ で に	だ	な	なら	○

(橋本進吉「国語の形容動詞について」(1935)により)

橋本進吉は第二種形容動詞だけの特徴を次のように整理した。

- 一、 七つの違った活用があり、その外に語幹が用いられることがある。
- 一、 活用は、ダ行とナ行が混じっている。
- 一、 副詞的修飾語及び補語として用いる独特の形(「一に」)がある。
- 一、 終止形と連体形が形を異にする。
- 一、 仮定形には必ずしもバを要しない。
- 一、 助詞「て」の合体した特別の形「一で」があって、「て」をつける形がない。

第三種形容動詞に属する「堂々たり」「確乎たり」のような語は、口語で用いる場合には「堂々としてゐる」「堂々とした」「確乎とした意志」のように「堂々と」「確乎と」の形で副詞として動詞「する」と接続した形態で用いられるのが一般的である。

以上、形容動詞の活用の展開過程を検討してみた。文語形容動詞と口語形容動詞の活用を整理して、表にしたのが<表11><表12>である。

<表11> 文語の形容動詞の活用図

活用	語例	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ナリ活用	静かなり	しづか	-なら	-なり -に	-なり	-なる	-なれ	-なれ
タリ活用	堂々たり	だうだう	-たら	-たり -と	-たり	-たる	-たれ	-たれ

文語の形容動詞のナリ活用・タリ活用は動詞のラ行変格と同じ活用をする。ただ、連用形の場合は、ナリ活用・タリ活用にはラ行変格に

ない「く・に・と」の形態の語尾もあって、中止法と副詞法を担う。

一方、口語の形容動詞は「にあり」から出た「な」の系統のものと「にてあり」から出た「だ」の系統のものがある。これらが、口語において重複することなく、一つの活用形式として「ダ・ナ活用」ができたのである。

〈表12〉 口語の形容動詞の活用図

語例	語幹	活用形					
		未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
静かだ	静か	だろ	だつ で に	だ	(だ) な	なら	○
愉快だ	愉快						

連体形の「な」は、「だ」に代わる余地が少なかったから、「な」として固定された。文語の已然形は口語では仮定形に変っているが、活用形は変らない。終止形と連体形は、「ダ・ナ活用」という名の通り、系列が異なり、語尾形態も異なるから、活用表に終止・連体両形を別に設けなければならない。

3. 形容動詞についての研究の展開

形容動詞論の歴史は、富士谷成章(1778)が『あゆひ抄』の「装図」¹⁾において、装の一種に「在(ありさま)」を立ててから始まり、

絶えず議論の対象として扱われてきたのである。

「形容動詞」という名称をはじめて用いたのは、芳賀矢一(1904)であるが、形容動詞を形容詞の一部として扱った。

山田孝雄(1908)は、形容詞のカリ活用(「同じからず」「長かるべし」など)を形容動詞とした。

松下大三郎(1928)は、「遠し」「静かに」「堂々と」などを形容動詞と呼んでいるが、一つの品詞にたてず、動詞の中に含めている。「遠かり」「静かなり」「堂々たり」などは、静止性の動作動詞として分類している。

形容動詞を一つの品詞として認めたのは、吉沢義則(1932)である。吉沢によると、形容動詞はその形態や助動詞と接続する点において動詞的性質を有する一方、副詞法を有する点において形容詞的性質を有

1) 『はゆひ抄』の「装図」

	装				
	事		状		
	事	孔	在	芝	鋪
	越	有	遥	早	恋
本	こ	あ	はるかな	はや	こひ
末	ゆ	り	り	し	し
靡引	ル	る	る	き	き
往	え	り	り	く	ク
目	え	れ	れ		
来	え・や	ら	ら		
靡伏	レ				
伏目				け	ケ
立本				か	カ
	有末有靡		有末有引		有末有靡

「装」は用言、「事」は動詞、「状」は形容詞のことを表す。

「芝」はク活用、「鋪」はシク活用、「在」はナリ活用のことを表す。

する、動詞でもなく形容詞でもない一品詞として独立させるべきであると説く。

橋本進吉(1935)は、吉沢の言う第二種・第三種活用(ナリ活用・タリ活用)は形容動詞として認めながらも、第一種形容動詞(カリ活用)は形容動詞から除外した。すなわち、「よく」「苦しく」は形容詞「よし」「苦し」の活用形であって、「よかり」「苦しかり」の活用ではないとする。「よかり」「苦しかり」は、「よし」「苦し」という形容詞の活用の足りない点を補うための補助活用であるとするのである。この橋本の考えが一般に受け入れられ、形容動詞を一品詞として扱うようになったわけである。

ただ、橋本の説以後にも、形容動詞を認めない立場をとる学者も多い。佐久間鼎(1940)は、形容詞と形容動詞を一括して性状語と呼んだ。時枝誠記(1950)は、「静かだ」「丈夫だ」は一語ではなく、「静か」「丈夫」を一語として考えており、辞書でもその形が項目として採録されているので、「静か」「丈夫」と「だ」とを切り離して考えるべきであるとする。特に、「健康」を名詞と認めるか形容動詞の語幹と認めるかという問題は、名詞の意味論に属する問題で、ともに体言として扱うべきであるとする。

形容動詞論の展開過程をまとめたのが<表13-1><表13-2>である。

<表13-1>に提示した形容動詞に関する研究史は、水谷静夫(1951)の形容動詞に関する研究史の略年表を参考して、再構成したものであり、<表13-2>は、<表13-1>以後の形容動詞の研究について整理したものである。

〈表13-1〉 形容動詞史の略年表 I

年度	学者	学 説
安永7 (1778)	富士谷成章	『あゆひ抄』 最初に「形容動詞」に属する語の存在に注目した。状の在という目を立てて、「遥かなり」を例に挙ぐ。カリ活用を「芝」「舗」に収める。タリ活用はとりあげなかった。
安政3 (1856)	黒沢翁満	『言霊のしるべ』 カリ活用 をク・シク活の再活用とみる。 タリ活用では<辞>の「たり」を指定の助動詞の「たり」と同じものと認める。
慶応3 (1867)	鈴木朗	『言語四種論』 形容詞とカリ活用とアリ(ラ変)とを一括して「形状ノ詞」とし、「作用ノ詞」と区別する。
明治7 (1874)	田中義廉	『小学日本文典』 「良キ」「美シキ」「見ルベキ」「学ビタル」「真(砂)」「初(陣)」「暖ノ(春)」「大ナル(家)」などを「形容詞」とする。
明治9 (1876)	大矢透	『語格指南』 「形状言」を第一種(ク活用、シク活用、ケク、ケシ、ケキ活用)と第二種類(カリ活用、ナリ活用、タリ活用)に分ける。
明治24 (1891)	富樫広陰	『詞玉橋』 動詞の「あり」を「変格ノ詞」の一として、「説動用詞」とする。 カリ活用を形成する「あり」に注目し、「属詞」とする。
明治30 (1897)	大槻文彦	『広日本文典別記』 日本語の形容詞を英語のadjectiveと混同しないために考えた命名で、「形容動詞」という語を創案した。

年度	学者	学 説
明治33 (1900)	岡沢鉦次郎	『初等日本文典』 ナリ活・タリ活の「語幹」部分を体言に摂し、「準体言」と名づく。
明治37 (1904)	芳賀矢一	『中等教科書明治文典』 初めて「形容動詞」の品詞目を立て、形容詞条に附設した。「形容動詞」の名称をカリ活用、タリ活用、ナリ活用の語を指すのに用いる。
明治41 (1908)	山田孝雄	『日本文法論』 形容詞連用形語尾「く」に形式用言「あり」が付いて「かり」になった。「なり」「たり」を説明動詞とする。
明治41 (1908)	三矢重松	『高等日本文法』(明治41・大正15) 形容動詞について言及した。ク活 シク活を形容詞甲とし、ナリ活 タリ活を形容詞乙とする
大正 元年 (1912)	吉岡郷甫	『文語口語対照語法』 形容動詞と名詞に指定の助動詞のついたものとの識別基準として①「が」「の」「に」「を」 ② 連体修飾語③「甚だ」「大層」をつけるかどうか、を挙げる。
大正11 (1922)	山田孝雄	『日本文法講義』 「かり」を形容存在詞とし、「なり」「たり」を説明存在詞とする。ナリ活用 タリ活用は副詞に説明存在詞を接続したもので、用言に含めさせる。
大正11 (1922)	小林好日	『標準語法精説』 「静かに」は副詞、「静かな・だ・です」は準形容詞とする。
昭和3 (1928)	安田喜代門	『国語法解説』 カリ活用は形容詞の存在態であり、ナリ活用・タリ活用は体言と副詞に従属動詞の「なり」「たり」が接続したものである。

年度	学者	学 説
昭和6 (1931)	松尾捨次郎	『国文法論纂』 ナリ活用・タリ活用語幹を<属性的概念を表わす名詞>とする。
昭和7 (1932)	吉沢義則	『国語国文』 「所謂形容動詞に就いて」 1 ナリ活・タリ活のナリ、タリは 用言として語幹用法は「遥かに」「つくづく」とから「に」「と」を落としたものとする。 2 所為形容動詞は活用から見れば動詞である。 3 所為形容動詞は一種の用言として新品詞と認める。
昭和9 (1934)	徳田浄	『国学院雑誌』 「カリ」「ナリ」「タリ」などの語尾を持つ語は動詞、「ク」「ニ」「ト」の語尾を持つ語は副詞とする。
昭和10 (1935)	橋本進吉	『言語学論文集』 「国語の形容動詞について」 口語の形容動詞についても言及し、文語の形容動詞の第二種・第三種は承認しても、第一種は形容詞の補助活用として形容動詞から除外する。
昭和15 (1940)	佐久間鼎	『現代日本語法の研究』 「性状語」を立て、第一種(イク活)-アカ(赤)・ウレン(嬉)、第二種(ナダ活)-スキ(好)・ユカイ(愉快)、第二種変種-オナジ・オンナジ(同)とわける。
昭和17 (1942)	三尾砂	『話言葉の文法』 連体修飾語に用いられるものを「形容詞」とし、「い」形容詞(形容詞)、「な」形容詞(形容動詞)、「の」形容詞(連体形が「の」となる形容動詞)などとする。 形容動詞語尾のうち「-な」「-に」のみを「本来の語尾」と認める。
昭和23 (1948)	宮田幸一	『日本語文法の輪郭』 口語形容動詞を「無活用動詞」に「格助詞」「-で」「-な」、「後続動詞」「だ」のついたものとする。

年度	学者	学 説
昭和25 (1950)	時枝誠記	『日本文法口語編』 形容動詞を認めない。 形容動詞を「詞」である「体言」に「辞」である「指定の助動詞」が付いたものとする。

形容動詞の研究史の略年表を通して、形容動詞の展開と変化、そして研究の方向を確認することができる。

初期の形容動詞の研究は、活用を中心とした形容動詞の形成についてのものであるが、吉沢義則と橋本進吉などは形容動詞の概念を定立させており、その後の形容動詞の研究は、意味論的な面で取り扱われている傾向が強いということがわかる。

〈表13-2〉 形容動詞史の略年表 II

年度	学者	学 説
昭和27 (1952)	金田一京助	『辞海』形容動詞を立てず「準名詞」とした。
昭和30 (1955)	金田一春彦	『世界言語概説』(1955)形容詞に「-イ」型と「-ナ」型を設定している。 「日本語のアクセント」『講座現代国語学』(1957) 単語とアクセントとの関係から、形容動詞<シズカダ><ゲンキダ>などを二つの単語と認めるべきだと述べる。
昭和30 (1955)	亀井孝	『概説文語文法』 形容詞の中で形容動詞を解消させ、「完全形容詞」(「よし」「よかり」の類)、「不完全形容詞」(「しづけし」の類)、「補充形容詞」(いわゆる形容動詞の「ナリ」活用と「タリ」活用)とわけている。

年度	学者	学 説
昭和30 (1955)	林和比古	『続日本文法講座1』 「語幹用法」を「準体形」とする。 口語形容動詞語幹を一単語と認め、形容動詞解消論に 踏み切る。
昭和34 (1959)	森重敏	『日本文法通論』 擬態語とナリ活用・タリ活用(活用語尾をも含む)とを 合せて「副詞」としている。
昭和39 (1964)	春日和男	『講座現代語6 口語文法の問題点』 形形容動詞は副詞陳述を表わす語が加わったものでは ある。 意味(実質と所属)・接続(格助詞の有無)・修飾(連用修 飾語がつくかと連体修飾語がつくか)・活用形式の特異 性などを認めて、品詞辯別に適用している。
昭和39 (1964)	桜井光昭	「『名誉の』と『名誉な』」『口語文法講座3』 形容動詞論が文法研究の上で、いかに展開されたか、 について検討する
昭和39 (1964)	塚原鉄雄	「『暖かい』と『暖かだ』」『口語文法講座3』(1964) 「形容動詞と体言と副詞」(1970) 体言-名詞に、三種の意味機能「モノ」と「サマ」と「 コト」があり、サマ(様態表現)にあっては、形容動詞 の語幹と認定すべきである。
昭和40 (1965)	永野賢	『口語文法講座 6 用語解説編』 形容動詞語尾を辞とし、語幹を詞として分割する。
昭和40 (1965)	福島邦道	『口語文法講座 2 各論研究編』 形容詞の語幹用法を中心に上げ、形容詞語幹・名 詞・副詞などの用法と比較し、形容動詞語幹には著し い「ゆれ」のあることを指摘している。

年度	学者	学 説
昭和48 (1973)	柏谷嘉弘	「形容動詞の成立と展開」『品詞別日本文法講座』 形容動詞は論理的に否認されても、依然として丸暗記 教育の典型として、生き続けるのであろう。
昭和35 (1977)	佐藤喜代治	『日本文法要論』 形容動詞は副詞陳述を表わす語が加わったものと見た 方が妥当である。
昭和59 (1984)	小島俊夫	『研究資料日本文法』 「形容動詞とは何か」 形容動詞論が文法研究の上で、いかに展開されたか、につい て検討する
昭和61 (1986)	鈴木英夫	『国語学論集』 「形容動詞をめぐる二、三の問題」 体言の中、情態性体言は形容動詞の語幹・副詞にな る。 情態性体言の連体修飾形「ナ」と「ノ」の比較する。
平成11 (1999)	小松英雄	『日本語はなぜ変化するか』 形容動詞の連用形は副詞として、連体形は連体詞と認 めるのが妥当である。

4. 形容動詞論

形容動詞に対する研究は、主に、形容動詞を一品詞と認めるか否かという観点から、形容動詞の認定論と否定論の立場で問題点を指摘する、というタイプの研究が多い。

形容動詞について肯定的な立場には、大矢透・芳賀矢一・吉岡郷甫・三矢重松などがある。特に吉沢義則・橋本進吉は、形容動詞の特

設論を主張している。否定的な立場には、特設論以前は岡沢鉦次郎・山田孝雄・松下大三朗などがあり、特設論以後は時枝誠記・水谷静夫・塚原鉄雄・山崎良幸などがある。

4.1. 特設論

4.1.1. 吉沢義則(1932)

吉沢は「所謂形容動詞に就いて」で次のような三つの問題点を取りあげ、形容動詞を新しい品詞として立てることを主張した。

- 一、 ナリ活・タリ活のナリ・タリは助動詞か活用語尾か。
- 二、 所謂形容動詞は形容詞か動詞か。
- 三、 所謂形容動詞は一品詞として動詞・形容詞より独立せしむべきか。

「一」について吉沢は、「静かに」「賑かに」を「静か+に」、「賑か+に」と解されるべきではなく、「静かに」「賑かに」とすべきであると論じ、その根拠を次のように述べた。

静か・賑かといふ語はそれ自體で獨立に使はれることがあるだらうか。いつでも静かに・賑かにといふ形即ちにに導かれた形で用ひられてゐるではないか。尤もこの語の類には「遙かへだたつて」とか「つくづく見てゐる」のように、にやとに導かれることなくして使はれる場合のあるものも無いではないか。そ

れらも歴史的に考へて、後世にやとが落脱した第二次的な略體であつて、やはり遙かに・つくづくとを本體と認なければならぬ。靜かに・賑かになどにはまだその略體は發達してゐないから、必ずに・さ・だ等他の語に結合した形、即ち靜かに・靜かさ・靜かだ等の形でなければ使はれないのである。さうした形でなければ用ひられないとすれば、その結合した形を一單語として認なければならぬではないか。

吉沢は、「靜かに」「賑かに」など、この種の語は副詞的修飾語が加えられるから、体言に助動詞「なり」の接したものではなく、用言として一語と認めるべきであるとした。語幹用法は、本来「遙かに」「つくづく」であつたものが「に」「と」をおとした形態である。「靜かなり・賑かだ」は、その形でなければ使われないから完全な一語であつて、「なり・だ」は助動詞でなく、語尾であると述べた。

「二」については、形態上、ラ変と同じ活用をするカリ活・ナリ活・タリ活は、動詞であるとした。

文法は形態の學問である。言語形態とその意義との交渉が不完全だから、餘儀なく品詞の分類に職能や意味を參酌するのではあるけれども、形態上の約束が完全に動詞である上は、無論動詞でなければならぬ。

吉沢によると、「家富む／家貧し」と「人有り／人無し」は語彙的意義は相返しているが、文法的には、共に一種の状態を表わしているのであるから、同範疇に属すべきものであり、文法的職能も全く同じ

であるといった。しかし、形態的には、「富む／有り」は動詞であり、「貧し／無し」は形容詞でなければならないといっており、活用においても、形容動詞の活用はラ変と同じであると言われているから、形容動詞はラ変の動詞である。したがって、形容動詞は動詞と認めるべきだといっている。

「三」について吉沢は、形容動詞を一品詞として独立せしむべきであるという見解は、形容動詞を認定する他の学者と同じであるが、その内容においては、異なった見解を示している。

形容動詞を一品詞として立てるという立場の見解について、形容動詞と動詞・形容詞の相違を二つの面で検討している。一つは、助辞類の接続においてラ変動詞と相違が見られることと、もう一つは、形容動詞には中止形がないが、ラ変の動詞には中止形があるということである。

助辞類の接続の相違について、三矢重松(1908)は、

ナリ・タリ・カリ活はすべて動詞に準すべきも、第一変化には受身可能のるつかず。同活第二変化には助動詞完了のつ・ぬ稀に添ふことあり。降りつつ・ありつつのつつ・たり・たしの助動詞も付くことなし。ナリ活のに・タリ活のとを除く外三活ともに助辭て・してにつづかず。第三変化には禁止のな添ふことなきなど、動詞との差を見るべし

と述べている。これについて吉沢は、次のような見解を表している。

言語の使用上には細かく調べて見ると、いろいろ特種な慣例があるやうである。過去の助動詞き・し・シカがカ變サ變の動詞に承

接するのには特殊の慣例があつて、他の動詞に於けるとは違つてゐる。完了の助動詞のツとヌとはそれぞれ承接上の慣例があつて一般的に規則立てることが出来ない。咏嘆の助動詞ナリはラ変の動詞には承接しない。ナリ・タリは共に指定の助動詞であるが、ナリは使役の助動詞に承接することが出来ないが、タリはそれが出来る。明に・斷然とは共に副詞として説かれてゐる言葉であるが、明にはそれが中止に用ひられるとき明にてとも明にしてとも云はれるであるが、斷然とは斷然としてとは云はれるが、斷然とてとは云はれない。かうして同種も言葉でありながら助辭承接上に慣例があつて必ずしも同一ではないのである。…中略…

かういふわけで、この第一の事実があるからといつて、直にラ変の動詞中から引放して、別に一の品詞に据ゑなければならぬといふ理由には數えられないやうである。

吉沢は、形容動詞と動詞・形容詞の用法において、助辭類の接続の相違が現れるのは事実であるが、その相違というのも、動詞また形容動詞の活用の種類によって違いが現れることがあるから、品詞の分類において絶対的な基準になるとは言い難いといった。

所謂形容動詞には中止形がないが、ラ変の動詞には他の動詞・形容詞と同じく中止形を有しているという見解について吉沢は、

この中止形を有たぬといふことは、可なり大きな問題だと思ふ。動詞といはず形容詞といはず、用言は皆一様に中止形を有つてゐて、それによつて文の接續せられることは國語の一つの特色であり、山田孝雄氏はそれを接續詞否定の一理由にも數えてゐられるほどの言語現象である。それ故若し所謂形容動詞が中止形を有た

ないとしたならば、單にラ變動詞から別けられなければならないのみならず、用言全體から別けられなければならぬものかも知れぬ。

と述べながら、大矢透の『語格指南』と三矢重松の『高等日本文典』などには形容動詞の中止形が設けられているとした。大矢透の活用図では、「く・に・と」の連用言であるのが中止形であり、三矢重松の活用図では、ナリ活用・タリ活用の第二変化に「に・と」が中止形であるといっている。

大矢透と三矢重松は次の例で形容動詞に中止法を設けている。

〈表14〉 大矢透と三矢重松の形容動詞の中止法と副詞法

	中止法	副詞法
カリ活用	彼は 善 く此は愕し	彼はよく談ず
ナリ活用	月 明 に星稀なり	明 に知る
タリ活用	風 飄々 として浪澎湃たり	断然 として行ふ

大矢透(1876)と三矢重松(1908)の、カリ活用・ナリ活用・タリ活用にそれぞれ「く・に・と」の活用形を認めるならば、中止法が認められるばかりでなく、副詞法も認めることになる。

吉沢は、形容動詞は助動詞に連続する点において動詞的性質を有し、副詞法を有する点において形容詞的性質をもっているといった。即ち、動詞的性質がありながら動詞ではなく、形容詞的性質がありながら形容詞でもない一種の用言であるから、動詞と形容詞から独立して、一品詞に立てなければならないといっている。

しかし、吉沢は、文語について述べただけで、口語については言及

していない点と、カリ活用と形容詞との連用形が同じく「-く」形態をしていることについて言及しない点など、問題を残している。

4. 1. 2. 橋本進吉(1935)

橋本は形容動詞を文語と口語とに区別して説明した。

まず、文語の形容動詞については、次の三つのことをあげて検討した。

- (一) 三種の形容動詞に、それぞれ中止法及び副詞法に用いられる
ク、ニ、トの活用形を認めた点
- (二) 従来ラ行変格に活用すると見られた形容動詞が、純粹のラ行
変格でなくなり、その活用形の用法に形容詞的の特徴が加
わって、動詞にも形容詞にも収め難き一種の用言となつた
事
- (三) 従来副詞と考えられた多くの語が、形容動詞の活用形の一つ
として取扱われる事となつた事

文語の形容動詞は命令形があることと付き得る助動詞に限られていることは動詞に一致し、語幹の用法と副詞法があることは形容詞と全く同じであるといった。ただ、助動詞の接続の場合、多少制限のある点で、動詞と差異があるともいえるといった。このような事実から、「形容動詞は半は動詞に一致し半は形容詞に一致するもので、その両者の中間に位する」といったが、これは第二種第三種の形容動詞のことであって、第一種の形容動詞は、語幹を用いないことと副詞法を表わす活用形を持たないから、形容動詞から除外すべきであるといった

。その結果、文語の形容動詞について次のように整理した。

- 一、第一種の形容動詞は、形容詞の補助活用と認むべきであり、その活用はラ行変格に収むべきである。
- 一、第二種第三種の形容動詞は、形容動詞として、動詞形容詞に対立する一種の用言とすべきである。
- 一、上の形容動詞は、特殊の活用形式を有し、中止法及び副詞法を表はす特別の活用形(「に」及び「と」)がある。
- 一、「に」及び「と」で終る副詞の中、「-なり」「-たり」の語尾をとって活用し得べきものは、副詞から除外し、形容詞の活用形として取扱うべきである。

橋本は、文語の形容動詞において、吉沢説の第二種・第三種については承認しても、第一種は形容詞の補助活用として形容動詞から除外することを主張した。また、形容動詞の考察の対象を口語にまで広げて検討した。

口語において、第一種形容動詞は、未然形、連用形(音便形)以外は用いられず、命令形も、「よかれあしかれ」「遅かれ早かれ」のような特殊の語において用いられるだけであるから、第一種の形容動詞は、形容詞の活用形式の中に融合したと見てよいといった。

第二種形容動詞は「静かだ・静かな」「丈夫だ・丈夫な」のように「な」系統のものと、「だ」系統のものがあるといった。「だ・な」系は、語源は異なるが、終止形には「静かだ」を、体言形には「静かな」を採用する。助動詞「う」「た」につづく場合には「静かだら

う」「静かだつた」の形態をとり、仮定の「ば」につづく場合は「静かならば」となる。このような活用は、現代の口語においては互に重複することなく、他の欠を補って一つの活用形式を形成したと見るべきである。また、「静かに」「丈夫に」などを副詞と扱っているが、「静かに」「丈夫に」は、副詞ではなく形容動詞の語尾活用の一つと見るべきであるといった。「静かで」「丈夫で」のように、「で」で終るものは、助詞「て」の合体したもので、その用法を見ると、「あたりが静かで、景色がよい」「静かであろうか」「静かでない」のように、中止法、また補助用言「ある」「ない」に連なる場合に用いられる。このように、「静かに」「静かで」のようなものも形容動詞の活用として取り扱うことができるといった。

第三種形容動詞に属する「堂々たり」「確乎たり」のような語が、口語に用いられる場合は「堂々としている」「確乎とした意志」のように「堂々と」「確乎と」のような副詞に動詞「する」が付く用法で、一語として取り扱われえないといった。また、「堂々たる風采」「確乎たる意志」のように、文語の形容動詞の連体形を口語にも用いる例があるが、これは体言に連る場合に限られることであるといった。

以上、口語の形容動詞についての橋本の説を要約すると次のようである。

- 一、文語第一種の形容動詞にあたるものは、口語では形容詞の活用として、その活用形式の中に含ませるべきものである。
- 二、文語第二種の形容動詞にあたるものは、独特の活用を有する一種の用言とする。その結果、「に」で終る副詞の大部分は、この形容動詞の活用形と認められる事となる。この種の

形容動詞は、その活用形式において独特の点があるから、動詞及び形容詞に対立する別種のものとも見てもよいが、又その語の意義や活用が形容詞と類似した所が多い故、これを形容詞と同類のものとして動詞と対立せしめてもよい。

三、文語第三種の形容動詞にあたるものは、口語では、副詞と動詞「する」とによって表はされる故、特別にこれを取扱ふ必要はない。この種の形容動詞の連体形(「一たる」)は口語でも用ゐられる事があるが、これは、純粹の口語の立場からいへば、添詞または副体詞として取扱ふべきものである。

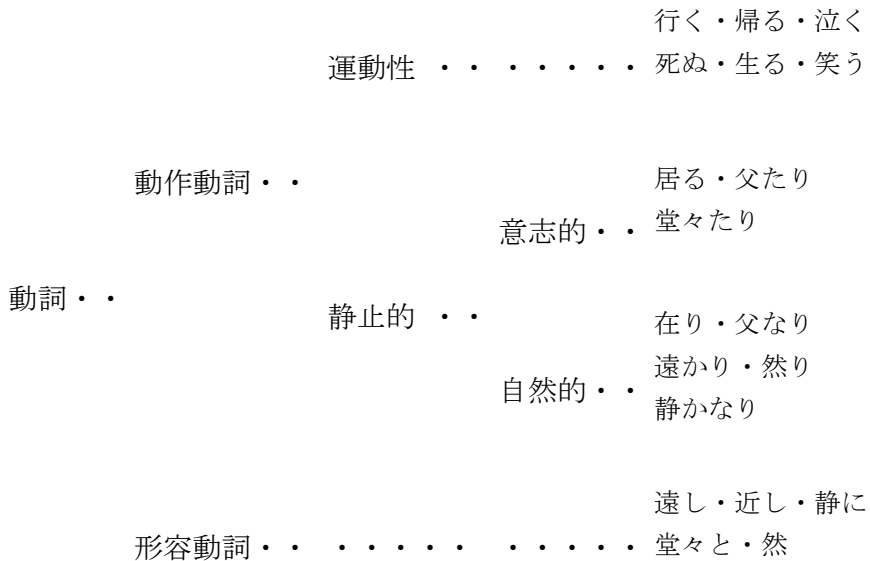
以上のことからわかるように、橋本は、口語の形容動詞として特別に取り扱うべきものは、文語第二種にあたる「静かだ・丈夫だ」の類であるといった。この橋本の説が口語の形容動詞を一品詞としてたてる最初の論になった。

橋本の文法説は、1944年に文部省編の国定教科書『中等文法』が編纂される際、文法論の基礎になる役割をし、一般に橋本の文法が知られるようになった。この『中等文法』以後、形容動詞も一品詞として位置を得るようになったのである。

4.2. 否定論

4.2.1. 松下大三郎(1928)

松下大三郎は、「遠し・静に・堂々と」などを形容動詞と呼んだが、形容動詞を動詞に含めた。松下の動詞の範囲には、形容動詞と共に動作動詞も含めている。



上の図では、「遠し・然・静に」と「遠かり・然り・静かなり」などは同じ語幹でありながら形容動詞と動作動詞に属している。これについて松下は次のように述べている。

「遠し」と「遠かり」は略同義の様でも考へ方が違ふ。「遠し」

は單に状態として考へたのであるが、「遠かり」は最初状態として考へたものを更に時間の形式に当てて靜止的動作に考へ直したものである。

松下は、形容動詞を形容詞として一品詞とすることは不当であると主張した。これは動作動詞と形容詞が大きな共通性をもっているからであるといった。動作動詞と形容詞の共通性は、敘述語になることや修飾語になること、そして連体語になることである。その面において動作動詞と形容詞は全く同一であるといった。

松下の動詞の分類によると、動詞は作用を表す詞の総称で、動作を表すものを動作動詞とし、状態を表すものを形容動詞とした。

〈表15〉 松下大三郎の形容性活用の動作転活用

	原活用クシク活					転活用ラ行変格				
遠	く	く	し	き	けれ	から	かり	かり	かる	かれ
久し	く	く	(し)	き	けれ	から	かり	かり	かる	かれ
可	べく	べく	べし	べき	べけれ	べから	べかり	べかり	べかる	べかれ
	原活用二活					転活用ラ行変格				
静か	○	に	○	○	○	なら	なり	なり	なる	なれ
	原活用ト活					転活用ラ行変格				
堂々	○	と	○	○	○	たら	たり	たり	たる	たれ
	原活用形容性特別変格					転活用ラ行変格				
斯	○	かく	○	○	○	かから	かかり	かかり	かかる	かかれ
然	○	しか	○	○	○	しから	しかり	しかり	しかる	しかれ
(然)	さ	さ	○	○	○	さら	さり	さり	さる	され
(不)	ず	ず	ず	ぬ	ね	ざら	ざり	(ざり)	ざる	ざれ

この活用表の、原活用は語の形容を表すものであるが、転活用は動作を表す語になる。しかし、形容と動作というのは語に対する考え方の相違であって事柄そのものの相違ではないから「遠し」「久し」と「遠かり」「久しかり」は意義の本質は変らないといった。

ク・シク活、ニ活の語は動作性転活用を有するが、ト活は「堂々」「煌々」「決然」などの象形的な語だけが転用するといった。

松下文法では、品詞論の取り扱う対象として、「詞」を取り上げており、一般の文法学者が対象とする単語は品詞論の対象とせず、「原辞論」の対象とした。したがって、普通、文法学者が名詞・動詞を一語とするのとは異なり、「父たり・父なり」も動詞とされるのである。それゆえ、形容動詞が一語か二語かという点には関わりがないことになる。

4.2.2. 時枝誠記(1950)

時枝誠記は『日本文法口語篇』(1950)で形容動詞を否定する理由を展開している。

その理由の第一は、形容動詞語幹を一語と認めることである。つまり、形容動詞の構成は「語幹+助動詞」で、全体が二語となるということである。この点について、時枝は次のように述べている。

「静かだ」「丈夫だ」を一語と考へ、そこからこれを形容動詞といふ一品詞を立てるべきであるといふ考へが出て来るのであるが、これらの語を一語として取扱ふことが、一つの問題として取上げられなければならない。一般に我々の常識的な言語意識として

、「静か」「丈夫」といふような語は、「親切」「綺麗」「勇敢」「大膽」「おだやか」「すなほ」などの語と共に、一語として考へられ、辭書に於いても一般にそのやうに採録されてゐる。これは、文法を取扱ふ上の一の重要な根據である。

時枝がこのように主張する根拠には、言語における単位を「質的統一体としての全体概念」として捉え、その単位の一語を「思想内容の一回過程によって成立する言語表現」と規定し、「本来主体的意識として成立するので、学問的な帰納、分析の操作によってはじめて求められるものでない」といつている。時枝によると、語が独立して用いられるかどうかは、語の認定において本質的な問題ではないということである。したがって、「静かな」「丈夫に」は、「静か」「丈夫」という体言(語形の変化しない語)に指定の助動詞がついたものと考えたのである。また、「親友だ」と「親切だ」の比較における「親友」は名詞的で、「親切」が形容詞的であるとし、「親切だ」に「大変」「非常に」などの連用修飾語を加えることは、意味の上から来ることで、「親友」と「親切」の語性が異なっているからではないといい、これらは、「品詞の別として教授せらるべき事柄ではなくして、名詞の意味論に所属する問題である」といった。

形容動詞を立てない理由の第二として、敬語的表現の問題をあげている。これについての時枝の説明をみても。

形容動詞を立てることの不合理は、その敬語的表現の説明に困難を感ずることである。「静かだ」に對應する敬語的表現は「静かです」となるのであるから、「静かだ」を形容動詞と立てるなら

ば、「静かです」も當然形容動詞としてその活用系列が説明されなければならない筈であるが、國定教科書に於いては、「です」を斷定を表わす助動詞としたため、「静かです」は形容動詞の語幹に「です」が附いたものといふやうに説明せざるを得なくなつたのであるが、もし「静か」を一語と見ることが出来ないといふ立場を固執するならば、「静かです」も當然それだけで一語と見なければならないし、「です」を分離させて、斷定を表はす語であると見ることが出来ない譯である。

「静かだ」に対応する敬語表現「静かです」を、形容動詞語幹に「です」が付いたものと説明するのは、「静かだ」を一語と見る立場と矛盾する。もし、形容動詞の形態が「体言+だ(助動詞)」だとすると、敬語の表現において、「だ」の敬語「です」をつけて、「体言+です(助動詞)」を対応させても矛盾せず、しかも常識的な言語意識に反することもないといっている。

時枝の主張について、北原保雄(1981)は著書『日本語の文法』で、次のように述べて反論した。「辞書にも語幹だけ採録されている」という論に対しては、

辞書が形容動詞を語幹の形で見出しとしているのは、その語幹を一語の体言と考えるからではない。(中略)見出し項目を語幹で立てると、項目を並べる上で、いろいろ具合のいいことがあるからである。

と述べており、「我々の常識的な言語意識」については、

この自然意識というのも、あやしいものである。たとえば、「綺麗だ」と「美しい」とをくらべて、「美しい」は詞であり、「綺麗だ」は詞「綺麗」と辭「だ」とからなる、というような違いが認められるだろうか。時枝の説明に洗脳された先入観を捨てて、「美しい」と「綺麗だ」との表現性を比較してみると、両者はどうしても同じものだとなさざるをえない。

と述べている。北原保雄(1981)は、辞書に採録される語形は、具合のよさによるものであり、それが品詞の設定とは関係ないことを述べ、「美しい」と「綺麗だ」との表現性の比較において、両者は同じものであると断定して、時枝の説に反する立場を表明した。

時枝が形容動詞を否定する理由の一つ、つまり、形容動詞語幹が一語であり、これは常識的な言語意識で、辞書にも語幹だけが採録されているという見解に対しては反論が出され、形容動詞論の争点としていまだに残っている。しかし、もつ一つの理由、つまり、敬語の表現における「だ・です」の対応に対しては、異論が出ていない。従って、これは形容動詞を否定する立場において、根拠がある主張として受け入れられているのである。

4.2.3. 水谷静夫(1951)

水谷静夫は「形容動詞辯」「形容動詞と謂うもの」の二つの論文で、形容動詞を一品詞として特設する根拠がないと主張した。

水谷は「形容動詞辯」で形容動詞という品詞目の不必要性を、次の

三つのことから考察した。

- ① 語の断れ続きの様による吟味
- ② 「形容動詞語幹には格助詞がつかない」事に関する吟味
- ③ 「形容動詞には連体修飾語がつかない」事に関する吟味

①「語の断れ続きの様」については、形容動詞と、動詞・「アレ」・形容詞・名詞+「ダ」・副詞+「ダ」との異同を、「口語で詞が実概念を指す場合の断れ続きの様」33項目をもって比較し、〈表16〉のような結果を出した。

〈表16〉 形容動詞・形容詞と各品詞との異同

比較される 二品詞	形容動詞				形容詞		
	名詞	副詞	形容詞	動詞	名詞	副詞	動詞
差異点の計	4	4	9	20	13	13	11

水谷は〈表16〉の結果から、形容動詞は「用言よりも寧ろ名詞や副詞に一層近い性格」をもつことが明らかとなり、さらに「もし形容動詞活用語尾を辞と見做し、その語幹を名詞なり副詞なりに対当させれば、語の断れ続きの様において高度の類似」が認められるとした。この事実が、形容動詞を否定し、二語に離すべき最強の理由になると主張した。

②「形容動詞語幹には格助詞がつかない」については、「一般には、語幹が独立しない事と格助詞がつかない事とを同一視するらしい

が、これは別の事柄である。」といい、いわゆる形容動詞の語幹が独立した例をあげた。

- (1) あの着物も**派手**、この着物も**派手**、どれにしようかしら。
- (2) まあ**綺麗**！
- (3) あの家かね。**静か**は静かでも、足が不便なんでね。
- (4) 子供の**優秀**を望む両親と婚期にある男女必読の書

(1)～(4)の「派手」「綺麗」「静か」「優秀」などは、現代口語において単独に用いないのが普通であるが、「特殊な場合」はそれだけ用いることもある。この「特殊な場合」に用いられる語は、特定の語に限られず、形容動詞に属する語全般に見られる現象であるといい、このようにいわゆる形容動詞の語幹が単独に用いられており、このことから語幹を一単語と認めていいのではないかといった。さらに、名詞でも文中で単独に用いられることは多くないといって、次の例を挙げた。

- (5) **僕**行くよ。
- (6) **本**読んでたよ。
- (7) **東京・大阪・京都**、これら大都会では……

(5)～(7)のように特殊な場合を除外すると、名詞でも単独に用いられることは多くなく、単独に用いないからといって名詞を一単語と認めないとはいいいにくい。次に、「語幹に格助詞がつきにくく、語幹だけで主語にならない」ということについて水谷は次のように述べてい

る。

我々が客體界に對して認識作用を營むや、對象はすべて概念として把握せられる。また主体の認識は大抵の場合、思考の方便上實體とその屬性とに分節化する。これを言語の表現面に投影して實體と思考したものの概念を主語に表はし、屬性と思考したことの概念を述語に表はすのである。即ち屬性的概念は、屬性が實體から分立し實體の實として再び統合されるものと見るロジックによつて、當然自體視せられ難い。この故に屬性概念を指す語はそれが屢々思考の對象となつて容易に實體視出来る習慣が成り立っている限り、格助詞がつきにくく、殊に主語になりにくいのである。

上のような理由で形容動詞の語幹に格助詞が付かないのは、語幹が一単語を成さないからではなく、格助詞が実体視された概念をさす語につくものだからなのであるといった。

名詞の中で「有徳」「必読」などの漢語が、主語にならず、格助詞も自由につかないことは、これらの語が実体視し難い概念を指す語という思想上の制約からであるとし、このような異質の語まで同類に混じってしまう危険を防ぐ方法は、「形容動詞」を二語に分類して扱う事であるといった。

③「形容動詞には連体修飾語がつかない」については、連用修飾語をとるか連体修飾語をとるかは、被修飾語が用言か体言かの問題ではなく、被修飾語の指す概念が、実体を表わすか、属性を表わすかによるのであると論じた。

これについて名詞が連体修飾語と連用修飾語を共にとる例をあげて説明している。

(8a) 僕の右にある。

(8b) すぐ右にある。

(9a) 彼はすごい封建主義だ。

(9b) 彼はすごく封建主義だ。

(8a)の「右」は「右である場所」という実体視された概念を指すものであり、(8b)の「右」は「ある実体の右」という属性視された概念をさすから、同一の名詞でありながら連体修飾語をとったり連用修飾語をとったりするといった。(9a)(9b)の述語はいずれも抽象名詞を属性的に使っているが、(9a)は述語にも「彼」という実体の意識を失わなかったため連体修飾語をとったであり、(9b)は純粹に属性概念を指すから連用修飾語をとっているのである。これは「封建主義だ」の語性の問題ではなく、言語主義の思考の差が言語に投じた反映に過ぎないといった。

このように述語が実体概念の場合は連体修飾語を、属性概念の場合は連用修飾語をとるのであり、形容動詞の場合は語幹が情態という属性概念を表わすので、連用修飾語をとるにすぎないといった。したがって、連用修飾語をとるかとらないかの基準は、品詞識別の決め手とはならないといった。

以上、水谷は形容動词语幹と名詞との区別の根拠として挙げられる事柄に検討を加えた。その結果、いずれも品詞判別の基準とするには不十分であることを明らかにし、形容動詞を二語に分けて、「ある詞」と「はたらく辞」とすべきであると主張した。

5. 他の品詞との関係

形容動詞は属性や形態や用法など、その特性上、他の品詞と類似性をおびていて、品詞間の境界がはっきりしないことが指摘されてきた。

形容詞との関係においては、形容動詞は、語の特性と用法が形容詞と同一である。それで形容詞をイ形容詞、形容動詞をナ形容詞と呼ぶこともある。これは、形容詞と形容動詞を形容詞の範疇に含めようとする立場であると言えよう。

名詞との関係においては、形容動詞と名詞は、形態と意味の類似性のため、形容動詞語幹と名詞を同一のものとして扱おうとする見解がある。

連体詞と副詞においては、形容動詞の連体形の「な」は、名詞の修飾だけに用いられているので、かえって連体詞と認めるべきだという主張があり、形容動詞の連用形の「に」においても、動詞の修飾形にしか用いられていないので、副詞と認めるのが妥当であるという見解がある。

形容動詞は、形容詞・名詞・連体詞・副詞と形態や意味、用法などで密接な関係がある。ここでは、形容動詞と関連した他の品詞との関係を検討してみる。

5.1. 形容詞との関係

言語表現の上で、形容詞と形容動詞は働きが等しい。形容動詞は、本来、形容詞の不足部分を補うために発生したものであるから、形容

詞の特性や用法など類似点が多い。

用法において、形容動詞は、副詞法があることと形容動詞の語幹に名詞化接尾辞「さ」を伴って名詞になることは、形容詞の用法と同じである。

形容詞と形容動詞が副詞的な用法として用いられる例をみる。

(10) 夜空には、宝石をちりばめたように、星が美しくまたたい
ています。

(11) ふもとの雪はすっかり消えましたが、山腹から頂上に向け
てはまだ所々に白く残っています。

(12) お茶にはせんべいが、紅茶にはケーキがよく合います。

(13) 総合庁舎が手抜き工事だったことは、新聞記者の手により
明らかにされた。

(14) お母さんは、添い寝しながら、赤ちゃんをうちわで静かに
あおいでいます。

(15) 人生の裏街道ばかり歩いてきた俺だが、ようやくおてんと
様の下を堂々と歩ける身分になった。

(10)～(12)は形容詞「美しい・白い・よい」の副詞法であり、(13)～(15)は形容動詞「明らかだ・静かだ・堂々たる」の副詞法である。

次は、名詞化接尾辞「さ」が後接した用例で、形容詞も形容動詞も共に接尾辞「さ」の接続によって名詞化する。

(16) 娘の肌の白さは、雪をも欺くばかりである。

(17) わたしは、今回の事件を通じて、教師としての責任の**重さ**を痛感しました。

(18) 膨大な情報量と、その**愉快さ**に驚いています。特にバレンタインデーの欄に関してはびっくりしてしまいました。

(19) 消費電力や熱対策もちろん重要だが、これからは**静かさ**を売りにした製品も積極的に考えてほしいものである。

また、形容詞も形容動詞も、中止法がある。形容動詞は「静かで」の一形しかないが、形容詞は「美しく」「美しくて」の両形がある。

さらに、形容詞と形容動詞には、「暖かい・暖かだ」「細かい・細かだ」「四角い・四角だ」「真っ白い・真っ白だ」など、同一語幹から派生した形容詞と形容動詞も存在する。同一の意味分野に二つの言語形式が存在するというのは、いくつかの解釈が可能であろう。そのひとつは、言語変遷の過渡期的な現象だとみる立場で、同一の意味の言語が二つの領域に存在しても、いつかはもっと有力な側に吸収・通合されるということである。また、二つの言語形式に意味的な役割分担が行われているのではないかという解釈もできる。

これについて塚原鉄雄(1964)は、「きょうは暖かい。/きょうは暖かだ。」の文を通して、形容詞「暖かい」は□□属性の抽出□□を表わすものであり、形容動詞の「暖かな」は□□状態の判定□□を表わすものであるといった。

権善和(2004)は、同一語幹の形容詞と形容動詞の違いについて次のように述べている。

同一語幹から派生した、形容詞と形容動詞は、ほぼ次のような使い分けをしていると解される。すなわち、形容詞は、被修飾成分に触發されて現象的な性格を全面に出すようになり、それに伴い後ろの名詞も具体的で現象的な意味解釋を受ける。一方、形容動詞は、後ろに来る被修飾成分により抽象的で観念的な性格を帯びてくるのではないかと解される。

権善和は同一語幹の形容詞と形容動詞の違いを、形容詞は具体的で現象的なことを表しており、形容動詞は抽象的で観念的なことを表しているといった。

漢語の移入は、既存する形容詞と類似した意味の漢語に語尾「～だ」を付けることで、類似した意味の形容動詞を出現させた。「速い・快速だ」「気持ちいい・愉快だ」「美しい・綺麗だ」「激しい・猛烈だ」などがそれである。これら二つの語が共存するのは役割を分担したからであるが、同一語幹の場合のように語性によって分担するようになったのではなく、和語と漢語の語種によるのである。「速い・気持ちいい・激しい」など、和語の系列は話し言葉として用いられ、「快速だ・愉快だ・猛烈だ」などの漢語の系列は、書き言葉として用いられる。「美しい」と「綺麗だ」は逆で、「美しい」の場合が書き言葉に、「綺麗だ」が話し言葉に用いられる。

5.2. 名詞との関係

名詞と形容動詞語幹は、「名詞+助動詞(だ)」と「形容動詞語幹+語尾(だ)」の形態をしていて、外見上、二つは区別しにくい。

名詞と形容動詞語幹の区別は、形態的な面と意味的な面で考えられる。つまり形態的に、名詞は「が・に・の・を」など格助詞がつき、連体修飾形に「の」をとり、連体修飾を受けるという特徴があり、これに対して形容動詞語幹には格助詞が付かず、連体修飾に「な」の形態をとり、連用修飾を受けるという特徴がある。

形態的な面からの名詞と形容動詞語幹の識別と認定は、人によって異なる。したがって、どこで境界の線を設けるかによって形容動詞そのものの用法も広くなり、狭くなる。

意味的な面からの名詞と形容動詞語幹の違いは、名詞は実体的な概念を表しており、形容動詞語幹は情態概念を表すということである。しかし、このような基準が必ずしも一致するとはいえない。たとえば、「病気」「有徳」「苦痛」「中古」「必須」「違法」「未知」「手製」「独身」などは、意味上、情態概念を表わしているが、品詞分類上、名詞に属している。このように、具体的な語について見てみるとその境界にかなりあいまいな部分がある語も存在する。

形容動詞の中には、名詞の性質を共に有するものもある。例えば「平和な村」「平和に暮す」「現状はかなり平和だ」などの「平和」は形容動詞であるが、「平和の女神」「平和に貢献する」「大切なのは世界の平和だ」などの「平和」は名詞である。

「元気」「自由」「親切」「楽」「幸せ」「けち」なども両方の品詞的な性質を兼備している。

外来語が初めて日本に移入される際、体言の形態を取るのが一般的であるから、多くの形容動詞は同時に名詞としても用いられる。

(20a) カーナビのモニターを見ようとしてわき見運転をし、**危険**

の発見が遅れてしまったり、危険を見落としたりする事故が多発しています。

(20b) 都会から新しい思想を持ち帰った青年は、村人から**危険な**人物として遠ざけられた。

(21a) 二人には同じだけチャンスを与えてやらないと、**公平**を欠くことになるよ。

(21b) 先生はどんなときでも、生徒たちに**公平な**目をもって接しています。

(22a) 彼は用事がなければ一日中一人で海をながめている、**孤独**を愛する人でした。

(22b) 東京へ来てからしばらくの間は、これといった友達もなく**孤独な**生活を送っていた。

(23a) 自分自身に**元気**がなかった時、次々と意思決定を誤って赤字会社へ転落してしまいました。

(23b) 「ただいま。」という**元気な**声とともに、子供たちが帰ってきた。

上の、(20)～(23)は、品詞が名詞と形容動詞に跨っている漢語の例である。

動詞が動作・作用・状態・存在などを表し、形容詞・形容動詞が事物の性質・状態、人間の感覚・感情などを表すという限定的な特徴を持っているとすれば、体言は実体概念と属性概念と動作概念などの意味を含んでいて、名詞の特徴と形容詞・形容動詞の特徴と動詞の特徴を揃えていると言えよう。特に漢字の特徴から考えると、名詞と形容動詞の語性を共に有していても不思議ではない。

また、名詞と形容動詞は接辞を付けることで、品詞に変化を与えられる。名詞に接尾辞「的」を付けて形容動詞化することができるし、形容動詞に接尾辞「さ」を付けて名詞性を付与することができる。例えば、名詞の「民主」「間接」が「民主的」「間接的」の形容動詞になり、形容動詞の語幹の「複雑」「過密」が「複雑さ」と「過密さ」の形態で名詞になる。

5.3. 連体詞・副詞との関係

日本語の連体詞は、名詞を修飾する、いわば連体修飾機能を持っていて、この点、形容動詞の連体形と同じ役割をしている。

連体詞の中には、「おおきな・ちいさな・おかしな」など「な」形をしているものがあって、形容動詞とは形態も職能も同一である。

形容動詞と連体詞の違いをあげると、形容動詞は活用するが、連体詞は活用しないということである。しかし、形容動詞が活用するとしても、「静かな海・静かです・静かだそうだ・静かだから」などであり、形容動詞の連体形には「静かな海・きれいな部屋・大切なもの」など名詞を修飾する機能しか持っていない。

一方、形容動詞の連用形は、用言を修飾するもので、「に・で」がある。その中で、「～に」は動詞の修飾に用いられており、「～で」は否定形・中止形と形容詞・形容動詞の修飾に用いられる。用言を修飾する品詞に副詞があり、その中で、「要するに・ついに・一般に」の形は形容動詞の連用形「に」と形態上、同一である。

形容動詞の連体形と連用形について小松(1999)は次のように述べている。

連用形とされているシズカニには連用中止の用法がなく、動詞を修飾するだけであるから副詞と認めるのが妥当であるし、シズカナは体言を修飾するだけであるから連体詞と認めるのが妥当である。

小松(1999)は、形容動詞の連体形「な」と連用形「に」は、体言(名詞)を修飾する機能と、動詞を修飾する機能しかもっていないから、それを連体詞と副詞と認定するのが妥当であるといった。

確かに、小松(1999)の言う通り、形容動詞の連体形「な」は体言を修飾するのに用いられ、連用形「に」は動詞の修飾に用いられている。そうだとすると、連体形を連体詞、連用形を副詞と認めるのが妥当であろうか。もし、連体形を連体詞、連用形を副詞と認めるなら、「静かだ」は形容動詞、「静な」は連体詞、「静かに」は副詞として品詞が分離されるのである。漢語の中には「迷惑」のように、「迷惑をかける」「迷惑する」「迷惑な話」など、品詞が名詞、動詞、形容動詞にまたがっているものがあるが、これはあくまでも、語性によって分類したもので、「静かだ・静かな・静かに」のように、語性は同一であるが活用形の違うものを同一に扱うことには無理がある。

6. おわりに

以上、日本語の形容動詞の成立と展開について検討してみた。

日本語の形容動詞は、文語においては「○○+ナリ・タリ」の形態

をしており、口語では「〇〇+ダ」の形態をしている。

「〇〇+ダ」という形態に起因する優れた生産性と経済性は多量の新たな形容動詞を作り出している。とりわけ、漢語と外来語の形容動詞の数が急激に増加した。

「〇〇+ダ」という形容動詞の形態は語彙の数の増加という肯定的な評価と共に、品詞の分類において多くの論議を引き起こす要因となった。

現代と同じ意味で「形容動詞」という名称を用いたのは、芳賀矢一(1904)である。形容動詞という名称は、形容動詞が性質は形容詞と等しく、活用は動詞と等しいからであるとしているが、まだ一品詞としては独立させず、形容詞の一部として扱った。

吉岡郷甫(1912)は、形容動詞という名称を口語についても適用させたが、形容動詞という名称が定着したのは、吉沢義則(1932)・橋本進吉(1935)の説が発表されてからである。

吉沢義則(1932)は、形容動詞について動詞的性質がありながら動詞ではなく、形容詞的性質がありながら形容詞でもない一種の用言であるから、動詞と形容詞から独立して、一品詞に立てるべきであるといった。

橋本進吉(1935)は、文語形容動詞を第一種・第二種・第三種に分け、その中の第一種形容動詞は形容詞の補助活用と見なし、形容動詞から除外すべきであると主張した。

一方、佐久間鼎(1940)は形容詞と形容動詞を一括して「性状語」とし、形容動詞を否定する立場に立った。

時枝誠記(1950)は、「〇〇+だ」形を「体言+助動詞」と見て、形容動詞を全面的に否定した。

時枝誠記以後も形容動詞を否定する研究が進められたが、一方では認定・否定の問題ではなく、形容動詞の用法と意味についての研究も進められた。

形容動詞は属性や形態や用法など、その特性上、他の品詞と類似性をおびていて、品詞間の境界がはっきりしないことが指摘される。

形容詞との関係において形容動詞は、語の特性と用法が形容詞と同一であるから、ナ形容詞と呼ぶこともあり、形容詞と形容動詞を形容詞の範疇に含めようとする立場もある。用法上、形容動詞が、副詞法のあることと名詞化接尾辞「さ」を伴って名詞になることは、形容詞の用法と同じ特徴である。

名詞との関係においては、形容動詞と名詞は、形態と意味の類似性のため、形容動詞語幹と名詞を同一のものとして扱おうとする見解がある。形容動詞の中、「危険・孤独・自由・健康」などは、品詞が名詞に跨っている。

連体詞と副詞においては、形容動詞の連体形の「～な」は、連体詞「おおきな・ちいさな・おかしな」などと形態が同一であり、体言の修飾だけに用いられるという職能も同一である。形容動詞の連用形の「に」においても、副詞「要するに・ついに・一般に」などと同一形態であり、動詞を修飾するという同じ職能を有している。

本章で考察した形容動詞の研究の流れは、語の形態的特徴から出発して意味的な内容へと移って行く傾向があるが、意味的な側面についてまだ取り扱われていない部分がある。つまり、同一語幹の形容詞と形容動詞との違いや連体修飾に「～の」と「～な」が共に用いられることなどである。特に、最近、現れた言語現象の一つで、「アジアな女たち」「コリアな暮らし」「ヘルパーな日々」など、名詞の連体修

飾に「～の」ではなく「～な」を使う例が多く見られる。これからの形容動詞の研究では、このような意味と関連した研究も期待される。

第3章

漢語の名詞と形容動詞語幹について

1. はじめに

日本語の名詞と形容動詞語幹は「名詞+だ(助動詞)」と「形容動詞語幹+だ(語尾)」の形態をとるため、外見上、二つは区別しにくい。このような事実は形容動詞の認定・否定という問題と関係して、形容動詞に対する論議の争点になっている。名詞と形容動詞は、同一語が名詞と形容動詞に跨っている場合が多く、用法も類似している点が多い。したがって、名詞と形容動詞の区別は、形態的な側面だけではなく意味的な側面でも考察されるべきである。

形態的に、

- I 名詞には格助詞が自由に付くが、「語幹」にはつかない。
- II 名詞はガを伴って主語になるが、「語幹」にはその用法がない。
- III 名詞は連体修飾語を受け、形容動詞は連用修飾語を受ける。
- IV 名詞は、格助詞「の」を下接して連体修飾語となるのに対し、「語幹」は語尾「な」を伴って連体修飾語となる。

という特徴がある。

意味的には、一般的に名詞が事実・実質などの実体概念を表している反面、形容動詞は属性・様態・状態などの情態概念を表している。

しかし、このような形態的特徴と意味的特徴が名詞と形容動詞の区別において、必ずしも当てはまるとは言いにくい。例えば、「数学はここが山だ」「野原はもう春だ」での、「山」「春」は実体概念を表す名詞であるが、文中の意味は、属性概念を表している。名詞と形容動詞の形態的な類似性は、用法の類似性に現れており、さらに意味の類似性にも現れる。これは名詞と形容動詞の範囲の規定において、難題になっている。

本章では、先行研究で規定している名詞と形容動詞の範囲について調べてみる。また、名詞と形容動詞に対する辞書の品詞分類と用法を調べ、さらに、同形漢語の名詞と形容動詞の用法の特徴と品詞の分類の基準になるのは何であるのかということについて考察を進める。

2. 先行研究の検討

名詞と形容動詞についての研究は、形容動詞の形態から始まった形容動詞の認定論と否定論の研究が主であり、それに伴い形容動詞と名詞の語性に現れる意味と用法の違いなどについて形態的な側面と意味的な側面からの研究が行われて来た。代表的な学者としては、吉岡郷甫(1912)、水谷静夫(1951)、塚原鉄雄(1970)、鈴木英夫(1986)などがある。

2.1. 吉岡郷甫(1912)

吉岡郷甫は、形容動詞を文語・口語にわたって理論的に説明し、名詞と形容動詞語幹の違いについても、説明を加わえた。普通の名詞は「が・に・を」などの格助詞を自由に下接するが形容動詞の語幹にはこれらが付かないと述べた。修飾においても名詞は連体修飾語をとるが、形容動詞語幹は連用修飾語をとると述べ、名詞と形容動詞を区別した。

第二種形容動詞例へば「静かなり」「賑かだ(=です)」の如きものを、名詞に指定の付いたもの、例へば、「人なり」「毛物だ(=です)」の如きものと相混じないやうにしなければなりません。「静か」「賑か」の如きものは「に」「なり」「た」「です」等の語尾があつて始めて語を成すべきもので、随つて「が」「の」「に」「を」等の助詞を付けることが出来ませぬけれども、「人」「毛物」の如きものは、始めから名詞でありますから、自由にこれを付けることが出来ます。又「人なり」「毛物だ(=です)」等は「雄々しき人なり」「熱帯の毛物だ(=です)」の如く、体言を限定するものを付けることが出来ますけれども、「静かなり」「賑かだ(=です)」等には之を付けることができません。「静かなり」「賑かだ(=です)」は「甚だ静かなり」「大層賑かだ(=です)」の如く、副詞を付けることが出来ますけれども、「人なり」「毛物だ(=です)」等はこれを付けることは出来ませぬ。此等で、以ても、其の區別を辯へることが出来るのであります。

吉岡は、名詞と形容動詞語幹の両者を区別する基準として、

- (ア) 格助詞「が・の・に・を」などが自由に付くか、どうか。
- (イ) 連体修飾語の被修飾語になることができるか、どうか。
- (ウ) 副詞の被修飾語になることができるか、どうか。

の三項をあげて、格助詞が付くのが名詞、付かないのが形容動詞と区別し、連体修飾を受けるのが名詞、副詞の修飾を受けるのが形容動詞であるといった。

しかし、このような吉岡の説は、あらゆる名詞と形容動詞に必ずしも一致するわけではなく、例外的な現象も多く見られる。

- (1) そのとき「遊」の僅かな空白に「この国家論は生物史観にはじまって無名の存在学に向かっている。そこには進行の**厳密**がある。いま、強調しておきたいのはこのことだけだ。2001年よりも先の方から」と書いた。
- (2) 表記の**厳密**を必要とされる場合は、直接引用元をご参照ください。
- (3) 漁場から、安全と**新鮮**を食卓にお届けします。
- (4) 生菓子に限らず、殆どの京菓子は**新鮮**が一番です。

「厳密」「新鮮」は形容動詞とされているから吉岡の指摘からすれば、格助詞が付けられないはずである。でも、(1)～(4)の「厳密」「新鮮」には、共に格助詞「が」「を」が付いている。このような文は、一般的であるとは言い難いが、文献上、存在しているのも事実であ

る。

- (5) お宮の石の段を登ると、すぐ右手に大きないちょうの木があった。

「すぐ」は副詞として、用言を修飾する連用修飾語として用いられる。しかし(5)の「すぐ」は後接した名詞「右手」を修飾しており、副詞の修飾を受けるのは形容動詞であるという吉岡の形容動詞の条件に当てはまらない。このように、格助詞が付くか付かないかということや連体修飾を受けるか・連用修飾を受けるかということを名詞と形容動詞の判別に用いた場合、例外的なものが多く現れることが、形容動詞を否定する学者によって指摘された。

2.2. 水谷静夫(1951)

吉岡(1912)は、名詞と形容動詞語幹の区別の一つに、連体修飾語をとるか連用修飾語をとるかという事柄を挙げているが、これについて水谷静夫(1951)は次の例を挙げて反論した。

- (6) 彼はすごい**封建主義**だ。

- (7) 彼はすごく**封建主義**だ。

果して前者は「名詞+助動詞」後者は「形容動詞」と云ふのならうか。いづれも述語は抽象名詞を属性的に使つてゐる。この点で両者に何の差もない。ただ違ふ所は、前者が述語にも「彼」といふ實體の意識を失はなかつた — 概念として「封建主義者」だっ

た — 爲連體修飾語をとったのに、後者は純粹に屬性概念をのみ指したから連用修飾語をとった点である。これは「封建主義(だ)」の語性の問題ではなく、言語主體の思考の差が言語に投じた反映に過ぎない。そして、同様の事が「形容動詞」についても言へるのである。ここまで述べて來れば、それは一言にして盡せる。即ちいはゆる形容動詞語幹が指すものは屬性概念である故、連用修飾語はつくが連體修飾語はつかない。

「すごい**封建主義だ**」と「すごく**封建主義だ**」の文章が成立する理由について、「封建主義」が名詞あるいは形容動詞であるから、連體修飾または連用修飾がなされたのではなく、言語主体の思考の差が言語に反映されたためであるといった。このような説明が正しいとするなら、連體修飾語をとるか連用修飾語をとるということが名詞と形容動詞語幹を区別する基準にはなり得ないことが証明される。それで、水谷は名詞と形容動詞語幹の特性を語の意味概念をあげて述べている。

我々が客體界に對して認識作用を營むや、對象はすべて概念として把握せられる。また主体の認識は大抵の場合、思考の方便上實體とその屬性とに分節化する。これを言語の表現面に投影して實體と思考したものの概念を主語に表はし、屬性と思考したことの概念を述語に表はすのである。即ち屬性的概念は、屬性が實體から分立し實體の實として再び統合されるものと見るロジックによつて、當然自體視せられ難い。この故に屬性概念を指す語はそれが屢々思考の對象となつて容易に實體視出来る習慣が成り立って

るない限り、格助詞がつきにくく、殊に主語になりにくいのである。形容動詞の語幹と呼ばれて來たのは、まさしくその典型であらう。「語幹」に格助詞がつかないのは、従つて、それが一單語を成さないからではなく、格助詞が實體視された概念を指す語につくものだからなのである。勿論言語と思想とは別物に違ひない。しかしながら言語の構造が、思想とは別なるが故に思想を離れて(何時も)獨自の法則を有つと考へるのは、迷妄である。名語の中でもいはゆる形式名詞が單獨では、また先に挙げた例に見える「有徳 必讀」などの漢語は、決して主語にならず、殊に後者は格助詞も自由につきはしない。ところでこれらは「花 庭」などと語の本性が違ふのでなく、實體視し難い概念を指す語といふ思想上の制約に過ぎない。

水谷は、名詞と形容動詞の区別において、実体概念であるか属性概念であるかを採用している。水谷によると、格助詞が付く語は品詞と関係なく思考の対象になって実体視される語であり、形容動詞はこのような性格がないから格助詞が付かないのである。また、形式名詞は名詞であるとしても実体視されないから主語になれないし、格助詞が付かないのである。

実体概念と属性概念を語の分類に導入させた水谷の学説は、後に、塚鉄雄原(1970)と鈴木英夫(1986)によって具体化される。

2.3. 塚原鉄雄(1970)

塚原鉄雄は、形容動詞語幹と体言との差について、意味機能の面か

ら次のように説明を与えた。

國語の体言-名詞には、根底的に、三種の意味機能を具有している。三種の意味とは、事物と様態と事態とである。換言すれば、國語の名詞は、根源的に「モノ」と「サマ」と「コト」とを表現しうる。そして、そのいずれを具現するかは、文脈-場面が決定する。

塚原の観点からみると、「大切なのは健康だ」の「健康」は事物表現であり、「彼は健康だ」の「健康」は様態表現である。もし、事物表現を名詞とし、様態表現を形容動詞語幹とすれば、これは、理論的には両者を識別する重要な基準になる。しかし、塚原鉄雄(1970)では次の用例あげて、名詞-体言の「モノ」「サマ」「コト」の特性を説明している。

(8) 吠えているのは**犬**だ

(9) あいつはアメリカの**犬**だ。

(10) **犬**であることも、楽ではない。

(8)の「犬」は、「犬というモノ」を表現し、(9)の「犬」は、「犬というサマ」を表現する。(10)の「犬」は、「犬であるコト」を表現するといい、また、

(11) **ネルソン**は言った。-英国は、各人がその義務を果たすことを期待する。

(12) 東郷平八朗は、東洋のネルソンである。

(13) 東郷元師は、聖将という姿勢を守りつづけた。ネルソンも、つらかっただろうね。

(11)の「ネルソン」は事物の表現を、(12)の「ネルソン」は様態の表現を、(13)の「ネルソン」は事態の表現を表すといった。

塚原は、体言(名詞)と形容動詞の機能を分離するにおいて、事物表現と事態表現に限定して体言(名詞)と認定し、様態表現は形容動詞の語幹と認定する理論について次のような例を挙げている。

(14) あいつ、すごいけちん坊だ。

(15) あいつ、すごくけちん坊だ。

(14)(15)で、同一の形態である「けちん坊だ」が、(14)の「けちん坊」は事物を表現することで体言(名詞)であり、(15)の「けちん坊」は様態を表現することで形容動詞であるということは、原理的な理論としてではなく、現実的な処理として、保留される問題がある。もし、(15)の「けちん坊」を形容動詞として認定すれば、論理の一貫性を維持するため、次の(16)の「ネルソンで」も(17)の「犬だ」も、一語と認定し、その品詞は、形容動詞と規定しなければなるまいといった。

(16) そっくりネルソンである。

(17) 確実に(アメリカの)犬だ。

(16)の「そっくりネルソンである」と(17)の「確実に犬だ」は、文の内容上、様態の意味を含んでいるが、「ネルソン」と「犬」が形容動詞になるのではない。「ネルソン」と「犬」は、それらが事物の表現であれ、様態の表現であれ、品詞においては名詞である。

塚原の意味分析に用いられた「モノ」「サマ」「コト」は、日本の体言(名詞)においての意味分野のものであって、品詞、つまり、事物を表すのが名詞、様態を表すのが形容動詞の語幹であるということを表すのではない。

塚原の「モノ」「サマ」「コト」の意味概念を発展させたものが鈴木英夫で、鈴木は「モノ」「コト」「サマ」の意味分析と共に三つの概念を品詞別にわけた作業を行った。

2.4. 鈴木英夫(1986)

鈴木は、体言を「モノ」「コト」「サマ」に分けて考えた塚原鉄雄(1970)より広く捉え、「実体性概念」「情態性概念」「動作性概念」の三種に分けた。

- 1 実体性(モノ)の概念を表わす語・・・実体性体言
- 2 情態性(サマ)の概念を表わす語・・・情態性体言
- 3 動作性(コト)の概念を表わす語・・・動作性体言

この三種に、品詞をあてはめると、実体性体言は名詞、情態性体言は形容動詞または副詞、動作性体言はサ変動詞の語幹になり、体言の中には、この三種の意味機能のうち、一種しか有しないものもあれ

ば、二種あるいは三種を有するものもあるといった。三種の意味機能は形式と結び付いて固定化したものと流動的なものがあり、また、時代と個人によって、顕在化する意味機能の異なることがみられるといった。

三種の意味機能を整理して表にすると<表1>のようになる。

<表1> 体言の特性による品詞分類

語の特性	品詞	例
実体性概念の体言	名詞	人間、大学、書物.....
情態性概念の体言	形容動詞・副詞	静か、しとやか イージー.....
動作性概念の体言	サ変複合動詞の語幹	運動、検挙、発表.....
実体性と情態性の概念を表わす体言	名詞と形容動詞	完全、敏速、優雅.....
三種の意味機能をすべて備えている体言	名詞と形容動詞とサ変動詞	失礼、退屈、貧乏.....

鈴木の、体言の性格による連体修飾の形態を整理してみる。

「体言」が連体修飾語として機能する場合のタイプは、四種類があり、そのタイプは、<表2>のようである。

〈表2〉 体言の性格による連体修飾の形態

体言の性格	連体修飾形	連体修飾語の性格
A 実体性体言	ノ	格助詞
B 情態性体言	ノ	格助詞と語尾の中間的な性格
C 情態性体言	ノ	語尾
	ナ	
D 情態性体言	ナ	語尾

鈴木は、実体性体言と情態性体言の区分が明確ではなくて連続的であることと連体修飾形に「の」と「な」が付くことについて、それは意味的なものであるから、連体修飾語-名詞、連用修飾語-用言という枠に無理に押し込める必要はないといった。

2.5. 先行研究のまとめ

名詞と形容動詞語幹に対する諸学説をみると、吉岡郷甫(1912)は、用法上の違いを名詞と形容動詞語幹の区別の基準としている。つまり、格助詞が接続することと、修飾において連体修飾を取るか連用修飾を取るかという形態的な側面で、名詞と形容動詞の違いを挙げている。形態的な側面での名詞と形容動詞の区別は、形容動詞の連体修飾に「語幹+の」の形が現れたり、形容動詞の語幹に格助詞が付いたりする例外的な現象も多く現れる。従って、名詞と形容動詞語幹の区別を形態的な側面で断定的に説明するには限界があると判断される。

水谷静夫(1951)は、名詞と形容動詞語幹を、実体概念と属性概念という意味的な側面で説明している。つまり、事実や事態など実体視さ

れる概念の語を名詞と、情態や様態などの属性概念の語を形容動詞と認めた。水谷の説は、「健康」「平和」「危険」など、語性が名詞と形容動詞に跨っている同形漢語の場合は意味概念として説明できないし、その点については言及されていない。

塚原鉄雄(1970)は、体言(名詞)には、事物と様態と事態の三種の意味機能を有している語があり、これは、「モノ」と「サマ」と「コト」を表現しうるといふ。鈴木英夫(1986)は、塚原の三種の意味機能をもっと具体化して、体言の意味を「実体性概念」「情態性概念」「動作性概念」の三種に分けて考えており、これに品詞を当てはめると、各々名詞・形容動詞・サ変動詞の語幹になるといった。また、情態性概念の語の連体修飾語として用いられる「～な」と「～の」についても言及して、名詞と形容動詞の区別においてもっと現象的で具体的な説明を加わったと言えよう。

3. 名詞と形容動詞語幹の特徴

鈴木英夫(1986)によると、体言は、その性格によって実体性体言と情態性体言そして動作性体言に分けられ、それを品詞的に分類すると名詞、形容動詞、動詞になる。

しかし、体言の中で実体性体言と情態性体言は、明確に区別しにくくその二つはかえって流動的な関係にあると言えよう。実体性概念を帯びている名詞でも、文の中では、属性や様態など情態性概念を帯びる語もある。殊に漢語の場合、同一形態に名詞と形容動詞に跨ってい

る語は、語の意味が実体性か情態性かという二分法的な分離ができない。このような場合の品詞の分類は、語の性格、または意味による分類の他に、語の形態的特徴の分類も考えられる。つまり、名詞と形容動詞の区別においては、文の中での意味や用法などが考慮されなければならない。

ここでは、名詞と形容動詞語幹の違いを、形態的な側面と意味的な側面に分けて考察する。

3.1. 名詞と形容動詞語幹の形態的特徴

一般的に、名詞と形容動詞語幹の違いを形態的な側面でみると、名詞は、ア)「が」等の格助詞が付く。

イ)「の」を帯びて連体修飾語となる。

ウ) 連体修飾語を上接する。

などに要約される。この反面、形容動詞語幹は、

エ) 接尾辞「さ」を付けて名詞となる。

オ) 連体形「な」の形で連体修飾語をとる。

カ) 連用修飾語を上接する。

などの特徴が挙げられる。例を見てみる。

(18a) うまく言い逃れても、いずれ真実がわかる時がくる。

(18b) 青春とは、人間の真実の愛や友情について、真剣に悩む時期である。

(18c) 格言は、短い文句で人生の真実や処世の訓戒を述べたもので、金言、警句などとも呼ばれる。

(19a) この本は、いかに不合理なことが科学的**正確さ**の仮面を付け得るかを教えてくれた本である。

(19b) ピアノの演奏では、なによりもまず**正確な**技巧を身につけることが要求される。

(19c) 理科方面の大学生、更には専門の学者になると、地球の複雑な形について、学問的にいっそう**正確な**規定を与えるに違いない。

(18a)～(18c)、(19a)～(19c)は各々名詞と形容動詞の用法の例で、(18b)と(19b)のような連体修飾形の例、「名詞+の+体言」と「語幹+な+体言」は名詞と形容動詞の形態的な特徴を区別することによく用いる。しかし、現実的には「名詞+な+体言」と「語幹+の+体言」の文も目につく。例を見てみる。

(20) 大乘の**不思議**の力願主の深きまことになひ給へるなり。

(21) 私はそういうあなたを尊んで来たし、二人の生活を誇りにもして 来たんだけど、あなたは**当たり前**の細君がやはり欲しくなったわね。

(22) **きれい好き**の吉田茂首相が「戦災都市はいつまでたっても汚いが、早くきれいにならぬか」と顔をしかめた。

(20)～(22)の「不思議」「当たり前」「きれい好き」は、いずれも、形容動詞の語性を帯びている。従って、連体修飾の場合、「～な」を用いるのが一般的であると言えよう。しかし、(20)～(22)で用いた連体修飾語は「～な」ではなく、「～の」である。

形容動詞の語幹に「～の」が接続した例がある一方、「名詞+な+体言」の形をしている例もある。

(23) 殺生の**禁制**なところ

(24) **病気**な身

(25) **朝寝**なやつら

(26) 悪い**癖**な野郎

(27) みんなが**わる口**な子だといって大笑ひをしゃした。

(28) 十五の春には葉子はもう十も**年上**な立派な恋人を持っていた。

(29) 犯人は自己の利益<現金の受領>という**狭義**な考えだけで誘拐するのか。

(30) いまだに壕舎で三度目の名月をながめた**悲運**な人も多かるう。

(23)～(30)の「禁制」「病気」「朝寝」「癖」「わる口」「年上」「狭義」「悲運」などは、語性が名詞であるから、当然、連体修飾形は「～の」形になるべきである。しかし、(23)～(30)は「～の」ではなく「～な」を取っている。このように名詞の連体修飾に「～な」を付けることについて、権善和(2004)は、次のように述べている。

同一語幹から派生し、ほぼ同じ意味をもつものどうしでは、次のような意味分担が行なわれている。形容詞を基準にした場合、形容動詞と連体詞は、どちらかという、抽象的かつ感情的な意味的特徴を帯びている。このような違いはあるものの、カタカナ語

の名詞に形容性を付与しようとする場合は、カタカナ語に「～な」という形をつければ間に合ったわけである。このような過程を経て、カタカナ語の「～な」の形が用いられるようになったと解釋される。

権善和(2004)は連体修飾語に用いられる「～な」をカタカナ語の名詞の例を挙げて説明している。もし、引用のような解釈ができるなら、名詞に「～な」を付けることは、カタカナ語だけでなく、漢語にも適用される。また、形容動詞と名詞の区別において、注意しなければならないのが、「～に」と「～で」の形である。「～に」と「～で」は、形容動詞の連用修飾形として用いられる場合もあり、名詞に「～に」と「～で」が後接した形態もある。例を見てみる。

- (31) 運転手の彼は、仕事がら、**危険に**備えて高額の保険に加入している。
- (32) ポチがなんとなく元気がないので、みんな**心配に**なってきた。
- (33) 日ごろのひどい仕打ちを恨むのも忘れ、村人たちは、妻に死なれた代官の**不幸に**同情したのである。
- (34) 待ちかねた桜の花が、**きれいに**咲きそろった。
- (35) 武器を持たないこの虫は、敵から**巧妙に**身を守る方法を知っている。
- (36) うれしい時に喜び、悲しい時に涙を流し、不思議なことに**は驚く、**そういうあたりまえの心を**大切に**したい。
- (37) 氏は現在八十二歳、多くの孫に囲まれて**幸福に**暮らしてい

ます。

(31)～(37)はいずれも「～に」形の文である。(31)～(33)の「危険」「心配」「不幸」は名詞と形容動詞の語性を帯びているが、ここでは、「名詞+に」の形をしている。(34)～(37)の「きれい」「巧妙」「大切」「幸福」は形容動詞であり、ここでの「～に」は形容動詞の連用形語尾「に」である。

「～に」は名詞と形容動詞の他、副詞の一部の形態もある。

(38) 君子は豹変すといって、すぐれた人物は自らのあやまちを
ただちに改める勇氣を持っている。

(39) 家を出て**すぐに**、ガスを消し忘れたことに気づいた。

(38)(39)の「ただちに」「すぐに」などは「に」形の副詞で、形容動詞の語尾の「に」と違って、「に」は切り離せない。

「～で」も、名詞に付ける助詞の場合と、形容動詞の語尾の場合がある。

(40) 名前は雅子ですが、友達には「まこちゃん」の**愛称**で呼ばれています。

(41) 東京の町々は、相次ぐ**空襲**で焼き払われたが、父の家の一
角だけが焼け残った。

(42) **自分で**作った網を持ち、湖の浅い所で魚を取ったもので
す。

(43) 学生が多いのだから、窓なんか**平気**で開けて行くの

だ。

(44) きみは**正直で**、愛想を言うのが下手だから、ずいぶん損をしている。

(45) 彼は、皮肉や他人の悪口に**巧妙で**、毒舌を弄する評論家だった。

(40)～(45)は、いずれも「で」形の文であるが、(40)～(42)の「愛称で」「空襲で」「自分で」は名詞に助詞「で」が付いた文であり、(43)～(45)の「平気で」「正直で」「巧妙で」は形容動詞の連用形で、(43)は形容動詞に動詞が後接した場合であり、(44)(45)は中止法として用いられたもので、これらの「で」は語尾である。また、形容動詞の連用形と同じ形態に助動詞の連用形にも「で」形が現れる。

(46) 両親を失った少女の悲しみは、周囲の人々のあたたかい**愛情で**、しだいに薄れていった。

(47) お乳をたっぷり飲み、母の愛撫の快さに満足した**様子で**、赤ちゃんがすやすやと眠っています。

(48) 折しも桜が**満開で**、温泉につかりながら花見ができたのだから、味な気分にはたれたよ。

(46)～(48)は、名詞「愛情」「様子」「満開」に助動詞「～だ」の連用形の「～で」が付いた形態で、助動詞の中止法として用いられている。

(40)～(48)で見た通り「～で」は、助詞と助動詞そして形容動詞の語尾の用法に用いられる。

「で」の形を取り、場所・時間・手段・材料・原因・理由などの意味があれば、この場合の「～で」は格助詞であり、断定の意味はない。同じ名詞に付いた「～で」に助動詞の用法のものもある。助動詞として用いられる「～で」は、断定の意味で、「～だ」の中止形である。

助詞や助動詞として用いられた「で」は名詞に接続された形態であるから、名詞から分離させられる。しかし、形容動詞の語尾の「～で」は語幹から分離されない特徴がある。

上の例で見たとおり「～に」と「～で」は、助詞と形容動詞の語尾に同じ形態が現れるから、外形において名詞と形容動詞を区別することは容易でない。

3.2. 名詞と形容動詞語幹の意味的特徴

名詞と形容動詞の意味的な区別において、一般的に事物・事実などの実体概念を表すものが名詞であり、様態・状態などの情態概念を表すものが形容動詞であると言われている。

- (49) **右**の膝を立て左の膝を下げながら**的**を左に受けて向を換え
まする、そして弓を自分の体の中央に斜めにだします。
- (50) 純粹で鋭敏な点で、空前の批評家の魂が出現した文学史上
の大きな**事件**なのである。
- (51) **農家**の高齡化と人手不足は深刻だ。
- (52) **青年**の柔軟な心は、それらのものを受け止め、彼のできる
かぎりの深みでそれを感じようとする。

(49)の「右」は位置または方向を表しており、(50)の「事件」は事柄や出来事などを表している。(51)の「農家」は農業を営む世帯や家を、(52)の「青年」は青春期の男女のことを表していて、(49)～(52)の「右」「事件」「農家」「青年」はいずれも実体概念の語である。

(53) 私は彼に向かって急に**厳肅**な改まった態度を示し出しました。

(54) 通信は金融・流通システム構築の根幹にもなるため、全土を結ぶ回線ができないかぎり、自由主義経済が**円滑**に動きだすにはほど遠い。

(55) しかし、この関係の**奇妙**なところは、立っている者が座っている者からある種の圧迫を感じるほどには、座っている者は立っている者から同じそれを、それほどには感じないということである。

(56) さる**有名**なバイオリン作りの名人は、ヒノキは世界に誇る**優秀**な材だから、それで名器を作ろうと苦心していた。

(53)～(56)の「厳肅」「円滑」「奇妙」「有名」「優秀」などは様態・状態・属性など形容性を表しており、文章の形態でも、形容動詞の連体形と連用形の「～な」と「～に」の形を取っていて、形容動詞として認められる。

上の(49)～(52)、(53)～(56)は実体性概念と情態性概念という語の意味的な特徴がはっきりしていて、二つのグループに分けることが容易である。

次の例をみってみる。

- (57) その強烈な爆発力はわたしを**苦痛**なくあの世へ送ってくれるはずである。
- (58) **中古パソコン**の販売はもちろん、ノートパソコンから周辺機器まで激安・格安・超特価で全国の皆様に提供いたします。
- (59) 正職員にしてこの状況ですから、これが非常勤のヘルパーになるともっと顕著。ヘルパー2級**必須**が90.7%。1級**必須**は0.3%、介護福祉士**必須**は0.1%。逆に3級**必須**が14.8%と増えています。
- (60) 山口先生は、共犯の処罰根拠論で「**違法**の相対性」を前提とする混合惹起説を採用されています。
- (61) こういう社会では、同郷とか同族とか同身分とかいった既定の間柄が人間関係の中心になり、仕事や目的活動を通じて**未知**の人と多様な関係を結ぶというようなことは、実際にもあまり多くは起こりませんが、そういう「『する』こと」に基づく関係にしても、できるだけ「である」関係をモデルとし、それに近づこうとする傾向があるのです。
- (62) こういう時に出す「奥様**お手製**の料理」って何がうけるんでしょう。
- (63) 彼は其の奉公して獲た給料を自分の身に費して其の頃では余所目には疑はれる年頃の三十近くまで**独身**の生活を継続した。

(57)～(63)の「苦痛」「中古」「必須」「違法」「未知」「手製」「独身」などは、語の意味は情態概念を表しているが、品詞は形容動詞ではなく名詞であるし、用法においても名詞的な機能をする。

一方、語の意味は実体概念を表しているが、用いられた文章の中で
の意味は情態概念を表す語もある。

(64a) 富士山は日本で一番高い**山**だ。

(64b) 数学はここが**山**だ。

(65a) ふつう、3月から5月までを**春**だという。

(65b) 野原はもう**春**だ。

(66a) ここが私の卒業した**学校**だ

(66b) 明日から**学校**だ。

(67a) **狸**を保護する。

(67b) 高川本因坊は**狸**だ。

(64)～(67)の「山」「春」「学校」「狸」は、いずれも実体概念をあらわす名詞である。しかし、同じ名詞を用いた文、a・bの意味が同一ではないことがわかる。(64a)と(64b)を比較してみると、(64a)の「山」は□□日本で一番高い山□□という、山の姿と形態を表している。しかし(64b)の「山」は、目で見られる形態的に存在する山を意味しているのではなく、険峻な山のイメージとその山を登るにおいて同伴される苦痛などをイメージ化したものであると言えよう。つまり、数学を勉強するのにここからが難しいという意味であろう。(65a)(65b)の「春」においても、(65a)の「春」は時間的な区分あるいは季節的な区分における「春」である。これに対して(65b)の

「春」は、野原に新芽が生えており、春の花も咲いていて春の趣が感じられるという意味のことで、「春」をイメージ化したものであると言えよう。「学校」においても(66a)の「学校」は場所としての「学校」であり、(66b)の「学校」は、学校の様々な生活と学校で起こる様々な事件などを含んでいる、その学校の生活が始まるという意味である。(67a)(67b)の「狸」も、(67a)の「狸」は、動物そのものを表しているが、(67b)「狸」は、動物の狸を表すのではなく、狸の特性をイメージ化したものであるいえよう。

(64)～(67)は、実体概念をあらわす「山」「春」「学校」「狸」が、文の内容によって、語の本来の意味とは違う情態概念を表すことがわかる。

語によっては、品詞は名詞であるが語の意味は情態概念を表す語がある。

(68a) これは恐ろしい**病気**だ。

(68b) 太郎は**病気**だ。

(68a)は、病気の種類の一つを表しているが、(68b)は□□太郎は病気にかかって体の具合がよくない□□という意味で、病気の状態を表している。

「病気」のように、語性は名詞であるが意味は情態概念の方に片寄る語が、文章の中では実体概念としても情態概念としても用いられる例がある。また、名詞の中には表面的な意味は実体を表しているが、内面的な意味は情態性を含める語もある。例を挙げてみる。

(69a) 彼女は日本一の**美人**だ。

(69b) 彼女はすこぶる**美人**だ。

(70a) 釘を打つ、釘を抜く、曲がった釘をまっすぐに直すの**こ**
の**金槌**だ。

(70b) 水に入ったら、てんで**金槌**だ。

「美人」という語は、話題の焦点がどこにあるかによって、二通りに解釈される。つまり、「美人」が□□美しい人□□を表す場合は焦点が□□人□□にあり、□□人が美しい□□を表す場合は焦点が□□美しい□□にある。(69a)は、□□人□□というの実体を表しており、(69b)は□□美しい□□という属性を表しており、さらに□□すこぶる□□という副詞によって美しさがどのくらいであるかという状態の程度を表している。

(70)の「金槌」も二つの意味機能を持っているといえよう。一つは、道具としての「金槌」であり、もう一つは、「金槌」のイメージ、つまり「重い」「堅い」「水に入れるとすぐに沈む」などである。(70a)の「金槌」は道具としての金槌で実体を表しており、(70b)の「金槌」は、堅くて重いもので水に入ったらすぐ沈むという様子を表していて、実体としての金槌ではなく、イメージのことであるといえよう。さらに、(70b)のように連用修飾語「てんで」の修飾を受けている。

3.3. 名詞と形容動詞語幹の辞書的分類

「3.1」「3.2」では、名詞と形容動詞を形態的な側面と意味的な側面で、検討してみた。しかし、形態的な分類において、名詞には格助

詞が付くが、形容動詞にはつかない、名詞は連体修飾語を受けるが、形容動詞は連用修飾語を受ける、連体修飾形に名詞は「の」を、形容動詞は「な」を取る、などが必ずしも当てはまるとは言えない。名詞の連体修飾に「～な」形が現れる例があり、名詞が連体修飾を受けるだけではなく、副詞の修飾を受ける例もある。また、形容動詞の連体修飾に「～の」が付く例も格助詞が付く例もある。意味的な分類の基準として取り扱われている実体概念と情態概念も、語によって例外的な現象がいくらかでも現れる。一語が一つ概念だけ持つのではなく、一語が実体概念と属性概念をあわせ持つ場合もある。また、語そのものは実体概念を表しているが、使われ方によっては情態概念を表す語もある。このように名詞と形容動詞を区別する形態的・意味的な特徴は、どれも絶対的な基準にはならない。

ここでは、情態概念の漢語を中心とした名詞と形容動詞の分類が、辞書ではどのように分けられているかを調べてみる。また、その語の用法を調べて、その用法と品詞との関係がどのように規定されているかを検討してみる。用いられた辞書は『現代国語辞典』（1989、三省堂）、『例解新国語辞典』（1993、三省堂）、『明鏡』（2002、大修館書店）である。〈表3〉での、「助詞」は□□格助詞が付く□□を、「-の」は□□連体修飾形に「～の」を取る□□を、「連体」は□□連体修飾を受ける□□「-さ」は□□接尾辞「～さ」を付けて名詞化する□□を、「-な」は連体修飾形に「～な」を取る□□を、「連用」は□□連用修飾を受ける□□を表す略字として用いる。

〈表3〉 情態概念の漢語の辞書的な品詞分類と用法

語彙(1)	現代国語 (三省堂)	例解 (三省堂)	明鏡 (大修館書店)	助詞	-の	連体	-さ	-な	連用
安易	av	av	av n	×	○	×	×	○	○
案外	av adv	av adv	av adv	×	○	×	×	○	×
安心	av n v	av n v	av n v	○	△	○	×	○	○
安全	av n	av n	av n	○	○	○	○	○	○
意外	av	av	av n	×	△	×	○	○	○
遺憾	av	av n	av n	○	○	×	×	○	○
偉大	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
陰鬱	av	av	av	○	×	○	○	○	○
永遠	av n	n	av n	×	○	○	×	×	○
鋭敏	av n	av	av v	×	×	×	○	○	○
鋭利	av	av	av	×	×	×	○	○	○
円滑	av	av	av	×	×	×	○	○	△
婉曲	av	av	av	×	×	×	○	○	○
円満	av	av	av n	×	○	×	○	○	○
旺盛	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
臆病	av n	av n	av n	×	×	×	○	○	○
穩健	av	av	av	×	×	×	○	○	○
温厚	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
温暖	av	av n	av n	×	△	×	×	○	△
穩便	av n	av	av	×	×	×	○	○	○
快活	av	av	av	×	×	×	○	○	○
怪奇	av n	av n	av n	×	△	×	○	○	○
快調	av n	av n	av n	×	○	×	○	○	○
快適	av	av	av	×	×	×	○	○	○
確実	av	av	av n	○	×	×	○	○	○
活発	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
過度	av n	av n	av n	×	○	×	×	○	△
過当	av n	av	av n	×	×	×	×	○	○
可能	av n	av n	av n	×	×	×	×	○	○
華美	av n	av n	av n	○	×	×	○	○	○
過敏	av	av	av n	×	×	×	○	○	○

語彙(2)	現代国語 (三省堂)	例解 (三省堂)	明鏡 (大修館書店)	助詞	-の	連体	-さ	-な	連用
過分	av	av n	av n	×	○	×	×	○	○
過密	av n	av n	av n	○	×	×	○	○	○
寡黙	av n	av	av n	○	×	×	○	○	○
華麗	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
可憐	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
過労	n	n	n	○	○	×	×	×	○
簡易	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
頑強	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
簡潔	av n	av	av n	○	×	×	○	○	○
頑固	av	av	av	×	×	×	○	○	○
閑静	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
完全	av n	av	av n	×	×	×	○	○	○
寛大	av	av n	av n	×	×	×	○	○	○
簡単	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
簡便	av n	av n	av n	○	×	×	○	○	○
緩慢	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
簡明	av	av	av n	○	×	×	○	○	○
簡略	av n v	av n	av n	○	×	×	○	○	○
寒冷	av n	av n	av n	×	×	×	×	○	○
奇異	av	av n	av n	×	×	×	○	○	○
奇怪	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
危険	av n	av n	av n	○	○	○	×	○	○
希少	av n	av n	av n	×	×	×	○	○	○
貴重	av	av	av	×	×	×	○	○	○
奇特	av	av n	av n	×	×	×	○	○	○
希薄	av n	av n	av n	×	×	×	○	○	○
奇抜	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
奇妙	av	av	av	×	×	×	○	○	○
急激	av	av	av	×	○	×	○	○	○
強健	av n	av n	av n	×	×	×	○	○	○
強固	av	av	av	×	×	×	○	○	○
強硬	av	av	av n	×	×	×	×	○	○
恐縮	av n v	n v	n v	×	○	×	×	○	○

語彙(3)	現代国語 (三省堂)	例解 (三省堂)	明鏡 (大修館書店)	助詞	-の	連体	-さ	-な	連用
狭小	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
強大	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
共通	av n v	av n v	av n v	×	○	×	×	○	△
凶暴	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
狂暴	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
強力	av n	n v	av n	×	×	×	○	○	○
強烈	av	av	av	×	×	×	○	○	○
極端	av n	av n	av	○	×	×	○	○	○
巨大	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
緊急	av n	av n	av n	×	○	○	×	○	○
謹厳	n av	av n	av n	×	×	×	○	○	○
勤勉	av n	av n	av n	○	○	×	○	○	○
緊密	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
空虚	av n	av n	av n	×	×	○	○	○	○
偶然	av n adv	av n adv	av n adv	○	○	○	×	×	○
空疎	av n	av n	av n	×	×	×	○	○	○
空白	av n	av n	av n	○	○	○	×	×	×
苦痛	n	n	n	○	○	○	○	○	○
軽快	av n v	av	av n v	×	×	×	○	○	○
軽挙	n v	n v	n v	×	×	×	×	○	×
軽率	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
軽薄	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
軽妙	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
激烈	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
潔白	av n	av n	av n	○	○	×	○	×	○
陰悪	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
厳格	av	av	av	×	×	×	○	○	○
元気	av n	av n	av n	○	○	○	○	○	○
謙虚	av	av	av	×	×	×	○	○	○
堅固	av	av	av n	×	○	×	○	○	○
健康	av n	av n	av n	○	○	○	○	○	○
健在	av n	av n	av n	×	×	×	○	×	×
嚴重	av	av	av	×	×	×	○	○	○

語彙(4)	現代国語 (三省堂)	例解 (三省堂)	明鏡 (大修館書店)	助詞	-の	連体	-さ	-な	連用
厳肅	av	av	av	×	×	×	○	○	?
謙讓	av n	n	av n	○	○	×	×	×	×
厳正	av n	av n	av n	×	×	×	○	○	○
健全	av	av	av	×	×	×	○	○	○
謙遜	av n v	n v	n v	○	○	×	×	×	×
顕著	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
厳密	av	av	av	×	×	×	○	○	○
懸命	av	av	av n	×	○	×	○	△	○
賢明	av	av	av	×	×	×	○	○	○
儉約	n v	n v	n v	○	○	○	×	×	×
堅牢	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
強引	av	av	av	×	×	×	○	○	○
幸運	av n	av n	av n	○	○	○	×	○	○
光栄	av n	av n	av n	×	×	×	×	○	○
高価	av n	av n	av n	×	×	×	○	○	○
高雅	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
豪華	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
豪快	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
狡猾	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
厚顔	av	av	av n	×	×	×	○	○	×
高貴	av	av n	av n	×	×	×	○	○	○
高潔	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
剛健	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
高尚	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
強情	av n	av n	av n	×	×	×	○	○	○
好色	av n	av n	av n	×	×	×	○	○	○
公正	av n	av n	av n	○	×	×	○	○	○
豪勢	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
宏壮	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
広大	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
好調	av n	av n	av n	○	○	○	○	○	○
高等	av n	av n	av	×	×	×	×	○	×
広範	av	av	av n	×	△	×	○	○	○

語彙(5)	現代国語 (三省堂)	例解 (三省堂)	明鏡 (大修館書店)	助詞	-の	連体	-さ	-な	連用
幸福	av n	av n	av n	○	○	○	△	○	○
公平	av n	av n	av n	○	×	×	○	○	○
豪放	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
高慢	av	av	av	○	×	×	○	○	○
傲慢	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
巧妙	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
酷薄	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
極秘	n	n	av n	×	○	×	△	×	○
孤高	av n	av n	av n	×	○	×	×	×	△
誇大	av	av	av n	×	×	×	×	○	×
孤独	av n	av n	av n	○	○	○	○	○	○
古風	av n	av n	av n	×	×	×	○	○	○
固有	av n	av n	av n	×	○	×	×	○	×
混雑	n v	n v	n v	○	×	○	×	×	×
困難	av n	av n	av n v	○	×	○	○	○	○
最悪	av n	av n	av n	×	○	×	×	○	×
最高	av n	av n	av n v	×	○	×	×	×	×
細心	av n	av n	av n	×	○	×	○	×	△
最低	av n	n	av n	×	○	×	×	○	×
細密	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
早急	av	av	av n	×	○	×	×	○	○
雑多	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
残酷	av n	av	av n	×	×	×	○	○	○
斬新	av	av	av	×	×	×	○	○	○
残忍	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
散漫	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
自然	av n	av n adv	av n adv	○	○	○	○	○	△
失敬	av n v	av n v	av n v	×	×	×	○	○	○
質素	av n	av n	av n	△	×	×	○	○	○
執拗	av	av	av n	×	×	×	○	○	×
失礼	n v	av n v	av n v	×	×	×	○	○	○
自明	av n	av n	av n	×	○	×	○	○	×
邪悪	av n	av n	av n	×	×	×	○	○	×

語彙(6)	現代国語 (三省堂)	例解 (三省堂)	明鏡 (大修館書店)	助詞	-の	連体	-さ	-な	連用
弱小	av n	av n	av n	×	○	×	×	○	×
弱体	av	av n	av n	×	×	×	○	×	○
邪陰	av	av	av n	×	×	×	○	○	×
自由	av n	av n	av n	○	○	○	○	○	○
醜悪	av	av	av n	×	×	×	○	○	×
重厚	av	av	av n	×	×	×	○	○	×
柔順	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
従順	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
重大	av	av	av	×	×	×	○	○	○
柔軟	av	av	av	×	×	×	○	○	○
重要	av	av n	av	×	×	×	○	○	×
殊勝	av	av	av n	×	×	×	○	○	×
主要	av	av n	av	×	○	×	×	○	×
純潔	av n	av n	av n	○	×	×	○	○	○
峻厳	av	av	av n	×	×	×	○	○	×
純情	av n	av n	av n	○	×	×	○	○	○
純真	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
純粹	av n	av n	av n	×	×	×	○	○	○
純白	av n	av n	av n	×	○	×	×	○	×
俊敏	av n	av	n av	×	×	×	○	○	×
詳細	av n	av n	av n	×	×	×	○	○	○
正直	av n	av n	av n adv	○	△	○	○	○	○
小心	av n	av n	av n	×	○	×	○	○	○
親愛	av n	av n	av n	×	×	×	×	○	×
深遠	av n	av	av n	×	○	×	○	○	×
心外	av	av	n	×	×	×	×	○	○
新奇	av n	av n	av n	×	×	×	×	○	×
新規	av n	n	av n	×	○	×	×	×	×
真剣	av n	av n	av n	×	×	×	○	○	○
深刻	av	av	av	×	×	×	○	○	○
真実	av n adv	n adv	av n adv	○	○	×	×	×	×
親切	av n	av n	av n	○	○	○	○	○	○
新鮮	av	av	n av	△	×	△	○	○	○

語彙(7)	現代国語 (三省堂)	例解 (三省堂)	明鏡 (大修館書店)	助詞	-の	連体	-さ	-な	連用
真率	av	av n	av n	×	×	×	×	○	×
慎重	av n	av	av n	×	×	×	○	○	○
神秘	av n	av n	n	○	×	×	○	○	○
神妙	av	av	av n	×	×	×	○	○	×
辛辣	av	av	av n	×	×	×	○	○	×
垂直	av n	av n	av n	○	○	×	×	○	×
崇高	av n	av	av n	×	○	×	○	○	○
静穏	av n	av n	av n	×	×	×	○	○	×
正確	av n	av n	av n	○	×	○	○	○	○
正規	n	n	av n	×	○	×	×	△	×
性急	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
清潔	av n	av n	av n	×	×	×	○	○	○
精巧	av	av n	av n	×	×	×	○	○	○
凄惨	av	av	av n	×	×	×	○	○	×
正式	av n	av n	av n	×	○	×	×	○	×
誠実	av n	av n	av n	×	×	×	○	○	○
清純	av	av	av n	○	△	×	○	○	○
正常	av n	av n	av n	△	○	×	○	○	△
清新	av	av n	av n	×	○	×	○	×	×
清楚	av	av n	av n	×	×	×	○	○	○
精緻	av n	av n	av n	×	×	×	○	○	△
清澄	av	av	av n	×	×	×	○	○	×
正当	av n	av n	av n	×	○	×	○	○	○
正統	n	av n	n	×	○	×	×	○	×
精密	av n	av	av n	×	×	×	○	○	○
清涼	av n	av n	av n	×	×	×	×	○	×
清冽	av	av	av n	×	×	×	×	○	×
絶好	n	av n	n	×	○	×	×	○	×
絶大	av	av	av n	×	○	×	×	○	×
絶妙	av	av	av n	×	○	×	×	○	×
繊細	av	av	av n	×	×	×	○	○	×
浅薄	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
鮮明	av	av	av n	×	×	×	○	○	○

語彙(8)	現代国語 (三省堂)	例解 (三省堂)	明鏡 (大修館書店)	助詞	-の	連体	-さ	-な	連用
善良	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
鮮烈	av	av	av n	×	○	×	○	○	○
疎遠	av n	av n	av n	×	○	×	○	○	×
相応	av n v	av v	av n v	×	○	×	×	×	×
莊嚴	av	av	av n	×	×	×	○	○	×
早熟	av n	av n	av n	×	○	×	○	○	○
壯絶	av n	av	av n	×	×	×	○	○	×
壮大	av	av	av n	×	×	×	○	○	×
莊重	av	av	av n	×	×	×	○	○	×
相当	av n v adv	n av v adv	n av v adv	×	○	×	×	○	×
聡明	av	av	av n	×	×	×	○	○	×
壮麗	av	av	av n	×	×	×	○	○	×
粗雑	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
粗大	n	av	av n	×	×	×	○	×	×
素朴	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
粗末	av	av	av n	×	×	×	×	○	○
粗野	av	av n	av n	×	×	×	×	○	×
存外	av adv	av adv	av	×	○	×	×	○	×
尊嚴	av n	av n	av n	○	○	×	○	×	×
尊大	av	av	av n	×	×	×	○	×	×
大儀	n	n	av n	×	×	×	×	○	×
大事	av n	av n	av n	×	×	×	×	○	×
大胆	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
対等	av n	av n	av n	×	○	×	○	○	○
太平	av n	av n	av n	×	○	×	○	○	×
怠慢	av n	av n	av n	○	×	△	○	○	○
多額	av n	av n	av n	×	○	×	×	×	×
多彩	av n	av n	av n	×	×	×	○	○	○
多才	av n	n	av n	×	×	×	×	○	×
多大	av	av	av n	×	○	×	×	○	×
妥当	av v	av n v	av n v	×	×	×	×	○	×
多難	av n	av n	av n	○	○	○	○	○	○
多忙	av n	av n	av n	○	○	×	○	○	○

語彙(9)	現代国語 (三省堂)	例解 (三省堂)	明鏡 (大修館書店)	助詞	-の	連体	-さ	-な	連用
多様	av n	av	av n	×	×	×	○	○	×
単一	av n	av n	av n	×	×	×	×	○	○
短気	av n	av n	av n	○	×	×	×	○	○
単純	av n	av n	av n	△	△	△	○	○	○
端正	av n	av	av n	×	×	×	○	○	×
単調	av n	av	av n	○	×	×	○	○	○
端的	av	av	av	×	×	×	×	○	×
丹念	av	n v	av n	×	×	○	○	○	○
淡白	av n	av n	av n	×	×	×	○	○	○
端麗	av	av	av n	×	×	×	○	×	×
緻密	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
忠実	av n	av n	av	×	×	×	○	○	○
著名	av	av n	av n	×	×	×	×	○	×
沈着	av n	av	av n v	×	×	×	×	○	×
痛快	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
痛切	av	av	av n	×	○	×	×	×	×
痛烈	av	av	av n	×	×	×	○	○	×
低調	av n	av	av n	×	×	×	○	○	×
適切	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
適當	av n v	av	av n	×	○	×	○	○	○
当然	v adv	av n adv	av n	×	○	×	×	○	○
同等	av n	av n	av n	×	○	×	○	○	○
透明	av n	av	av n	×	○	×	○	○	○
同様	av n	av	av n	×	○	×	×	○	×
得意	av n	av n	av n	×	○	×	○	○	○
独自	av n	av n	av n	×	○	×	○	○	○
特殊	av n	av n	av n	×	○	×	○	○	○
特種	av n	av n	n	○	○	○	○	○	○
独特	av	av n	av n	×	○	×	○	○	○
特別	av adv	av	av n adv	×	○	×	○	○	○
特有	av n	av n	av n	×	○	×	○	○	○
突然	adv	adv	adv	×	○	○	△	○	○
鈍感	av n	av n	av n	○	×	×	○	○	○

語彙 (10)	現代国語 (三省堂)	例解 (三省堂)	明鏡 (大修館書店)	助詞	-の	連体	-さ	-な	連用
貪欲	av n	av n	av n	○	○	×	○	○	○
内密	av n	av n	av n	×	○	×	×	○	×
難儀	av n v	av n v	av n v	○	○	○	○	○	○
熱心	av n	av n	av n	○	○	×	○	○	○
熱烈	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
濃厚	av	av	av	×	×	×	○	○	○
莫大	av	av	av n	×	○	×	○	○	○
煩雑	av n	av n	av n	×	×	×	○	○	○
卑怯	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
卑屈	av	av	av n	×	○	×	○	○	○
悲惨	av	av	av n	×	×	○	○	○	○
非情	av n	av n	av n	×	×	×	○	○	○
悲痛	av n	av	av n	×	×	○	×	○	×
必要	av n	av n	av n	○	×	○	○	○	○
非凡	av n	av n	av n	×	○	×	○	○	○
秘密	av n	av n	av n	○	○	○	×	×	×
平等	av n	av n	av n	○	○	○	○	○	○
微妙	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
敏感	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
貧弱	av	av n	av n	×	×	×	○	○	○
頻繁	av	av	av n	×	×	×	×	○	○
貧乏	av n v	av n v	av n v	○	×	○	○	○	○
複雑	av n	av n	av n	×	×	×	○	○	○
平易	av n	av	av	○	×	×	○	○	○
平気	av n	av n	av n	×	×	×	×	○	×
平静	av n	av n	av n	○	×	×	○	○	○
平凡	av n	av n	av n	○	×	×	○	○	○
平和	av n	av n	av n	○	○	×	○	○	○
偏狭	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
変則	av n	n	av n	×	○	×	×	×	×
便利	av n	av n	av n	○	×	○	○	○	○
法外	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
豊富	av	av	av	×	×	×	○	○	○

語彙 (11)	現代国語 (三省堂)	例解 (三省堂)	明鏡 (大修館書店)	助詞	-の	連体	-さ	-な	連用
豊満	av	av n	av n	○	×	×	×	○	○
満足	n v	av n v	av n	○	○	○	○	○	○
満腹	av n adv	av n v	n v	×	○	×	○	×	○
密接	av n v	av n v	av n v	×	×	×	○	○	○
未定	n	av n	n	×	○	×	×	○	×
未練	av n	av n	av n	○	○	○	○	×	×
明快	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
明確	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
明細	av	av n	av n	○	×	×	×	○	×
明白	av	av	av n	○	×	×	○	○	○
名誉	n	av n	av n	○	○	○	×	○	×
明瞭	av n	av n	av n	×	×	×	○	○	○
明朗	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
綿密	av n	av	av n	×	×	×	○	○	○
猛烈	av	av n	av n	×	×	×	○	○	○
野蛮	av n	av n	av n	○	×	×	○	○	○
野卑	av n	av n	av n	○	×	×	○	○	○
優位	av n	av n	av n	○	○	○	×	○	○
憂鬱	av n	av n	av n	○	×	○	○	○	○
有益	av n	av n	av n	×	×	×	○	○	○
優雅	av n	av n	av n	○	×	×	○	○	○
有害	av n	av n	av n	△	△	△	○	○	○
勇敢	av	av	av n	○	×	×	○	○	○
悠久	av n	av n	av n	×	○	×	○	○	○
有限	av n	av n	av n	×	○	×	○	○	○
有効	av	av	av n	×	×	×	×	○	○
優秀	av	av	av	×	×	×	○	○	○
有数	av n	av n	av n	×	○	×	×	○	○
優勢	av n	av n	av n	○	○	○	×	○	○
勇壮	av	av	av n	○	×	×	○	○	○
雄大	av	av	av	×	×	×	○	○	○
有毒	av	av n	av n	×	×	×	×	○	○
有能	av n	av n	av n	×	×	×	○	○	○

語彙 (12)	現代国語 (三省堂)	例解 (三省堂)	明鏡 (大修館書店)	助詞	-の	連体	-さ	-な	連用
優美	av n	av n	av n	○	○	×	○	○	○
有望	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
有名	av	av n	av n	×	×	×	○	○	○
勇猛	av n	av n	av n	○	×	×	○	○	○
有用	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
有利	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
優良	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
有力	av	av	av	×	×	×	○	○	○
愉快	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
容易	av	av	av	×	×	×	○	○	○
陽気	av n	av n	av n	○	×	○	○	○	○
幼少	n	n	av n	×	○	×	×	×	×
幼稚	av	av	av n	×	×	○	○	○	○
乱雑	av n	av n	av n	×	×	×	○	○	○
乱暴	av n v	av n v	av n	○	○	○	○	○	○
流麗	av	av	av	×	×	×	○	○	○
良好	av n	av	av n	×	×	×	○	○	○
良質	av n	av n	av n	○	○	×	○	○	○
冷血	av n	n	av n	○	×	×	○	○	○
冷厳	av	av	av	×	×	×	○	○	○
冷酷	av n	av	av n	×	×	×	○	○	○
零細	av	av	av	×	×	×	○	○	○
冷静	av n	av n	av n	○	×	×	○	○	○
冷淡	av	av	av n	○	×	×	○	○	○
冷徹	av	av	av n	○	×	×	○	○	○
劣悪	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
露骨	av	av	av n	×	×	×	○	○	○
腕白	av n	av n	av n	○	×	○	○	○	○

〈表3〉の語彙の品詞は辞書によって大きな差が現れる。この語彙の品詞を項目別に分類すると〈表4〉のようになる。

〈表4〉 辞書の品詞項目の数

辞書類 品詞項目	現代国語	例解新国語辞典	明鏡
形容動詞	186	192	44
形容動詞と名詞	164	156	308
形容動詞と名詞と 動詞	14	12	14
形容動詞と名詞と 副詞	3	3	5
形容動詞と動詞	1	1	1
形容動詞と副詞	3	2	1
形容動詞と連体詞	0	0	1
名詞	11	13	8
名詞と動詞	5	7	6
副詞と他	2	3	1
総語彙	389	389	389

辞書で用いられた情態概念の漢語の数は389語である。〈表4〉からわかるように、形容動詞と名詞との関係の以外の語は、品詞が三つの辞書で殆んど一致する。純粹の形容動詞の数は『現代国語』（1989）は186語、『例解新国語辞典』（1993）は192語、『明鏡』（2002）は44語、名詞と形容動詞に跨っている語の数は、『現代国語』は164語、『例解新国語辞典』は156語、『明鏡』は308語である。『現代国語』と『例解新国語辞典』では、語性に大きな差はないのであるが『明鏡』は純粹な形容動詞の数が他の二つの辞書に比べて23%ぐらいであり、名詞と形容動詞に跨っている語の数は、他の二つの辞書に比べて、二倍

ぐらいである。

このように、辞書の品詞分類に差が現れるのは、言語の感覚における個人差の反映であると考えられる。また、辞書が書かれた時期も、品詞に差が現れる理由になりうると思われる。

4. 同形漢語の名詞と形容動詞

外来語が日本語に移入される際、一語が一つの語性を持つのではなく、二つ・三つ・四つの語性をあわせ持つ場合もある。このような現象は、特に漢語でよく見られる。これは漢語が流入される時、それを体言として用いるのであるが、次第に、動詞・形容動詞・副詞・連体詞などに語の機能を拡大させていくからである。

4.1. 同形漢語に現れる品詞

表意文字である漢語は、一語が一つの意味だけを持つのではなく、二つまたはそれ以上の意味を持つ多意機能を有しており、品詞においても二つまたは三つの品詞機能を有する場合がある。例えば、名詞と動詞や名詞と形容動詞の語性をあわせ持つ語が多く見られるし、名詞と動詞・形容動詞・副詞などの語性を共に帯びている語も少なくない。同形漢語に現れる様々な品詞を見てみる。

(71)～(74)の「共通」「失礼」「難儀」「相応」などは、名詞と形容動詞と動詞の語性をあわせ持つ語である。

- (71a) インフレが各国に**共通**の問題であった時がある。
- (71b) ふつう、国家は、民族・言語・宗教のどれかの点で、**共通**な点があつて成り立つのです。
- (71c) こうして地域間に**共通する**言葉が形作られていった。
- (72a) あらかじめ、相手の都合もきかずに、いきなり訪問するのは**失礼**だ。
- (72b) いきなりはいつてきて人の話の腰を折るなんて、本当に**失礼**な男だな。
- (72c) では、**失礼**して、お部屋を拝見させていただきます。
- (73a) 親友の**難儀**をほうっておいたら、ぼくの沽券にかかわるよ。
- (73b) ペンキぬりといっても、炎天下でトタン屋根をぬるのだから、**難儀**な作業である。
- (73c) 「箱根の山は天下の険」と言ってね、昔は越えるのに**難儀**する所だったんだ。
- (74a) 力は足りませんが、この社会の一員として**相応**の努力をしたいと思います。
- (74b) 子供でも家族の一員ですから、それ**相応**に役割を果たします。
- (74c) 働きに**相応した**報酬が得られなくて、不満をもっている人も多いでしょう。

同形漢語が名詞と形容動詞と副詞の語性をあわせ持つ語もある。

(75) (76)の「偶然」「真実」は、名詞と形容動詞と副詞として用いられている例である。

- (75a) きみとぼくの誕生日がいっしょだなんて、**偶然**の一致にしてもうれしいね。
- (75b) 急激かつ**偶然な**外来の事故によりケガをされた場合に、各種保険金をお支払いします。
- (75c) 友達と映画を見に行ったら、**偶然**、学校の先生に会いました。
- (76a) うまく言い逃れても、いずれ**真実**がわかる時がくる。
- (76b) 鎌倉の文化も風俗も手玉にとられ、人々はそのころの風俗のままに諸元素のような変わらぬ強いあるものに還元され、自然のうちに織り込まれ、僕らを差し招き、**真実な**回想とはどういうものかを教えている。
- (76c) だから、この母の告白は**真実**驚いた。

「相当」は名詞・動詞・形容動詞・副詞の四つの品詞に跨っている語である。

- (77a) 父親が有名な実業家だっただけに、彼女には現在**相当**の財産があるものと思われます。
- (77b) 聞くところによると、T氏は財界で**相当な**力を持っているそうだ。
- (77c) このダイヤモンドの価値は、およそ一億円に**相当する**という。
- (77d) あのようにオブラートに包んだ言い方をしているが、本心では**相当**怒っているにちがいない。

このように、一語に多数の品詞性を表わすことができるのは、それが外来語だからであると考えられる。特に、漢語のような表意文字の場合は、語が用いられる背景と状況と人物によって、語の意味の領域が拡大される可能性がある。このような理由で、一語が多数の品詞に跨るようになったと考えられる。

4.2. 同形漢語の名詞と形容動詞

名詞と形容動詞の境界が曖昧であるというのは、これまで見てきた通りであるが、特に、同形漢語の名詞と形容動詞においては、一層、曖昧さが感じられる。名詞と形容動詞の語性をあわせ持つ語であるとしても、名詞と形容動詞の用法を全て有するとは限らない。ある語は名詞性が強く現れており、ある語は形容性が強く現れる。

(78a) 慎重といえは聞こえはいいが、裏を返せば**臆病**となるから、ものは言いようだと思うな。

(78b) 「あつものに懲りてなますを吹く」ということわざがあるが、一度失敗すると、とかく**臆病**になりがちだ。

(78c) パンダは**臆病**な動物で、非常に用心深いところがある。

(79a) 日本代表の座を得るまでには、まだ幾多の**困難**が待ち受けていたのです。

(79b) 人類は、その英知を生かして、これまで多くの**困難**を乗り越えてきた。

(79c) **困難**な仕事も、協力すれば、なんとかやりとげることがで

きよう。

- (80a) 外国より**勤勉**が重視されていたことは事実である。
- (80b) 裸一貫から苦勞して身を起こした人だから、その**勤勉**さについては言うもおろかである。
- (80c) 今の日本人全体で考えると、本当にまじめで**勤勉**な国民かどうかは、少々疑問があります。
- (81a) 道祖神とは、旅人の道の**安全**を守る神のことである。
- (81b) ネパールに渡航される際には、最新の情報の入手に努め、**安全**の確保に努めて下さい。
- (81c) 「急がば回れ」という格言は、危険な近道よりも、遠くても**安全**な道のほうが、結局は早いと教えている。

(78)～(81)の「臆病」「困難」「勤勉」「安全」は、名詞と形容動詞の語性を有する語である。しかし、品詞が名詞と形容動詞に跨っているからといって、名詞と形容動詞の用法を全て備えているわけではない。「臆病」「困難」「勤勉」「安全」は形容動詞としての用法はすべて備えている。しかし名詞としての用法には違いが現れる。(78)の「臆病」の場合、名詞としての用法-格助詞がつく・連体修飾形に「の」をとる・連体修飾を受ける-の例は見られないし、(79)の「困難」は、名詞としての用法のうち、格助詞が付くことと連体修飾を受ける用法はあるが、連体修飾の「～の」は見られない。「勤勉」は格助詞は付くが、他の名詞の用法は見られない。これらの違いは、同じ名詞と形容動詞の性格を備えていても、語によって名詞性が強い語は名詞的な用法に用いられ、形容性が強い語は形容動詞的な用法に用いられるということを示している。

(82a) わたしたちの暮らしにまつわるすべての夾雑物を排除して、**純粹**の美のみを追求するのが純粹芸術の立場であろう。

(82b) この童話を読んだ時の**純粹な**感動をいつまでも持ち続けたい。

(83a) 昼間は勤めていますから、**緊急**の場合は勤務先に連絡してください。

(83b) 災害や事故など、**緊急**な事態が発生した時の連絡先を、はっきり決めておこう。

(82) (83) の「純粹」「緊急」は、名詞性と形容動詞性をあわせ持つ語であるから、連体修飾において名詞の場合は「の」を、形容動詞の場合は「な」が用いられている。名詞と形容動詞の意味に差が認められるとしたら、(82a) の「純粹の」と (82b) の「純粹な」そして (83a) の「緊急の」と (83b) の「緊急な」には、意味に差が現れるべきである。しかし、(82a) と (82b)、(83a) と (83b) は、連体修飾語の「の」と「な」を取り替えても意味に差がなく、用法にも何の差し支えがない。

同形漢語の名詞と形容動詞の中には、名詞として用いられる場合と形容動詞として用いられる場合とで、意味が変わるものがある。

(84a) 変な**格好**で寝たから、首が痛い。

(84b) ここは子どもたちにとって**格好**の遊び場だ。

(85a) 運良く火事は**大事**に至らなかった。

(85b) **大事な**花瓶をこわしてしまった。

- (86a) 輸出産業は**不景気**に苦しんでいる。
- (86b) 彼は**不景気な**顔をしている。
- (87a) この立ち合いは、木刀ではなく、**真剣**を用いた勝負だった。
- (87b) 彼も学問の道に開眼したらしく、**真剣**に研究に取り組むようになった。

(84)の「格好」が名詞に用いられる場合は□□外から見た形・姿・身なり□□の意味であるが、形容動詞として用いられる場合の意味は□□ちょうどよいさま□□である。(85)の「大事」も、名詞の場合は、□□重要な事柄、または重要な事件□□の意であるが、形容動詞の場合は□□価値を認めて、大切に扱うさま□□である。(86)の「不景気」の名詞の意味は、□□景気が悪いこと□□であるが、形容動詞は□□気分が沈んで活気がないさま□□を表す。(87)の「真剣」の名詞的な意味は□□竹剣・木刀などに対して本物の刀剣□□であり、形容動詞としての意味は、□□一所懸命に物事をするさま、本気なさま□□を表わしている。

4.3. 同形漢語の名詞と形容動詞の用法の分析

名詞と形容動詞の用法について見てみると、品詞が名詞と形容動詞に属している語であるといっても、名詞と形容動詞の用法を全て備えているわけではない。例を通して検討してみる。

- (88a) せっかくのお誘いですが、健康がすぐれないので、今日のところは失礼させていただきます。

(88b) 風呂上がり、頭から水をかぶることがわたしの健康の秘けつです。

(88c) 疲れたとき眠くなるということは、人体の健康を保つために必要な機能である。

(88d) 筋肉と脂肪のバランスには最も顕著にフェレットの全身のタフさと健康さが反映されますから、健康状態と日常管理の得点でも最もウェイトが置かれているのです。

(88e) 日光は、健康な体を作るうえで重要な働きをしている。

(88f) 法王を検診した医師は、法王は年齢の割にとても健康であると宣言した。

(89a) 父は交通事故がもとで、左足の自由が利かなくなった。

(89b) わたしたちは、個人として自らの責任によって行動し、互いの自由の領域を侵犯しないようにしたいものだ。

(89c) わたしたちには、どんな宗教でも信仰することができるという「信教の自由」がある。

(89d) つまり製品に込められた知恵に、利用者の知恵が重ねられれば、デジカメの制約であっても、逆にデジカメの使い勝手の自由さによってカバーできる可能性は高い。

(89f) この大学の自由な学風を慕って、毎年大勢の若者が入学してくる。

(89g) 伝導電子とは、物質中に存在し、原子軌道で静的には表現されない物質中を比較的自由に動ける電子をいいます。

(88)(89)は、「健康」と「自由」の様々な用法について列挙したものである。用例で見た通り、「健康」と「自由」は、名詞の特徴と形

容動詞の特徴をすべて備えている完全な名詞でありながら完全な形容動詞であると言えよう。

では、次の例を見てみよう。

(90a) このタイプライターがよく故障するのは、きみの使い方に
無理があるからだ。

(90b) 上級生の**無理な**命令に、下級生たちはいっせいに不平を鳴
らしました。

(90c) この仕事は重労働だから、女にはとても無理だ。

(90)の「無理」は、品詞が名詞と形容動詞に跨っているが、名詞の連体修飾の「～の」の形には用いられないし、形容動詞を名詞化する接尾辞「～さ」も付かないから、名詞にも形容動詞にも欠如された部分があって完全な名詞と形容動詞とは言いにくい。

(91a) 彼はメキメキと力をつけ、一年もするとチームの**強力な**戦
力になった。

(91b) 社長は社員の批判を受けながらも、海外進出計画を**強力に**
推し進めた。

(92a) 不幸せな少女時代を過ごしたが、今は結婚して、**円満な**家
庭を築いているという。

(92b) あのがんこおやじも、最近は角がとれて、すっかり円満に
なったらしい。

(91)と(92)の「強力」「円満」は、辞書的分類では、名詞と形容動詞の語性を有しているが、実際に用いられる範囲では、名詞としての

機能は見られない。これらの語は主語にならないし、格助詞も付かない。また、連体修飾の用法がないから名詞であるという根拠はないと考えられる。

情態概念の漢語の辞書の分類を示した<表3>のなか、形容動詞と名詞の品詞と用法²⁾との関係を整理したのが<表5>である。

<表5>形容動詞と名詞の品詞と用法との関係

品詞の関係	形容動詞の用法		名詞の用法	
	三つの用法	語数	三つの用法	語数
三つの辞書で共通に名詞と形容動詞に跨っている語数：130語	3	88	3	11
			2	18
			1	32
			0	27
	2	21	3	6
			2	2
			1	7
			0	6
	1	17	3	2
			2	2
			1	8
			0	5
	0	4	3	2
			1	2

- 2) 用法とは、形容動詞の用法である①接尾辞「～さ」を付けて名詞化する
 ②連体修飾形に「～な」を取る、③連用修飾を受ける、と名詞の用法である④格助詞が付く、⑤連体修飾形に「～の」を取る、⑥連体修飾を受ける、ということである。

品詞の関係	形容動詞の用法		名詞の用法	
	三つの用法	語数	三つの用法	語数
三つの辞書で共通に純粋な形容動詞の語数:36語	3	35	2	1
			1	2
			0	32
	1	1	0	1
初めは形容動詞の語性だけであったが後に名詞の語性が加わった語数:146語	3	101	1	20
			0	81
	2	31	2	1
			1	6
			0	24
	1	13	1	6
			0	7
	0	1	1	1
形容動詞と名詞の語性の語が後に形容動詞の語性だけ残すようになった語:9語	3	6	1	3
			0	3
	2	1	0	1
	1	2	1	1
			0	1
名詞の語性に形容動詞の語性が加わった語:4語	2	1	1	1
	1	2	3	1
			0	1
	0	1	1	1
形容動詞と名詞に跨っている語が後に名詞の語性だけ残すようになった語:8語	3	2	3	1
			1	1
	2	2	1	1
			0	1
	1	3	1	3
	0	1	2	1

名詞と形容動詞に跨っている語の中で、名詞と形容動詞の六つの用法を全て備えている語は「安全」「元気」「健康」「好調」「孤独」「自由」「親切」「多難」「難儀」「平等」「亂暴」などの11語に過ぎず、「孤高」「最高」「空白」「秘密」などは形容動詞の用法が見られない。純粹の形容動詞の中、「端的」は形容動詞の用法が一つしか見られないし、「陰鬱」「急激」「高慢」は名詞の用法も目立つ。

以上の用例で、名詞と形容動詞、そして、名詞と形容動詞に跨っている語の特徴を調べてみた。語性は一語に一つだけあるのではなく、いくつか有することができるし、その特徴も一律ではなく、名詞の性格が強い語もある一方、形容動詞の性格が強い語もあることがわかる。

5. おわりに

本章は、名詞と形容動詞の形態・用法・意味などを中心にそれらの範囲について考察を行ったものである。

一般に名詞と形容動詞の区別の基準に、格助詞と修飾語の接続などの形態的な特徴をあげているが、この用法には例外的な現象も多く見られる。

「京菓子は**新鮮**が一番です。」「進行の**厳密**がある。」などは、形容動詞の語幹に格助詞が付いた例であるし、「**不思議**の力願主」「**純粹**の条件」「恋はいつも**未知**なもの」は、連体修飾形のゆれである。また、「彼女は**すこぶる**美人だ」「水に入ったら、**てんで**金槌だ」などは名詞が連用修飾を受ける例である。このような例が現れるのは、

名詞の意味と関係がある。つまり、情態概念を含んでいる名詞の場合と、名詞の意味は実体概念の語であるが、文の中で情態概念を表す場合は、連用修飾を受けるのである。

名詞と形容動詞の形態的な特徴と意味の関係を調べるために辞書の品詞分類と用法について検討してみた。調査の結果、『現代国語』(1989)と『明鏡』(2002)の間の十数年間、語彙の意味と用法に変化があったことがわかる。純粋な形容動詞の数と、名詞と形容動詞に跨っている語の数は、『現代国語』が186語/164語であり、『明鏡』が44語/308語である。形容動詞だけの語性を帯びている語の数が減り、名詞と形容動詞に跨っている語の数が増えたということは、語の意味領域が拡大したことを意味する。また、名詞と形容動詞に跨っている128語の中、名詞と形容動詞の六つの領域に当てはまる語は、「安全」「元気」「健康」などの11語に過ぎず、『明鏡』で名詞とされた語でも、名詞の用法が安定していないことがわかる。

以上のことから、名詞と形容動詞の語性をあわせ持つ語であるとしても、名詞的な要素の強いものと形容動詞的な要素の強いものとがあることがわかる。また、このような語の特性は、人の主観的な判断や時代の流れによって変化するし、品詞の移動も行われて名詞あるいは形容動詞として固定されることがわかる。

第4章

形容動詞化する接尾辞「的」について

1. はじめに

外国語が日本語として導入される際の語は主に体言の形態であり、体言は原語がそのまま受け入れられるのが一般的である。しかし、用言は原語をそのまま受け入れられないことから、日本語化する作業を必要とした。動詞の場合は、その方法の一つとして「～する」を接続させる形で動詞化したが、形容詞の場合は、日本語の形容詞より語幹の独立性が強い形容動詞の形で日本語化している。

形容動詞化する方法には、形容性の語に「～だ」を付ける方法や名詞に接尾辞「～的だ」を付ける方法がある。

「的」は明治以来著しく用いられるようになったものであり、生産力が優れた派生語として多量の形容動詞を作り出している。「的」が接続される語の種類は、移入初期は漢語名詞だけであったが、しだいに和語、外来語、混種語などにその範囲が広がっている。「的」形の語の範囲が広がるにつれて「的」の意味も広がり、意味の変化につれて評価義ももたらすようになった。

「的」の範囲が拡大するにつれて「的」と接続する語基の意味分析と「的」の用法など、「的」に対する研究も進んでいる。しかし、「的」と接続する語基に対する意味分析は、包括的な意味分析の数的な統

計が主であり、どのような意味が、どのような基準で分類されているかに対する具体的な語例の提示は行われていない。連体修飾形においても、「的な」と「的」が共に用いられているが、これらの違いに対する分析も行われていない。

本章では、形容動詞化する接尾辞「的」について、展開過程を中心とした「的」の意味や用法、「的」の評価義について検討する。特に、「的」の付く語と共に「的」の付かない語についても考察を進める。また、連体修飾形の「的な」と「的」そして、「的の」の用法について解釈を加えたい。

2. 先行研究の検討

2.1. 藤居信雄(1957)

藤居(1957)は、「的」と接続する語基について次のように述べている。

名詞と的との結び付きは、だいたい慣用によっています。そこにははっきりしたルールはないと行ってしまうとそれまでのようなものです。なぜなら、強いて的を付けようとする意図をもってさえすれば、的は、漢語であろうと西洋系のことばであろうと、また本来の日本語であろうと論なく、すべての名詞に付くことができます。いや、体言ばかりではありません。句にも文にも、こと

にイディオムには付きやすい。(pp. 73)

藤居は、「的」の接続は、はっきりしたルールがなく、慣用による
といい、接続する語の範囲も漢語だけでなく、カタカナ語と和語など
すべての名詞に付くとし、このような「的」の性質を「無規則連結性
」という。また、「的」の意味について、意味のはたらきはいまい
で、意味のひろがりもぼやけているから、機能や領域をはっきり示す
ことが難しいという。「的」は、「らしさ」の意味で、ある性質をも
つこと、ある傾向があることで「そのもの」ではないといい、例とし
て「ヘンリー八世的」の「的」は「～のような」「～風な」の意味で
あり、「二価値的なものの考え方」の「的」は「～にもとづく」「～
に従う」の意味であり、「心的分析」の「的」は「の」の意味である
と述べている。

「的」が含んでいる意味に基づいて、語の意味を分析する次元で言
うと、藤居のいうとおり「的」はすべての名詞に付くことができる。
つまり、「父母のような」を「父母的」に、「信用に基づいて」を「
信用的」に用いることができるわけであるが、実際には「父母的」「
信用的」などは用いない。また、「紳士の」「成功的」「動物的」は
用いるが、「淑女的」「失敗的」「植物的」は用いない。

2.2. 遠藤織枝(1984)

遠藤(1984)は、『日本国語大辞典』を引用して「接尾語「的」は明
治以後著しく使われるようになったものであるが、造語力が強く、派
生語として形容動詞を多量に作り出している。」とし、また「主とし

て抽象的な漢語名詞につくとされるが、和語や外來語につく用法もあり、極めて繁殖力のつよい接尾語といえる。」とした。しかし、すべての名詞につくわけではないといっている。遠藤は「的」と結合する語の意味分類と共に「的」と結合しない語についても言及しているが、「的」と結合しない名詞に対する具体的な例を提示していないので曖昧さが感じられる。

また、「的」の意味を、①…に関する(芸術的才能)②…のような(病的な神経)③…の状態である(圧倒的な勝利)④…としての、…である(職業的軍人)の四つに分類し、同一の語句で2種、3種の意味をもち、いくつかの分類に重なっているものもあると述べている。しかし、遠藤は、このような「的」の多義性がすべての語基に対して起こりうるかどうかについては言及していない。

一方、「的」形の名詞の用法について次の八つにわけて提示している。

- | | |
|----------------|----------------|
| ① ○○的+体言 | (例) 軍事的状況 |
| ② ○○的+な+体言 | 短期的な勝利 |
| ③ ○○的+に+用言 | 科学的に指摘する |
| ④ ○○的+用言 | 比較的安全だ |
| ⑤ ○○的+○○的+体言 | 肉体的・精神的ストレス |
| ⑥ ○○的+○○的+な+体言 | 総合的・多量的な取り組み |
| ⑦ ○○的+○○的+に+用言 | 対立的・対抗的に意識している |
| ⑧ ○○的+と | 個性的という美名 |

遠藤は、「的」に用言が接続するときの形態を③と④に分類し、④

の場合に該当する「比較的」は、形容動詞とも副詞ともみることができるから、副詞として認める場合は④のような用法も可能であるといっている。しかし、体言に接続する形態①と②については、用例数の比較に対しては言及しているが、①と②の意味分析と傾向性などについては言及していない。

2.3. 山下喜代(1999)

山下(1999)は、新聞の「的」形の語を抽出し、「的」の成分と機能について考察し、「的」の機能を次の三種に分類した。

まず、合成語「A的」を文中において接続形態によって四つの類形に分類した。

- | | | |
|--------------|-----------------|-------|
| ① 「な」を後接する。 | (A的な～) | 39.5% |
| ② 「に」を後接する。 | (A的に～) | 35.1% |
| ③ 「体言」を後接する。 | (A的B) | 17.2% |
| ④ その他を後接する。 | (A的だ/ で/ と/ の等) | 8.2% |

山下は、この四つの中、「A的」に体言が接続する合成語「A的B」だけを取り上げ、「的」の役割について考察している。連体修飾語として機能する①と③の比率が、39.5%と17.2%であり、同じ機能である「的な」と「的」の意味分析については言及されていない。

3. 「的」形の語

3.1. 漢語＋「的」

「的」の意味は、発生期の「の」の意味から次第に状態や様子、属性などの情態概念の意味に拡大された。従って、「的」は、名詞に情態概念を付与することで、品詞を名詞から形容動詞に変化させる役割をする。このような理由で、情態概念の形容動詞語幹には「的」が付かない。

「的」と結合する語に対する辞書的な解説は次のとおりである。

名詞、特に抽象的な意味を表す漢語の名詞や、体言的な語および句について……『日本国語大辞典』（1978）

名詞およびそれに準ずる語（多く抽象的な意味を表す漢語）につけて……『学研国語大辞典』（1988）

名詞や造語成分に添えて……『新明解国語辞典』（1989）

名詞に添えて……『広辞苑』（1998）

多く抽象的な意味を表す漢語について……『明鏡』（2002）

辞書で「的」は、名詞、特に抽象的な漢語名詞につくことに要約される。具体的に「的」の前接する漢語の性質について考察してみたい。

〈表1〉 「的」と結合する漢語

「的」と接続する 語基の意味分類	語 例
人間関係	私的・公的・女性的・男性的・家族的・個人的 紳士の・人間的・貴族的・庶民的
心・感覚・性質	心的・情欲的・偽善的・好意的・情熱的・良心的 感情的・懷疑的・誘惑的・意志的・衝動的・意識的 魅力的・個性的・無意識的・刺激的
精神・思想	知的・理想的・理性的・盲目的・知性的・本質的 観念的・精神的・思想的・啓蒙的・民主的・革新的 革命的・人道的・超自然的・反時代的・反社会的 非科学的・非合理的・非人道的・禁欲主義的
行為・活動 職業・仕事	専門的・成功的・常識的・潜在的・学業的 事務的・商業的・殺人的・人間中心的・出世間的 官僚的・軍事的
態度	自律的・自主的・威圧的・厭世的・官能的・理性的 友好的・積極的・批判的・命令的・模範的・冷笑の 消極的・自己中心的・官僚主義的・小市民的
状態	静的・動的・狂的・病的・圧倒的・中心的・中性的 継続的・永久的・衛生的・解放的・印象的・半永久的
抽象的な関係	神的・性的・靈的・希望的・絶望的・意欲的・形式的 現実的・理論的・一般的・客観的・断定的・超越論的 世紀末的・不可避的
変化・動き	動的・静的・自然的・人工的・人為的・作為的 常習的・無制約的・幾何級数的
動物・体	肉的・動物の・肉体的・身体的
学	学的・科学的・学問的・哲学的・歴史的・化学的 物理的・数学的・倫理的・音楽的・論理的・芸術的 言語学的・社会学的・心理学的・幾何学的
領土(国家)	世界的・国際的・国家的・全国的・異国の・大陸の 民族的
時間	現代的・近代的・定期的・前時代的
方法・理論	法的・演繹的・帰納的・実質的・弁証法的

「的」と接続する語基の意味を見てみると、人間と関係がある内容と抽象的な意味を表す語が多いことがわかる。「的」に接続する語基は次のような特徴がある。

(ア) 実体概念の語に後接する。

「家族」「女性」「国家」などの実体概念の語に「的」が接続して、情態概念の形容動詞になる。

(イ) 上位概念の語に後接する。

上位概念の語と下位概念の語が存在する場合、上位概念の語に「的」が付き、下位概念の語には付かない傾向がある。例えば、「家族」には「的」がついて「家族的」と用いるが、「父母」「兄弟」などには「的」がつかないし、「季節的」は用いるが、「春的」「夏の」などは用いない。

(ウ) 包括的な意味の語に後接する。

「紳士の」は用いるが、対応の関係にある「淑女的」は用いない。これは、「紳士の」が性別に対することを表すのではなく、人格に対することを表すからであるといえよう。「貴族的」は用いるが、これの対応概念の「平民的」は用いない。これは、「貴族的」は階級を表すのではなく、貴族の品格や様子を表すのであると解釈される。従って、「平民的」は用いなくても、反対概念に「庶民的」は用いる。

<表1>では、「的」が付く語の例を挙げているが、「的」が付かない語にはどのようなものがあるか考察してみたい。「的」が付かない語基はだいたい次のようであるといえよう。

(ア) 情態概念の語には「的」が付きにくい。

「苦痛」「中古」「独身」「有徳」「永遠」などの情態概念の名詞には「的」が付かない。これは形容動詞に「的」が付かない理由と同じ

く、「的」が情態概念を付与する接尾辞であるから情態概念の語には付かないということである。ただ、「健康」「平和」「自然」「神秘」など品詞が名詞と形容動詞に跨っている語は情態概念と共に実体概念も認められるから、「的」が付く。

(イ) 下位概念の語には付かない傾向がある。

(ウ) 「地震」「火山」「植物」など人間と直接的な関係のない自然現象と自然物には「的」が付きにくい。

(エ) 「死亡」「確認」「失敗」など一回的な意味の語には「的」が付きにくい。

「的」形の語の中、「端的」「全的」「大々の」「巨視的」「微視的」「先験的」「可及的」などは「的」を取り除くと語として成り立たないものである。また、「的」が名詞に接続するといえるが、「致命的」「具体的」「封建的」「楽天的」「合理的」「多角的」「全人的」「民主的」「過度的」「客観的」「自発的」「排他的」「積極的」などの語基の名詞は単独に用いられる場合はなく、他の語と結合して用いられる。

形態的にみると、「的」と結合する漢語には、一字漢語・二字漢語・三字漢語・四字漢語など多様である。

- (1) 女王の**性的**魅力をうんぬんしたからといって、女王を冒瀆したことになるまい。
- (2) **静的**状態での10対6は、運動を加味すると100対36になる。
- (3) 『平家物語』には、平家一門の興隆から没落滅亡の道をたどる**劇的な**運命が書かれている。
- (4) その事件で彼の名誉はいたく傷つき、**公的な**活動から身を引

かざるをえなくなった。

- (5) 労働者詩人の彼は、家族の生活と自己の**詩的**関心を座標軸として創作を行ってきた。
- (6) この**幾何学的**に並んだ星たちは、古代から多くの人々の心をとらえてきた。
- (7) クスノキの舟やコウヤマキの棺が発掘され、神話の記述が**考古学的**に裏付けられた。
- (8) **小市民的**と言われるが、自分の生活を守り、他人の生活を尊重する生き方の大切さを理解できますか。
- (9) わたしたちは、**意識的・無意識的**に音声を変化させて、言葉の意味を表現し分けています。
- (10) 一度飲んだら、この薬の効果は**半永久的**に続くと言われている。
- (11) 役所や公企業は、住民に対するサービスも**官僚主義的**だと評判があまりよくない。
- (12) 西欧の精神文化に君臨し、西欧人の思考方法に決定的な役割を果たしてきたキリスト教は、人間に自然の支配者としての地位を与え、**人間中心的な**自然観を確立させたといわれている
- (13) ある量が、一定期間に、一定量だけ増加している場合、「算術級数的に成長している」といいますが、ある量が、一定期間に、その総量に対し、一定の割合で増加する場合、「**幾何級数的**成長を示す」といいます。

(1)～(13)の中で、一字漢語は「的」が付いた形態でより安定感が

感じられる。それゆえ、一字漢語においては「的」が付いた形態を一語とみる認識が強まる。

「的」と結合する漢語の大多数は2字漢語であり、「的」と結合する3字漢語と4字漢語はほとんどが合成語であるから純粋な名詞より派生語の形態が多い。

3.2. 和語・カタカナ語・混種語 + 「的」

「的」は漢語の名詞に付けるのが一般的であるが、しだいに漢語のみならず、和語とカタカナ語と混種語にも接続する語が現れるようになった。例を見てみる。

- (14) 社会の高度な情報化現象というのは、すぐれて**今日的**な問題である。
- (15) ノンフィクションは、事実を述べているほかに、**物語的**な要素も加わっておもしろい。
- (16) 彼こそが日本の映画界の**草分け的**存在であり、映画の今日を築いたのです。
- (17) それぞれの環境の中で、何を感じ何を考えどのように行動するか、それが、長子的性格・**未っ子的**性格をつくりあげていくのである。
- (18) 最初に**受身的な**対応ということですが、ここで刑法175条のいわゆるわいせつ文書の取り締まりを例にあげています。

(14)～(18)は、「今日」「物語」「草分け」「末っ子」「受身」などの和語の名詞に「的」が付いたものである。和語に「的」が付いた形態の語は、改まった表現より「君的にはどうなの?」「うちのにはつらいね。」など、日常的な生活の語としてよく用いられている傾向がある。上例の他に次のようなものもある。

- (19) 山本**君的**にはいけそうなの?
- (20) 課長**的**には許可できないでしょう。
- (21) わたし**的**に言えば…
- (22) NHK**的**にはどうだろうか。
- (23) 気持ち**的**にはOKなんだけど…
- (24) 長さ**的**にはちょうどだけれど幅が足りない。
- (25) ページ**的**に入るか?

(19)～(25)は、「的」がどこまで用いられているかを示すよい用例であるといえよう。(19)～(22)の「山本君的」「課長的」「わたしの」「NHK的」は、意見を出すとか立場を表明することであり、(23)～(25)の「気持ち的」「長さの」「ページの」は、「気持ち」「長さ」「ページ」上には問題がないといっても、何か足りなくて満足できないという意味であるといえよう。(19)～(25)のような「和語+的」は、内容をぼかしたり、曖昧にしたりする目的が含まれているといえよう。

一方、カタカナ語が増えるにつれて「カタカナ語+的」形もよく見られる。

- (26) 末っ子のケイスケは、家族じゅうの**アイドル的な**存在です。
- (27) あの太った男がこの街の**ボス的な**存在らしい。
- (28) これを機に彼は**コペルニクスの**転回をとげて、平和主義者になったのである。
- (29) 直感とは、肉眼をとおして心眼で見るというきわめて**ゲーテ的な**概念である。
- (30) 地域住民への**ボランティア的な**活動の試みをする。
- (31) 地方でこそ**パイオニア的な**文化にお金をつぎこんで、自分たちの地域を差別化していかないと、地域からの発信はできないんですけどね。
- (32) 僕もソーシャルネットワークサービスを使っていましたが、**サービスの**に不満な点がいくつもあり改善したいと感じていました。
- (33) 理論書を読んでも今ひとつ分からなかった**ジャズの**フレーズを、＜アルペジオ＞と＜コードワーク＞にポイントを絞り、映像で分かりやすく解説します。
- (34) **マスコミ的**世論とネット世論、そういったものがどんな関係にあるのか、或いはネット世論の可能性はどのようなものがあるのかといったことを考えていきたいと思います。

日本語において、語彙の増加は様々な形態の混種語を作り出した。混種語の形態には、「漢語+カタカナ語」「カタカナ語+漢語」「漢語+和語」「和語+漢語」「カタカナ語+和語」「和語+カタカナ語」などがある。この混種語にも、「的」が付いた例が見られる。

- (35) 特に、疑惑のコスモス株を秘書または家族名義を含めて9人の閣僚級政治家が密室の**財テク的**収受をしていた政府自民党幹部、中でも中曽根前内閣中枢に強い疑惑が集中した。
- (36) また通常、窒素の硝化にあたっては空気消費量の大幅増加が必要となりますが、**省エネ的**な本システムならその増加量は、小さい量で済みます。
- (37) この作品はもちろんトリックはしっかりしているのだけれど、どちらかというとそれ以外の**人間ドラマ的**な部分が優れているなと思いました。
- (38) その意味では、一二%というのは、あのころは**ショック療法的**な部分もかなりあったとは思いますが、私、三年間という流れで見ただけにおいては正しかったと思っています。
- (39) 役員の選任では、当選期数を基準とした**順送りの**人事慣行を廃止し、党への貢献度を重視する制度に改正。県議会の議長、副議長人事についても同様の基準を適用する。
- (40) 西の方にも**アイヌ語的**な地名の痕跡が残っているのかも知れない。
- (41) 徹底的に攻めるというタカ派的な闘い方より、自分の身を危険にさらさない**ハト派的**な戦略のほうが自分の適応度増大にとって有利であるからであることを明快に示した。
- (42) メインテーマも、もう、「太陽にほえろ」に代わって**刑事ドラマ的**雰囲気演出するBGMの定番です。

<表2>は、和語、カタカナ語、混種語に「的」が付いた語例であ

る。

〈表2〉 「的」と結合する和語とカタカナ語と混種語

和語		カタカナ語	混種語
今日的	友達の	カリスマ的	財テク的
役所的	箱底的	ヨーロッパ的	ハト派的
灰色的	物語的	システムの	順送りの
謠語的	大和的	スローガンの	省エネ的
受身的	浮氣的	ムード的	反動タービンの
年寄りの	気持ち的	デザインの	人間ドラマ的
草分け的	都会主義的	ロマンの	ショック療法的
末っ子の	平仮名の	サービスの	刑事ドラマ的
施し物的	地すべりの	プリンス的	コペンハーゲン学派的
つなぎ的	張りぼて的	ジャズの	ブレイディ法的
打消しの	夏目漱石の	ボスの	ニंकカラー付き的
江戸っ子の		アイドル的	超ペーマロイ的
思い遣りの		コペルニクスの	アイヌ語的
場当たりの		マスコミ的	

4. 「的」の意味

4.1. 「的」の意味の多義性

「的」の接続は、「名詞＋的」という形で名詞を形容動詞に変え、語あるいは句の意味も変える。例えば、「事務」「詩」などの名詞に

、「的」が付いて「事務的」「詩的」になった際、二つの語に現れる意味の違いはどうであるのかについて考察してみる。

「事務・事務的」「詩・詩的」の意味は、広辞苑(第五版)では次のように定義されている。

事務:事業経営などに必要な各種の仕事。主として机に向かって書類などを処理するような仕事をいう。

事務的:事務を処理するに当って、感情その他の要素をまじえず、事務を片づけていくように取り運ぶさま。

詩:中国韻文の一体、文学の一部分

詩的:詩の趣があるさま。詩のように美しいさま「詩的な風景」

辞書の定義の通り、「事務」は、ただ事業、経営の仕事のことであるが、「事務的」は仕事から連想されるかたい姿、雰囲気などをあらわす。「事務的」は「事務」からの派生語であるが、意味においては違いが現れる。「詩・詩的」も「事務・事務的」と同じように、「詩」は文の一種類であるが、「詩的」は「詩」とは直接的な関係はなく、詩のイメージ、雰囲気などを表わしていて、本来の名詞とは意味上の違いがあるといえよう。

このように、「的」の接続によって、語あるいは句の意味が変わったり新たな意味が付与されたりする。それでは、語の変化をもたらす「的」は、どのような意味を含んでいるのであろうか。

「的」の意味を辞書で調べると次のとおりである。

A 『言海』(1889)漢語ノ末ニツク語。之ノ意ヲナス。

- B 『大日本国語辞典』(1915)①名詞に添へて、のの意を表す語。
②名詞に添へて其の性質を帯びたる意を表はす語。即ち、むき・ふうの意。「商売的」
- C 『言泉』(1921)①漢語に添へて「なる」「の」の義に用ふる語。民主的政治。美的生活②云々の如き性質を帯びたる意。「打算的な人」「試験的に行ふ」
- D 『大言海』(1932)①…ニ就キテノ。上。「教育的設備」②…ノ振ナル。風。「独逸的教育」③…ノ如キ。様。然。「学者的態度」「都会的風習」
- E 『日本国語大辞典』(1972)①そのような性質を有する、それらしいの意を表わす。貴族的、悲劇的②それに関する、それについての、その方面にかかるなどの意を表わす。「美的・私的、科学的、政治的、現実的
- F 『学研国語大辞典』(1978)①「…に関する」「…にかかわる」「…についての」などの意を表す。「教育的立場」「哲学的な問題」「現実的に考える」「科学的に説明する」②「…のような性質を有する」「…らしい」「…に似る」などの意を表す。「動物的な態度」「悲劇的な最後」「貴族的な顔」③「…の情態にある」の意を表す。「普遍的な性質」「合法的な活動」
- G 『日本語教育事典』(1982)名詞および名詞に準ずる語(主として抽象的な意味の漢語)のあとに付いて、形容動詞の語幹をつくる。①「～に関する・～についての・～上の」の意、「本質的・哲学的・事務的」②「～のような性質を有する、～らしい、～に似た」の意、「詩的・合目的的・流動的・貴族的・家

庭的・浪漫的・ローマン的・アポロ的・コペルニクスの、ハムレット的、大陸的、熱帶的、鵠的」③「～の状態にある」の意を表す。「合法的・必然的・大大的」④その他造語成分に付く場合。「端的」

H 『広辞苑第五版』(1998)①まと、めあて「射的、目的、的中」

②あきらかなこと。間違いのないこと。「的然・的確」③(中国語の「的」(助詞「の」にあたる)をそのまま音読した語)名詞に添えて、その性質を帯びる、その状態をなす意を表す。

「私的・一般的」④人名や人を表す語などに付いて、親しみや軽蔑の意を添える。「権的・官的」

I 『明鏡』(2002)1接尾(多く抽象的な意味を表す漢語に付いて)

①～に関する、～の傾向がある、～の状態の、などの意の形容動詞語幹を作る。「科学的・機械的・劇的・人工的・比較的」

②人を表す語に付いて、さげすみや親しみを表す。「取的」「泥的」

上の辞書の内容の中、接尾辞として用いられる内容を整理したのが〈表3〉である。

〈表3〉 「的」の辞書的意味

「的」の意味	A	B	C	D	E	F	G	H	I
の	○	○	○	○					
むき・ふう		○		○					
なる			○						
上				○					
如き、～ような、～らしい、 ～に似る			○	○		○	○		
～の性質を帯びる、～の状態を なす意を表す。				○	○	○	○	○	○
～に関する、～についての					○	○	○		○

A 『言海』(1889)

B 『大日本国語辞典』(1915)

C 『言泉』(1921)

D 『大言海』(1932)

E 『日本国語大辞典』(1972)

F 『学研国語大辞典』(1978)

G 『日本語教育事典』(1982)

H 『広辞苑第五版』(1998)

I 『明鏡』(2002)

辞書の「的」の説明をみると、『言海』(1889)では「～の(之)」の意味だけであるが、『言泉』(1921)では「なる」「の」の意味を、『大言海』(1932)では「的」の意味がさらに分化して、「ニ就キテノ・上」「ノ振ナル・風」「ノ如キ・様・然」となっている。『広辞苑』(1998)『明鏡』(2002)では、「的」の意味と機能を接尾辞と造語に分けており、接尾辞「的」の意味を更に「～に関する・～の(ような)傾向がある・～の状態の」の三つに分けている。このように、「的」の意味の範囲が拡大するにつれて、「的」が用いられる頻度も多くなっていった。

遠藤織枝(1984)は、諸辞書の記述を総合して「的」の意味を四つに

分けて整理した。

- ① 「…に関する」 (例) 芸術的 才能 (m: 修飾語 N: 名詞)
- ② 「…のような」 (例) 病的な 神経
m N
- ③ 「…の状態にある」 (例) 圧倒的な 勝利
m N
- ④ 「…としての、…である」 (例) 職業的 軍人
m N

辞書をまとめた三つの意味分類が、それぞれ「的」の派生語が修飾する語句のありさま・状態を示すものであるのに対し、「的」の派生語とそれが修飾する語句とが同格のように重なりあうものを第4の意味と考えたいのである。(pp. 131)

遠藤は、「的」に対する既存の①②③の意味に、同格を表す④の意味を加えた。

水野義道(1987)は「的」の意味について次のように述べている。

「的」は、主に体言類³⁾・用言類⁴⁾・結合類⁵⁾の語基と結合し、結合形を相言類⁶⁾とする(ex. 機械的・圧倒的・本格的)。添加する意味は、基本的には「～の(ような)性質がある状態」「～する

3) 格助詞「が」を伴って文の要素となる。(近代、科学)

4) 「する」を伴ってサ変動詞となる。(計画、注意)

5) 体言類、相言類、用言類、副言類の四つの類のどれにもあてはまらず、必ず接辞等と結合して用いられる。(積極、合理)

6) 「な」を伴って連体修飾成分になる。あるいは体言類・用言類・副言類に属せず「の」を伴って連体修飾成分になる。(優秀、最後)

（ような）性質がある状態」であるが、体言類の語基との結合においては、このほかに「～がある状態」「～が良い状態」といった意味を添加する場合とがある（ex. 技術的・構造的）。「的」が相言類の語基と結合することはあまり多くないが、その場合には語基の意味を抽象化する機能を持つと考えられる。

被修飾語 修飾語	胃腸	体	人	顔	歌声	雰囲気
健康な	○	○	○	?	?	×
健康的な	×	?	○	○	○	○

(P. 66)

水野(1987)は、「的」は漢語の名詞または、サ変動詞語基に付いて、形容動詞化するといった。また、稀であるが、「的」が形容動詞の語基に付いて、意味の抽象化に用いられる場合もあるといって、「健康な」と「健康的な」を表で比較した。表で、「健康な」に後接した語をみると「胃腸・体・人」などであり、「健康的な」に後接した語は「人・顔・歌声・雰囲気」である。この二つを比較してみると、「健康的な」に後接した語が抽象的な性格を含んでいるといえよう。「的」の意味を次の用例で検討してみる。

- (43) この絵は、有名なダービンチの作品で、**芸術的な**価値のきわめて高いものである。
- (44) それほど**浪漫的な**人間じゃない。
- (45) その意味では、クローン技術の人間への応用が可能になったということは、高度に**哲学的な**問題である。
- (46) **社会的な**作品が代表作として知られるマフフーズである

が、初期に発表した古代エジプトを舞台とした作品も彼の思想を理解する上で重要である。

(47) しかしすべての子どもがAIBOをおもちゃというよりは**動物的な態度**で接していた。

(48) 東大人類学の先生が、将来の日本人の顔形はどうかとシミュレーションしたところ、あごのえらの部分がなくて、おとがいの部分が伸び、細長い面長の顔貌になっているといいます。それは**貴族的な顔**なんです。

(43)の「芸術的な価値」は、□□芸術品としての価値□□□□芸術の側面での価値□□の意味を表しており、(44)の「浪漫的な人間」は、□□浪漫の性格を持っている人間□□の意味を表している。

(45)の「哲学的な問題」は、□□哲学にかかわる問題□□を、(46)の「社会的な作品」は、□□社会の問題にかかわる作品□□の意味を表していて、ほとんど同じ意味であると言えよう。

(47)の「動物的な態度」は、□□動物のような性質と特性を有する態度□□を、(48)の「貴族的な顔」は、□□貴族の特性をおびる顔□□を表していて、この二つも同じ使い方であると考えられる。

しかし、次の「日本的な建造物」「韓国的な民主主義」「民族的性格や特徴」における「的」の意味はどのグループに入るのでしょうか。

(49) 現在のように、文化交流が急速に進行するグローバリゼーションの時代において、**日本的な建造物**、構造、広場や都市環境などを形成するものは何かを説明することは、ます

ます困難になってきました。

(50) 維新政権が政治的に標榜したのは**韓国的な**民主主義であった。

(51) どの国にかぎらず、自分たちの**民族的**性格や特徴は案外知らないものだ。

(49)の「日本的な建造物」は、□□日本の伝統の特有な様式を踏まえた建造物□□のことであって、「日本的な」は日本国内にある近代西洋的ビルディングは含まない□□日本固有の□□、あるいは、□□日本特有の□□の意味を表しており、(50)の「韓国的な民主主義」は□□韓国の実情に合う民主主義□□のことで、「韓国的」も□□韓国固有の□□□□韓国特有の□□の意味を表している。(51)での「民族的性格や特徴」も□□その民族だけの特有な性格や特徴□□を表しているから、(49)と(50)と同じ意味であると言える。

以上、辞書類と先学の「的」についての見解のうち、形容動詞化する接尾辞だけの意味を総合してみると、「的」の意味は<表4>のように分類される。

〈表4〉 「的」の意味と語例

「的」の意味	語例
～の、～としての、～である	職業的な軍人・政治家的な考え
～にかなう、～に合った	道徳的態度・論理的な考え
～に関する、～についての、～上の	哲学的な問題・政治的な問題
～のような、～らしい、～に似た	家庭的な雰囲気・動物的な態度
～の状態にある、～している	合法的な活動・決定的な証拠
～の性質を帯びる、～の状態をなす	私的な集まり・一般的な行動
～おける、～の方面での	教育的な立場・社会的活躍
～特有の、～固有の	日本的な建造物・韓国的な美人

4.2. 「的」の評価的な意味

「的」の意味と用法については、すでに確認したが、「的」は明確な概念を持たない非実質的な意味概念の語で、「的」が表わす多様な意味によって、文の中での評価的な意味も多様である。

例を見てみる。

- (52a) 高速道路は、道路が**立体的**に交わっているので、車の流れがスムーズだ。
- (52b) アメリカ合衆国とアメリカ人の実像を**立体的**にとられようと試みている。
- (53a) **家庭的**な幸せなどというものは、彼女には縁の遠いことのように思われた。
- (53b) 今度の会場は入れ物が小さいから、かえって**家庭的**な雰囲気のコンサートになるだろう。

(54a) 今日では、**国際的**交流が盛んになっているので、言葉を知らなくても旅行できる。

(54b) 父は、息子に、**国際的**な視野をもつ人間に成長してほしいと願っていた。

(55a) 宇宙に生物がいるのではないかという考えには、**科学的**根拠があるとされている。

(55b) わたしたちも、単なる当て推量ではなく、**科学的**なものの考え方を身につけよう。

(52)～(55)のa. bは同じ「的」形の語であるが、含まれている意味は同じでない。

(52a)の「立体的」という語は、□□空間的□□という概念を表しているが、(52b)の「立体的」は空間的な概念の他、□□物事をあらゆる角度から総合的にとらえる□□という意味を表していて、本来の「立体的」という意味にプラスの評価義が加わる。

(53a・b) (54a・b) (55a・b)も(52a・b)に準じて解される。

(53a) (54a) (55a)の「家庭的」「国際的」「科学的」は、本来の漢語の名詞が持っている意味と変わらない。しかし、(53b)での「家庭的な雰囲気」は□□和やかで親しい雰囲気が感じられる□□を表しており、(54b)の「国際的な視野」は□□思考や判断の幅が広い□□の意味であり、(55b)の「科学的なものの考え方」は□□理知に当たる□□□□合理的□□の意味で、本来の名詞の意味にプラス的な評価が加わったものである。

「的」の接続にプラスの評価義が加わる語がある一方、マイナスの評価を受けるものもある。

- (56a) **機械的**なエネルギーを電気エネルギーに変えて出力する機械が発電機です。
- (56b) 外国語の単語を**機械的**に覚えるとしたら、こんなつまらないことはない。
- (57a) 室町幕府は十六世紀にはほとんど無力となったが、**形式的**には一五七三年まで続いた。
- (57b) 委員会は、委員長のいつもと変わりばえのしない**形式的**な報告で始まりました。
- (58a) それとは反対で、ここに僕の**感情的**生活に一つの変化が生じて来て、それが日ましにはっきりしてきた。
- (58b) 話し合いは**感情的**になるばかりで、どこかで頭を冷やさない結論は出そうになかった。
- (59a) エイやサメなどの軟骨魚は、魚の中でも**原始的**な種類だといわれる。
- (59b) 「のろし」は、伝達手段としてはかなり**原始的**だ。

(56)～(59)のa. bも同じ「的」形の語であるが、含まれている意味は異なる。

(56a)の「**機械的**」は□□機械の特性を持っている□□の意味を表わしていて、「機械」という語基の漢語の意味と変わらない。しかし、(56b)の「**機械的**」は□□個性的でない□□□□型どおり□□という意味で、本来の「機械」と「**機械的**」とは違い、意味の転換が行われている。評価上でもマイナスのイメージを表している。

(57a) (58a) (59a)の「**形式的**」「**感情的**」「**原始的**」は、本来の漢語の名詞と意味が変わらないが、(57b)の「**形式的**」は□□表面的な形

ばかりで内容が伴わない□□の意味を、(58b)の「感情的」は□□理性を失う□□□□興奮する□□の意味を、(59b)の「原始的」は□□洗練されていない□□□□幼稚な□□の意味を表していて、マイナスの評価へと変わる。

このように、「的」という接尾辞の後接は、単純に「的」の持つ意味を加えるのではなく、ある場合にはプラス、またある場合にはマイナスの評価義を加えるのである。

5. 「的」の用法

「的」形の語は形容動詞として用いるから、活用においても形容動詞の活用をする。

- (60) 彼女の軽々した身のこなしがとてもさわやかで**印象的**だった。
- (61) この宗教は戒律が厳しく、**禁欲主義的**である。
- (62) この絵は、有名なダービンチの作品で、**芸術的な**価値のきわめて高いものである。
- (63) 地位と名声を得た彼は、江戸屈指の流行医になり、**経済的**にも豊かになった。
- (64) ウィルソンにはたしかに**利己的**で**自己中心的**なところがあった。
- (65) **保守的**で、格式や家柄にこだわる傾向が強いのは、城下町であるこの土地の気風と言える。
- (66) 先生の話は、内容が**具体的**でたいへんわかりやすかった。

(60)～(66)の「印象的だった」「禁欲主義的である」「芸術的な価値」「経済的にも豊かになった」「利己的で自己中心的なところ」「保守的で」「具体的で」などは連体形・連用形・中止形で、一般の形容動詞と用法が同じである。しかし、(67)～(72)は一般の形容動詞では用いられない用法の例である。

(67) 島崎藤村は明治三十九年、『破戒』を刊行し、以後自然主義作家として文壇の**中心的**存在となった。

(68) 本件に関して、市としては**可及的**速やかに対処するつもりです。

(69) 父は田舎者ですが、**比較的都会的な嗜好**を持った人間でした。

(70) 実は、これまでの西側諸国への中東地域からの原油供給は**政治的・軍事的統制**によるよりも、むしろ、需要、供給並びに価格という市場要素に基づいて機能的に行われていたという観測もあります。

(71) 日本に対し、終始、**好意的妥協的**な態度を見せていたのは英国であり、比較的冷淡で、非妥協的だったのはアメリカである。

(72) **宿命的**ともいえる二人の出会いは、目に見えない運命の糸で結ばれていたとしか言いようがない。

(67)の「中心的」は、一般の形容動詞とは違って、連体形において「的」の形態を取っている。(68)(69)の「可及的速やかに」「比較的都会的な」の場合は「可及的」「比較的」が用言に前接しているが、

連用修飾形を取らなく、「可及的」「比較的」が直接「速やか」「都会的な」に付いている。(70)の「政治的・軍事的統制」と(71)の「好意的妥協的な態度」は、「軍事的統制」「妥協的な態度」の部分においては、「的」が体言に前接する場合、「～な」が付く形も付かない形も成立するから、それでいいとしても、「的」形の語が重なってくる場合なら「的+で+的」形が期待される。しかし、(70)の場合は「政治的・軍事的」で、(71)は「好意的妥協的」で、ただ「的+的」の形態を取っている。

(72)の「宿命的と」では、助詞「と」は形容動詞の終止形に接続するから、一般の形容動詞なら、「静かだと～」になるべきである。しかし、(72)では、語幹に「と」が付いたわけである。

(66)～(72)の例で見た通り、「的」形の形容動詞は一般の形容動詞に比べて用法の許容範囲が広く、また体系的ではないということがわかる。

「的」の連用修飾形においても、注意すべきものがいくつかある。例えば、形容動詞の連用形「一般的に」は、同じ意味の副詞に「一般に」がある。

(73a) **一般的に**肉食の人のほうが体臭が強い。

(73b) **一般に**ヒトは他の動物より寿命が長い。

(73a)の「一般的に」は形容動詞の連用形であり、(73b)の「一般に」は副詞で、(73a)と(73b)を比較してみると、「一般的に…強い」と、「一般に…長い」は、形態上、同じである。それに「一般的に」も「一般に」も「一般」という語を語源としているから、意味的にも違いがないといえよう。

次は「相対的に」と、それと対応関係にある「絶対に」について検討する。

(74a) 給料が上がってもそれ以上に物価が上昇しているので、
相対的に見ると生活は苦しくなっている。

(74b) 彼は、人がいいうえに気が弱いので、人に頼まれると、
絶対にいやとは言えない。

(74a)の「相対的に」は、形容動詞「相対的」の連用形で、後の「見る」を修飾している。この「相対的」の対応概念の語に「絶対的」がある。「絶対的」も形容動詞であるから連用修飾の場合「絶対的に」が期待されるが、実際に用いられるの「絶対的に」ではなく、(74b)のように「絶対に」である。

「的」形の語には、形容動詞ではなく、副詞として存在するものもある。

(75) ピッチャーの投げた球がボールかストライクかの判別は**比較的**簡単です。

(76) 父は田舎者ですが、**比較的**都会的な嗜好を持った人間でした。

(77) 息子の手紙には、上京後の**比較的**長い時間のことが手短かに書かれています。

(78) 嫁いだ先が**比較的**大きな商店だったので、家事や店員の世話に煩いが多かった。

(79) 海辺に住んでおりますので、**比較的**鮮度の高いお魚が食べられます。

(80) この季節は、**比較的**天気が続くことが多い。

(75)～(80)で、「比較的」は後接する語の語性とは関係なく、「比較的」の形を取っている。もし「比較的」が形容動詞なら、体言が後接する場合は「的な」の形態を、用言が後続する場合は「的に」形を取らなければならない。しかし「比較的」は、「比較的な」形も「比較的に」形も見られない。(75)～(80)の「比較的」は形容動詞より副詞的な用法に用いられるといえよう。このことから、「的」形の語野中には形容動詞だけではなく、副詞として存在するものもあることがわかる。

6. 「的」形の語の連体修飾形

6.1 「的な」と「的」

「的」形の形容動詞の用法は、一般の形容動詞と違うものが目立つ。その一つとして、連体修飾の場合、一般の形容動詞なら「～な」の形態を取るのであるが、「的」形の形容動詞は、「的な」と「的」の二つの形態が取れる。

(81) 彼は、力士としての**年齢的な**限界を感じ、今場所限りで引退する決心だ。

(82) 彼の**威圧的な**態度は、次第に周囲の反感を買うことになっ

た。

- (83) 今回の選挙でも、与党が**圧倒的な**多数の議席を占めた。
- (84) 冷静でいかにも**理知的な**顔つきの若者でした。
- (85) 部長の**独断的な**やり方は、部員の反発を買った。
- (86) 冷静でいかにも**理知的な**顔つきの若者でした。
- (87) 古い都にも、今は**近代的な**ビルが建ち並んでいる。
- (88) 戦後の日本の経済的な復興は、**驚異的な**スピードだったと言えるでしょう。
- (89) 一九八〇年十二月九日、ジョンレノンは、**熱狂的な**ファンである一青年の凶弾に倒れた。
- (90) どの国にかぎらず、自分たちの**民族的**性格や特徴は案外知らないものだ。
- (91) 現代の科学は、多くの**知的**探検家たちの努力の上に築かれてきた。
- (92) 人類が現在の**文化的**生活を維持していくにはどうしたらよいか。
- (93) 生徒間のいじめの原因を追窮すると、そこに生徒の**心理的**抑圧の存在するのが分かる。

(81)～(93)は「的」の連体形を表しているが、(81)～(89)の「的な」形であり、(90)～(93)の「的」形である。「的」の連体修飾形に用いられる「的な」と「的」にはどんな違いがあるのであろうか。(81)～(89)の「的な」に後接した語は、漢語と和語とカタカナ語で、後接する語に対する制限がないと見られる。しかし、(90)～(93)の「的」に後接した語は漢語だけであり、他の語種は見られない。「的」形の形容動詞の連体形が「的な」であるにも関わらず、「的」が用いら

れることから考えられるのは、漢語の有する特殊性から得られる効果である。つまり、<「的」形の漢語＋漢語>という漢語が二種に重なっている語に現われる重さと「～な」の省略で現われる簡潔さである。

「的」の連体修飾形に、「的な」と「的」が用いられた例を見てみる。

<表5> 「的」形の連体修飾形「的な」と「的」

「的な」形		「的」形	
活動的な少年	驚異的な強さ	代表的歌人	論理的文章
具体的な方策	感傷的な気持ち	科学的根拠	自伝的小説
代表的な作品	儀礼的なあいさつ	圧倒的勝利	圧倒的多数
家庭的な女性	全国民的なお祭り騒ぎ	民族的性格	発展的解消
芸術的な価値	享樂主義的な生き方	指導的立場	希望の観測
組織的な観測	日常的な出来事	学者の良心	偽善的行為
精神的な負担	熱狂的なファン	代表的作品	高圧の姿勢
全面的な戦争	精神的な疲れ	民族的性格	心理的抑圧
指導的な立場	一面的な見方	基本的人権	軍事的統制
敍情的な作品	個性的な人	中心的存在	天才的芸術家
近代的な思想	家庭的な幸せ	社会的存在	致命的欠陥
確信的な言い方	消極的な考え方	自伝的要素	美的感覚
官能的な踊り	大々的なキャンペーン	歴史的背景	知的好奇心
政略的な縁組み	技巧的なピッチング	文化的遺産	性的魅力
個人的な感情	決定的なゴール	末期の症状	法的措置
外面的な美しさ	アイドル的な存在	中心的存在	コペルニクスの転回
反抗的な息子	ボス的な存在	平和的手段	アマチュア的性格

<表5>での「的な」形と「的」形の語の語基は、両者とも漢語もあるし、カタカナ語もあるが、後接語の場合は、「的な」には漢語、和

語、混種語、カタカナ語のすべての種類の語が接続することがわかる。しかし「的」の後接語は、漢語だけであり、他の種の語が接続された例は見られない。

意味的な側面でも、「的」の後接語が漢字であるというのは、語の構成において、漢語が重なるわけであり、これは、「的な」形より語感上重くて固い感じがする。

6.2 「的な」と「的の」

「的」の連体修飾形に「的な」と「的」形が共に用いられることはすでに確認したが、「的の」の形態も見られる。例を見てみる。

- (94) むろん、**科学的**の見地から見て大した掘出し物だった。
- (95) これは嬢さまが元気のないときにおやりになる、いわば**形式的**のお散歩で——旦那さまのおかげんが常より少し悪ければ、必ず嬢さまも元気がなくなります。
- (96) 寧ろ繰返し繰返し、考えては、**夢幻的**の興味を貪って居る事が多い。
- (97) **日本人形的**の型にはめこまれた女でないことは、ぴんぴんひびくような言葉のやり取りを聞いているとよく分った。
- (98) 此人は**近代的**の人にて伶俐なる人なり。又虚言を為す人にも非ず。
- (99) こういう配置は、**国際的**の地位から割りだされたものか、あるいは、軍隊の実力を見くびられたために、こういうことになったのか、わたしにはわからないが、とにかく、日

本軍は最後方の、予備軍にまわされたのだ。

(100) わたしが人間は完全かつ本源的に二重性格のものであることを悟ったのは、人間の**道徳的**の面から、とくにわたし個人についての経験を通じてであった。

(101) そのような**私的**のものなら、禁止はしない。

(102) 俗書が段々**科学的**の書に接近して来る風潮を論ずる。

現代語的な感覚で「的」形の連体修飾形として期待されるのは「**的**な」あるいは「**的**」である。しかし、(94)～(102)の「科学的」「形式的」「夢想的」「日本人形的」「近代的」「国際的」「道徳的」「私的」「科学的」の連体修飾形は「**的**」と「**的**な」形ではなく、「**～の**」の形態を取っている。

このように、(94)～(102)は「**的**」形の形容動詞の連体修飾形に「**的**の」の形態が現れているのであるが、それでは、はたして形容動詞の連体修飾形に「**の**」が用いられる場合があるのだろうか。形容動詞の連体修飾形として用いられる「**の**」の例を調べてみる。

此島正年(1953)は、形容動詞の同一語幹に現れる「**～に**」と「**～の**」・「**～な**」を(103)～(106)の例で説明している。

(103a) **いろいろ**に返り事す。

(103b) 秋は**いろいろ**の花にぞありける。

(103c) **いろいろ**なる姿

(104a) **さまざま**に取りにつかはしたりければ

(104b) **さまざま**の事をせさせ給ふしるしにや…

(104c) **さまざま**なるものども

(105a) とりどりにに物の音ども調べ合せて

(105b) とりどりののざえども習ひ給ふ。

(105c) とりどりのなるわらはべの様態

(106a) 奥山の松のとぼそをまれにあけて

(106b) まれの細道

(106c) 年にまれなるひとも待ちけり

此島(1953)は、「いろいろ」「さまざま」「とりどり」「まれ」など同一語幹の連体形に「～の」と「～なる」の形態が表われることについて、次のように述べている。

本期に入って急に増加した漢語を、国語の語法の中へ取入れるに、「～なる」よりも「～の」の方が都合がよかったのではなかろうかと思う。外国語を国語に取入れるには、体言として入れるのが原則であり、それには連体法のばあい「～の」の形式の方が「体言プラス格助詞の」との連合があるために適当しているからである。

此島(1953)は、「～の」と「～なる」の併存現象は中世まで続いたが、漢語の数が多くなった鎌倉時代⁷⁾には「～なる」はあまり使われず、「～の」の形態が多く使われるようになったという。また、室町⁸⁾・江戸時代⁹⁾に入ってから、「～の」より「～な」のが多く用

7) 鎌倉時代:12世紀末源頼朝が鎌倉に幕府を開いてから、1333年(元弘3)北条高時の滅亡に至るまで約150年間の称

8) 室町時代:1336年足利尊氏が室町幕府を開いてから、15代将軍義昭が織田信長に京都を追放され幕府が滅亡した1573年までの時代。

9) 江戸時代:1603年徳川家康が征夷大將軍に任せられ江戸に幕府を開いてか

いらるようになったという。

此島(1953)によると形容動詞の連体形が「～なる」から「～の」に、そして「～な」へと変化してきたことがわかる。

一方、現代語において、形容動詞の連体修飾形に「～な」のみならず、「～の」を用いる語類もある。

(107a) **緊急な**用事ができましたので、途中ですがお先に失礼いたします。

(107b) 医務室には医師も詰めていますから、**緊急の**場合にはベルを押して知らせてください。

(108a) 踊り進めていきながら、ぼくはもう呆然として心地よく、この上もなくあけすけな**純粹な**たのしみを遺憾なく現わしたロッセの眼と腕にうっとりしていると、一人の婦人に近づいた。

(108b) 和語とは、漢語や外来語を除いた**純粹の**日本語のことです。

(109a) 戦後、日本国憲法ができるまで、女性は、男性と**対等な**立場を認められていなかった。

(109b) 雇う者と雇われる者の間は、**対等の**関係にあって、たがいに助すけ合うことが望ましい。

(110a) 不幸な人たちに惻隱の心を持つのは人として**当然な**ことです。

(110b) 武門の家に生まれた者として、武芸に秀でることは**当然の**ことであった。

ら1867年第15代将軍徳川慶喜の大政奉還に至るまでの時代。

(111a) しばらく家に閉じこもっていると、**特別な**用でもないかぎり、外出するのがおっくうになります。

(111b) 条例は、条例に**特別**の定があるものを除く外、公布の日から起算して十日を経過した日から、これを施行する。

(112a) 鉱山が閉鎖されてから、**わずかな**農家が残るだけの過疎の村となった。

(112b) このかわいらしい少女があと**わずかの**命かと思うと、いたわしくてならない。

(107)～(112)は、連体修飾形に「～な」と「～の」が共に用いられている。では、この場合の「～な」と「～の」も形容動詞の連体形と認められるのであろうか。まず、「緊急」「純粹」「対等」「当然」「特別」「わずか」などの語性を調べてみると「緊急」「純粹」「対等」は、名詞と形容動詞に跨っており、「当然」「特別」「わずか」は形容動詞と副詞の語性を帯びている。

(107)～(109)の「緊急な用事・緊急の場合」「純粹なたのしみ・純粹の日本語」「対等な立場・対等の関係」で、同一語幹の連体修飾形に用いられている「～な」と「～の」には、意味の違いが現れないし用法にも違いが現れない。

連体修飾形に「～な」と「～の」だけではなく、「～なる」「～の」「～な」の全てが用いられる語もある。

(113a) **絶大なる**ご支援をお願いいたします。

(113b) **絶大の**信用を得る。

(113c) 封建時代の領主は、臣下や領民に対して**絶大な**力をもつ

ていました。

「絶大」は名詞と形容動詞の語性を共に帯びているが、上の「絶大なる・絶大の・絶大な」は意味上の違いがない。従って、これらも形容動詞の連体修飾形として認めるべきであろう。

では、再び、「**的な**」と「**的の**」に戻って、「**的な**」と「**的の**」の傾向について調べてみる。

同一の文学作品に、「**的な**」と「**的の**」が共に用いられる例がある。

(114a) それは他へ行ったら通用しない、院代勝俣秀吉のごく
個人的な感傷であったかも知れない。(楡家の人々)

(114b) たいそう感激した手紙がき、それも一方ならず真剣で**個人的の**ことをさまざまに問い質す文面であったので、さすがに藍子は怕くなり、それからそのような手紙を書くことをやめた。(楡家の人々)

(115a) それは大それた、身分不相応の、羞恥を覚ゆべき、はっきりいって**誇大妄想的な**夢想には違いなかった。(楡家の人々)

(115b) 前のようにひょこひょこ歩きまわりませんが、精神的にはますます旺んで、少し**誇大妄想的の**ところがあるような気も致しますわ。(楡家の人々)

(116a) はじめ竜子は、松原の病院は**一時的な**仮のものと考えていた。(楡家の人々)

(116b) 言いようのない気分のわるい脱力感、それが見るまに全

身を浸し、**一時的**の精神力までをはかなく押しやり、もはや戦闘をつづけるのは不可能だということを彼にさとらせた。（楡家の 人々）

(117a) 今にきっと**世界的な**仕事をして、日本の為に気焰をあげてくれるだろう（友情）

(117b) 私達は出来るだけの力をもって、日本の文明を高め、思想を高め、**世界的**の仕事をどんどんしてゆくようにしなければ、日本人は世界的存在の価値を失います。（友情）

(118a) それにはKが父兄から勘当された結果**厭世的な**考を起して自殺したと書いてあるのです。（こころ）

(118b) その眼、その口、何処にも**厭世的**の影は射していなかった。（こころ）

(119a) 彼の心からは暗黒が、生来の**絶対的な**特性であるかのように、一すじの休むことのない憂鬱の放射となって、精神界と物質界とのあらゆる事物の上に注ぎかかるのであった。（黒猫）

(119b) 実際、僕は危険が厭なのではない、ただその**絶対的**の結果――恐怖、というものが厭なんだ。（黒猫）

(120a) 三のとりとめのない事がらを述べたてて、ほんの少しの**一時的な**ものであろうとも、慰めを求めることは、許してもらえらるだろう。（黒猫）

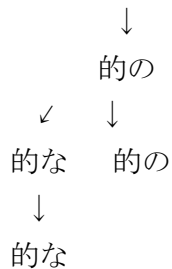
(120b) また、アッシャー一族の血統は非常に由緒あるものではあるが、いつの時代にも決して永続する分家を出したことがない、いいかえれば全一族は直系の子孫だけであ

り、ごく些細なごく**一時的**の変化はあっても今日まで常にそうであった、というまことに驚くべき事実をも知っていた。(黒猫)

「個人的な/の」「誇大妄想的な/の」「一時的な/の」「世界的な/の」「厭世的な/の」「絶対的な/の」などは連体修飾形に「～な」と「～の」が共に用いられている。

形容動詞の連体修飾形に「な」だけではなく「の」が用いられた例があるように、「**的**」形の語の連体修飾形にも「**的な**」と「**的の**」があるわけである。

桜井光昭(1964)は、「**的の**」と「**的な**」の展開過程を次のように示している。



上の図で、「**的**」の連体形は「**的の**」から次第に「**的な**」の形に変化したと言える。「**的の**」と「**的な**」は、意味にも、違いが現われな
い。形容動詞の連体形が「なる」「の」「な」の順に変化しているように「**的の**」が現れるのも語形成の過渡期的な現象ではないかと考えられる。

文学作品の「**的の**」と「**的な**」の数を比較してみると、〈表6〉のよ

うになる。

〈表6〉 文学作品に現れた「的の」と「的な」の数

	こころ	友情	野菊の墓	嵐が丘	楡家の人々
執筆(翻訳)年度	1919	1920	1951	1960	1977
的な	9	2	1	22	163
的の	8	2	3	1	9

『こころ』(1919)と『友情』(1920)では、「的な」と「的の」の使用頻度数が(9/8)と(2/2)であまり違いがない。『野菊の墓』(1951)では「的の」が数的には多いが、傾向性を把握するのには、「的な」と「的の」が使用頻度が少ない。『嵐が丘』(1960)と『楡家の人々』(1977)の「的な」と「的の」は(22/1)と(163/9)で、「的な」の使用頻度が急激に増加した。

〈表6〉で、山下巖(1961)の言う通り「的の」が以前には多く用いられたことは確認できる。また、「的の」が時間の流れによって「的な」形に固定したことがわかる。

同一作品で、「的の」と「的な」が共に用いられている語種を示したのが〈表7〉である。

〈表7〉 「的」 と 「的な」 が共に用いられた語例

文学作品	「的」 形の語	～の	～な
『嵐が丘』	形式的	1	×
	悪魔的	×	2
	絶対的な	×	1
『野菊の墓』	夢幻的	1	×
	卵的	1	×
	盲目的	1	×
	黒塗的	×	1
『楡家の人々』	一時的	4	1
	断定的	1	×
	個人的	1	4
	誇大妄想的	1	1
	定期的	1	×
『友情』	世界的	1	2
	一時的	1	×
『ころ』	厭世的	1	1
	物質的	1	×
	世間的	1	×
『黒猫』	一時的	1	3
	絶対的	1	1
	知的	1	×
	職業的	1	×
	科学的	1	×

6.3. 連体修飾の「的な」と「の」・「な」

名詞の連体形に、「～の」と「的な」形があるのは、すでに言及したが、ここでは、「～の」と「的な」の文章を通して、「～の」と「

的な」の意味について検討してみる。

(121a) 会社側が提示した金額に**妥協**の余地なしとして、組合はストライキに突入した。

(121b) かりにもクラスの代表が、何も反論せずにあんな**妥協的**な態度をとるなんて。

(121a)の「妥協の～」は対立している双方が折れ合って一致点を見出そうとするということを表しているが、(121b)の「妥協的な～」は、妥協する余地がある状態を表す。つまり、「妥協」という、事実を表す名詞概念に「～的」が付いて、状態性の形容動詞概念が付与されるのである。次の用例をみると、意味の違いがもっとはつきりするであろう。

(122a) 島村抱月によって**近代**の演劇は発展した。

(122b) 川端康成は、**近代的な**思想や感情を新鮮な感覚で表現し、ノーベル文学賞を得た。

(123a) どういう訳か、**女性**の和服の模様には、植物を図案化したものが圧倒的に多いようだ。

(123b) 京都は、周りを**女性的な**なだらかな山々に囲まれた静かな古都です。

(124a) **日本人**の礼儀や、日本語の「敬語」は、相手を敬う気持ちが表れたものです。

(124b) 周囲と同じことをやっていたいという考え方は、**日本人**的な発想だと言われる。

(122a)の「近代の～」は、歴史の時代区分において今に近い時代のこと、ある特定の時代という事実を表しているが、「近代的」は、近代の特徴を有している□□様子□□を表している。つまり、「近代の」は、□□近代という時代においての…□□という意味で、「近代的な」は□□近代時代の様子の中でありそうな…□□という意味であると言えよう。

(123a)の「女性」は、□□女□□という実体を表わしており、(123b)の「女性的」というのは、□□女性らしい□□□□女性にふさわしい□□といった女性の□□様子□□を表わしている。従って「女性の」は、□□女性の所有物としての…□□という意味で、「女性的な」は□□女性だけがもっている…□□、□□女性特有の…□□という意味である。

(124a)(124b)の「日本人」「日本的」も「女性」「女性的」に準じて解される。「日本人の」は、□□日本人の所有物としての…□□であり、「日本的な」は□□日本人の特性を表す…□□ということである。

「～の」の実体概念と「的な」の情態概念の例には下例の(125)～(131)のようなものもある。

(125a) 小説を読みながら、妹は、**悲劇**のヒロインになったつもりで感傷にひたっているらしい。

(125b) 『野菊の墓』は、明治の農村を舞台に、古い慣習の中で、**悲劇的な**結末をたどった少年少女の愛の物語です。

(126a) 長い髪をすばっと切って登校した彼女を、級友たちは**驚異**の目で迎えた。

(126b) 戦後の日本の経済的な復興は、**驚異的な**スピードだったと言えるでしょう。

- (127a) 凡ての**人為**のものの無常の中で、最も大きい未来を有しているものの一つは、矢張科学であろう。
- (127b) 都会の自然はおおむね**人為的な**ものであって、ありのままの自然ではない。
- (128a) イリオモテ島には**原始**の姿のままのイリオモテヤマネコがいる。
- (128b) この壁画には**原始的な**力がみなぎっている。
- (129a) この選挙も与党の大勝で、当県における**保守**の牙城は揺るぎそうもない。
- (129b) **保守的な**風土の中では、彼の革新的な考えは受け入れられなかった。
- (130a) この短歌から、わたしたちは若い女性に特有な**感覚**のさえを感じとることができる。
- (130b) 最近のテレビドラマが与える**感覚的な**刺激は、子供には強すぎると考える大人もいる。
- (131a) きみの遅刻には、途中でひきとめたぼくにも、**間接**の責任がある。
- (131b) 車の路上駐車は、子どもの飛び出し事故の**間接的な**原因にもなります。

連体修飾形において「～な」と「～の」・「～的な」の三つの形態で表現できる語もある。「健康」「平和」などの語は連体修飾形に「～な」「～の」「～的な」が全て用いられる。この場合、この三つの意味関係はどのようになっているのであろうか。例を挙げて検討してみる。

- (132) 食欲は、{○健康の/×健康な/×健康的な}指標ということ
ができる。
- (133) 風呂上がりに、頭から水をかぶることがわたしの{○健康
の/×健康な/×健康的な}秘訣です。
- (134) 林さんは{×健康の/○健康な/?健康的な}体がほしいと
言っていた。
- (135) 林さんは{×健康の/?健康な/○健康的な}顔をしてい
る。
- (136) 一般に{×健康の/○健康な/○健康的な}野生のオオカミ
は、人を襲わないという。
- (137) ボーイフレンドにするなら、明朗快活、元気がよくて明る
い{×健康の/○健康な/○健康的な}人がいいな。

(132)～(137)では、「健康」の連体修飾形「～の」「～な」「的
な」を挙げ、どの連体修飾形が当てはまるのか示した。

(132)と(133)で、「健康」の修飾を受けているのは、「指標」と
「秘訣」である。「指標」と「秘訣」というのは、□□ある事実に対す
る…□□「指標」または「秘訣」であるから、実体概念を表している
と言えよう。従って実体概念の語の連体修飾形である「健康の」が当て
はまる。

(134)で「健康」の修飾を受けているのは、「体」である。この文
では、「体」が健康かどうかという様態を表わそうとしているから、
情態概念の連体修飾形である「健康な」が当てはまる。

(135)で「健康」の修飾を受けているのは「顔」であるが、「顔」
で健康の状態がわかるのではなく、表情とか顔色で健康の状態を予測

することができるだけである。従って連体修飾形の「健康的な」が当てはまると言えよう。

(136) (137)の「健康」を受けている「野生のオオカミ」と「人」は、健康な状態だけを示すなら「健康な」を、健康の他にも様々なことを含めるなら「健康的な」が適当であろう。

従って「健康の」は健康という事実・実体を表しており、「健康な」は健康の状態・様態を表している。「健康的な」は健康の状態を表しているが、健康の状態がはっきりしていない状態や健康それ自体だけではない、という意味を表していると言えよう。

(138) この作品は生々しい戦争体験を通して、戦争の恐怖と{○平和の/×平和な/×平和的な}尊さを強く訴えている。

(139) 現行の平和憲法には、国際{○平和の/×平和な/×平和的な}追求がうたわれています。

(140) わたしは{×平和の/○平和な/○平和的な}暮らしを望んでいる。

(141) 楽しく{×平和の/○平和な/○平和的な}家庭に、突然悲しみの渦が巻き起こった。

(142) 戦争の悲惨さを永遠に語り伝え、{×平和の/○平和な/○平和的な}人間社会を築きたい。

(143) 問題の{×平和の/?平和な/○平和的な}解決が望まれている。

(144) {×平和の/×平和な/○平和的な}利用といっても、原子力は安全性に心配がある。

(145) 国際紛争の解決に{×平和の/?平和な/○平和的な}手段を

用いようと、各国はたゆまぬ努力を続けていた。

(138)～(145)の「平和」も上の「健康」と同じ解釈ができる。つまり、(138)の「平和」は、「戦争の恐怖」という事実と対比させて、「平和」という事実に対する「尊さ」を表しており、(139)も「平和」というものの、その実体を追求するという意味であると言えよう。従って、(138)と(139)は、実体概念を示す「平和の」が相応しい。

(140)～(142)の「暮らし」「家庭」「人間社会」などは、生活と関わる語で、その様子が平和であるという意味である。このように様子を表す場合は「平和な」が相応しい。しかし、ただの様子ではなく、ある規則や規範の内から、方法としての平和を選んだ場合なら「平和的な」が相応しい。

(143)～(145)の「解決・利用・手段」は、方法としての様子を表わしているから、「平和的な」が相応しい。

7. おわりに

以上、形容動詞化する接尾辞「的」について、意味・用法と連体修飾形「的な」と「～の」・「～な」との意味的な関係について考察してみた。

「的」の語基になる語を検討した結果、「的」の語基は人間と関わっている内容が多く、語の性格も抽象的な意味の語が多い。「的」の付く語基は、(ア)実体概念の語、(イ)上位概念の語、(ウ)包括的な

意味の語などであり、「的」の付かない語基の特徴は、(ア)情態概念の語には「的」が付きにくい(イ)上位概念の語と下位概念の語が存在する場合、下位概念の語には付かない傾向がある(ウ)人間と直接に関係ない自然現象と自然物には「的」が付きにくい(エ)一回的な意味の語には「的」が付きにくい、などである。

「的」は、そもそも漢字名詞に接続する接尾辞であるが、現在は漢語のみならず、和語・外来語・混種語にまで接続して、「的」形の語の領域を広めている。

「的」の領域が広まっていくにつれて、意味的な機能も、多様化している。「的」の移入された初期は、「の」の意味機能しか持っていなかったが、今は、①～に関する、～についての、～上の②～のような、～らしい、～に似た③～の状態にある、～している④～としての、～である⑤～おける、～の方面での⑥～にかなう、～に合った、とさらに ⑦～特有の、～固有の、という意味が加わって意味の拡大が見られる。

また、「的」の多義性による文の中での評価的な意味も多様に現れる。つまり、「**科学的な考え方**」「**家庭的な雰囲気**」などは、本来「科学的」「家庭的」の意味にプラスの評価義が、「**形式的な報告**」「話し合いは**感情的**になる」「伝達手段が**原始的**だ」などは、本来の「形式的」「感情的」「原始的」の意味にマイナスの評価義が加わる。

「～的な」が実体概念と属性概念を共に帯びている名詞(N)から作られた語である場合は、連体修飾形に「～の」「～的な」「～な」が全て用いられることもある。この場合、意味の違いについて調べてみた結果、「N+の」はある対象についての事実・実体を表しており、「N+な」は対象についての状態・様態を表している。「N+的な」は対

象についての状態を表しているが、「N+な」とは違って、その状態がはっきりしていない場合、あるいは状態の基準としての意味を表していると言えよう。語源が同じでも、語性によって意味の違いが現れており、語法によっても意味の変化が現れるのである。

第5章

カタカナ語の連体修飾形「～な」 について

1. はじめに

最近カタカナ語の使用が以前に比べかなり増えてきている。このような現象は多方面にわたり外国との交渉が増えたことに起因するといえよう。

20世紀後半以降、西洋からの文物の受容に伴い、大量のカタカナ語が日本語に入ることになり、日本語の語彙体系および語彙の使い方にも大きな変化をもたらした。カタカナ語が日本語の語彙体系に新たに参与することにより、それまで存在しなかった、または表現しえなかった概念を表わすことができるようになった。また、それまでに用いられた一部の漢語に取って代わるなど、カタカナ語は日本語の語彙として重要な役割を担うようになった。

しかし、カタカナ語の受容においては漢語のそれとは違って、語の意味・用法が十分考慮されないまま受け入れられた向きもあり、その使い方における正否の問題がないとはいいがたい。例えば、カタカナ語による連体修飾において、原語の意義および日本語の品詞性とは関わりなく、「～な」の形を取るものが目につく。

- (1) クラブにこだわる上級者にも対応した 軟鉄鍛造ヘッドに加え、ターゲットへ正確にアドレスしやすい**オーソドックスな**フェース形状になっています。
- (2) 隔週刊メールマガジン「**アジアな**アメリカ発見」の本拠地へようこそ！

(1)の「オーソドックス(orthodox)」は形容詞、それから(2)「アジア(asia)」は名詞の語性を帯びており、この点からしたら連体修飾に(1)は「～な」の形が、(2)は「～の」または「～的な」の形が期待される。(1)の「オーソドックス」は原語における形容詞の性格がそのまま反映され、日本語においても形容動詞として用いられており、連体修飾する時も「～な」の形を取る。それに対し、(2)の「アジア」の場合は原語の意味・用法と異なり、日本語では形容動詞の振る舞いをしており、連体修飾の際、「～な」の形を取って現れている。もともと「アジア」のような名詞性のものが連体修飾の形として用いられる場合は、まず「～的な」を伴って用言化するのが普通であるが、実際には(2)のように「～な」の形での連体修飾が散見される。しかも、このような場合「カタカナ語+な」と「カタカナ語+的な+な」の表わす意味は一致しない。

本稿では、カタカナ語の中で連体修飾の際に「～な」を取る類を対象とし、それらに見られる共通点はいったい何であるかを検討する。また、名詞性のカタカナ語が連体修飾をする時、いかなる理由で「～な」の形が可能になるのか、形容動詞と連体詞、形容動詞と形容詞を対比することにより明らかにする。

2. 連体修飾形の「～の」と「～な」

現代日本語の連体修飾形には「～の」と「～な」がある。「～の」は「名詞＋の＋体言」のように用いられるのに対し、「～な」は「形容動詞語幹＋な＋体言」のように用いられるか、または「名詞＋的＋な＋体言」のように、名詞に「～的」を後接させ、形容動詞化した形で用いられる。和語と漢語では、このような連体修飾形が、語により多少の異同は認められるものの、基本的に維持されていると言える。ところが、カタカナ語では連体修飾形の「～な」が形容性を帯びている語だけではなく、名詞性を帯びている語にも用いられるなど、和語と漢語とは違った姿を見せている。ここでは、カタカナ語の連体修飾形に現れる「～の」と「～な」の違いは何を意味するのかということについて、漢語の連体修飾形のそれらとの対比を通して検討する。

2.1. カタカナ語の連体修飾形「～な」

カタカナ語が用言として用いられ、後ろに来る名詞を連体修飾する場合は、一般に「～な」の形を取るのが普通である。つまり、「～な」は形容動詞の連体修飾形語尾として扱われているので、この場合のカタカナ語は形容性を帯びる語であると言える。カタカナ語が「～な」の形で連体修飾する例を見てみよう。

- (3) 今は、わたしたちは**シンプル**な日付による命名方法に変更しました。
- (4) 使いやすい**軽快**なクリックボタンと**スマート**なデザインで

す。

- (5) **ユニークな事業戦略**をとり、市場の停滞が起きても十分に成長が見込める環境を作る。
- (6) カネに**ルーズな人間**は人間性もルーズだと教えられてきた。
- (7) **シックなインテリア**にも調和します。
- (8) ご自宅のパソコン、ファクスや弊社が提供する携帯端末など
にお客様の株式投資に役立つ独自の**タイムリーな情報**を適宜お送りします。
- (9) ご希望の結納飾りをお申し付けください。**コンパクトな結納**へアレンジいたします。
- (10) 動きやすく、**リズムカルなイメージ**でデザインした。
- (11) また、小さなプログラムを複数組み合わせさせて構築するので、**シンプルでパワフルなシステム**が実現する。

(3)の「シンプル(simple)」、(4)の「スマート(smart)」、(5)の「ユニーク(unique)」、(6)「ルーズ(loose)」、(7)の「シック(chic)」、(8)の「タイムリー(timely)」、(9)「コンパクト(compact)」、(10)「リズムカル(rhythmical)」、(11)の「パワフル(powerful)」は、いずれも原語において状態・様態・属性などを表わしているので形容詞に属する。そして、これらのカタカナ語は日本語において連体修飾形として用いられる場合「～な」の形を取るもので、形容動詞と認められる。従って、(3)～(11)のカタカナ語は原語の品詞性が日本語にそのまま反映されていると言える。

次に、同じように連体修飾形に「～な」の形を取るカタカナ語の例を挙げる。

〈表1〉 「～な」の形を取るカタカナ語

アカデミック (academic) な	アドバンスド (advanced) な	ウェット (wet) な
エスニック (ethnic) な	エキゾチック (exotic) な	エレガント (elegant) な
オープン (open) な	オリジナル (original) な	カラフル (colorful) な
キュート ((cute) な	クール (cool) な	クラシカル (classical) な
クリア (clear) な	グローバル (global) な	コンパクト (compact) な
コンビニエント (convenient) な	シアトリカル (theatrical) な	テクニカル (technical) な
シンプル (simple) な	シンボリック (symbolic) な	スパイシー (spicy) な
ダイナミック (dynamic) な	タイムリー (timely) な	シック (chic) な
スタティック (static) な	スケーラブル (scalable) な	ストレート (straight) な
セキュア (secure) な	セルフリライアント (selfreliant) な	ソフト (soft) な
デジタル (digital) な	トータル (total) な	ドラマティック (dramatic) な
トロピカル (tropical) な	ナイス (nice) な	ノスタルジック (nostalgic) な
パーソナル (personal) な	ハード (hard) な	バーチャル (virtual) な
ハイグレード (highgrade) な	パワフル (powerful) な	ハンサム (handsome) な
ビジュアル (visual) な	ビッグ (big) な	ピュア (pure) な
ファッショナブル (fashionable) な	ファンタスティック (fantastical) な	フォーマル (formal) な
プライベート (private) な	ブラック (black) な	フラット (flat) な
フリー (free) な	フルーティー (fluty) な	ベーシック (basic) な
ミステリアス (mysterious) な	プロフェッショナル (professional) な	フレキシブル (flexibly) な
ホット (hot) な	マシー (mussy) な	マニアック (maniac) な
フローラル (floral) な	ミニマル (minimal) な	メイン (main) な
メタリック (metallic) な	メモリアル (memorial) な	モバイル (mobile) な
ヤング (young) な	ユーモア (humor) な	リアル (real) な
リズムカル (rhythmical) な	レトロ ((retro) な	ローカル ((local) な
ロマンチック (romantic) な		

〈表1〉にあげたものは全て原語において形容詞である。

一方、カタカナ語の中には、形容性を帯びている語だけではなく、名詞性の性質を有している語が連体修飾の時に「～の」ではなく、「～な」を取る例も存在する。

(12) この度『がんばれ**アジア**な女たち』ではオンラインマガジンを発行する運びとなりました。

「アジア (Asia)」という語は、一般に名詞であると認識されるので、これが連体修飾形として用いられる場合は「～の」を取るべきである。しかし、(12)を見ると、「アジアな女たち」のように「～の」ではなく、「～な」が用いられている。もし、(12)の「アジアな女たち」が文法的に逸脱した文ではないとすると、「アジアな～」と「アジアの～」は同様の意味を持つのか、さもないかのような意味の違いが認められるのかといった点が問題となる。

形が違えば意味も異なるといった立場から解釈すると、「アジアな～」と「アジアの～」の表わす意味内容は同一ではないということになる。ここでは(12)の「アジアな女たち」と「アジアの女たち」の意味的な違いを次のように解釈する。前者の「アジアな(女たち)」は、その文法的な正否はいましばらく問わないことにして、意味の面からみると、□□アジアらしい□□□□アジア風の□□□□アジアのイメージの□□など、アジアに含まれている様々な様子を連想させるような意味を含意している。それに対して、後者の「アジアの(女たち)」は□□アジアに属している□□という、いわば所属を示していると解される。

このようにカタカナ語の中には連体修飾形として「～な」を取る

か、「～の」を取るかによって、その表わす意味内容に違いを見せるものがある。一方、漢語の中にも、名詞と形容動詞語幹の両方の用法を持つものがあり、それが連体修飾する場合、「名詞＋の」と「形容動詞語幹＋な」の形で表わされる。漢語も広い意味では外来語に入る。そういう意味では、漢語系列に見られる「～の」と「～な」の形態的・意味的関連性および違いは、一群のカタカナ語における連体修飾形の取り方の違いを考えるうえで参考になると思われる。それでは、漢語において、連体修飾形が「～の」の形を取るか、また「～な」の形を取るかといった形態の違いが意味にどのように作用するのかについて見てみよう。

2.2. 漢語の連体修飾形「～の」と「～な」

漢語の中で名詞と形容動詞語幹の用法を合わせ持つものには、健康、自由、平和などがある。これらが連体修飾形として用いられる場合は、「自由の／自由な」「健康の／健康な」「平和の／平和な」のように二種類の形態が可能である。それでは、これらの漢語において「～の」¹⁰⁾の形と「～な」の形の間にはどのような違いがあるだろう

10) 連体修飾形に用いられる「の」の意味・職能は大きく二つに分けられる。つまり、ものの性質を表わす職能と相対的な関係の基準を表す職能がある。ものの性質を表す職能には、

- (ア) 所有物を表す
- (イ) 存在場所や所属先を表す
- (ウ) 物事の時期を表す
- (エ) 状態・状況・素材などの特性を表す
- (オ) 数量や順序などを表す
- (カ) 資格や立場を表す。

などの意味・職能があり、相対的な関係の基準を表す職能には、

か。

まず、例を挙げる。

(13a) **自由**の女神像は正式名称を世界を照らす自由といい、アメリカ・ニューヨークのリバティ島に建っている像である。

(13b) ブリック中央公園といえば有名なのが、**自由な**女神像です。どこかにあるのとはよく似ているようですが、これは『**自由な女神**』です。この公園ができた時から、ずっと人々を見守ってきた像です。

(14a) 日本医者会ホームページ：「**健康**の森」は体と健康、病気とその治療法、看護や介護などについて、専門家とともに考えるページです。

(14b) 「**健康な**人が多く住んでいそうな都道府県」という質問で沖縄県をあげた方は、沖縄調査で8割以上、首都圏調査では9割を超える結果となりました。

(15a) 「戦争反対」の意思表示にどうぞ（兵器は草で覆われ、**平和**の白 いりボンが世界を包みます）

(15b) また、米国のアフガン報復爆撃に際しては、「いのちの基金」を呼びかけ、空爆下に餓死に直面する約20万人分の食糧を大量輸送しました。現在、**平和な**農村の回復を目

(キ) 部分に対する全体を表す

(ク) 相対的な位置づけの基準を表す

(ケ) 事柄の推移の基準を表す

(コ) 物事の具体的な内容を表す

(サ) 動作の目的を表す

(シ) 動作の主体や対象などを表す(以上、明鏡、大修館書店による)

などの意味・職能がある。

指し、沙漠化した農地を緑化すべく、用水路などの灌漑事業に力を注いでいます。

(13a)～(15b)から分かるように、「自由」「健康」「平和」は、連体修飾形に、「～の」と「～な」が両方用いられている。(13a)(14a)(15a)のように、「自由」・「健康」・「平和」が「～の」の形を取る場合は名詞、(13b)(14b)(15b)のように、「～な」の形を取る場合は形容動詞にそれぞれ分類される。このように、同形漢字の名詞と形容動詞語幹は、「～の」と「～な」という形態的な差にとどまらず、意味的にも次のような違いが看取される。(13a)の「自由の女神像」は□□自由を意味する象徴物としての女神□□という意味を表わしており、(13b)の「自由な女神」は□□生活方式が社会・規範的な制約からはなれて、自由に生活する女神□□という意味、いわば女神の状態を描写している。そして、(14a)の「健康の森」は□□健康についての情報がいっぱいある森(日本医学会ホームページ)□□を表わしており、(14b)の「健康な人」は□□体が丈夫な人□□で体の状態を表している。また、(15a)の「平和の白いリボン」は□□平和の象徴物としての白いリボン□□を表わしており、(15b)の「平和な農村」は□□生活が安定した静かで豊かな農村□□のイメージを表わしている。このように、漢語からなる名詞と形容動詞においては、たとえ語基が同じであるとしても、両者の使い方の違いに支えられ、意味・用法が区別されるのである。

名詞的な成分による連体修飾形には大きく「～の」の形と「～な」の形があり、「の」は格助詞として、「～な」は形容動詞の語尾として認定される。連体修飾に携わる「の」の説明を見ると、「〈体言ま

たは体言相当句＋「の」の形で〉あとに続く体言を修飾限定する。二つの体言は、さまざまな意味の結び付きをなす。」のような職能を持つとされている。

漢語語基による連体修飾の場合は、基本的に「名詞＋の～」の形と「形容動詞語幹＋な～」の形が維持されており、これらの形態的な違いが意味的な面にも反映されている。言い換えれば、このような「～の」と「～な」の間に認められる語形の差と、それにともなう役割分担があるからこそ、同形漢語の二つの用法が維持されるのである。

2.3. カタカナ語の連体修飾形の「～の」と「～な」

カタカナ語による連体修飾形には、すでに指摘したように、「名詞＋の」と「形容動詞語幹＋な」以外にも、「名詞(的なもの)＋な」のような形もよく見られる。

例を見てみよう。

(16) コリアな暮らしー 韓国のソウルで暮らしているガイドの竹井が送る 韓国生活記.

(17) キッチン用品がミニチュアなマグネットになっています。

(18) いつも「綵家ゆかりのヘルパーな日々」をご愛読いただきまして、本当にありがとうございます。

(16)～(18)の「コリア(Korea)」「ミニチュア(miniature)」「ヘルパー(helper)」は名詞か名詞的なものであり、その点で、本来なら連体修飾形としては「～の」のほうが期待される。しかし、(16)～(18)

では、これらの名詞による連体修飾形に「～な」の形が用いられている。それでは、この「～な」の形の表わす意味内容がいかなるものであるかを、「～の」の形との対比を通して検討する。本来、名詞か名詞的なものとされているカタカナ語が「～な」の形を取る場合、どんな意味を表わすのかについては、(12)ですでに確認した。(16)～(18)の「～な」の形の意味は基本的には(12)で特徴づけられたものと変わりはない。

(16)の「コリアな暮らし」の「コリアな～」は□□コリアらしい□□□□コリア風の□□にあたる意味を持っており、その点で様々な韓国のイメージを表わしているといえる。それに対して「コリアの暮らし」は□□コリアでの暮らし□□を表わしており、表現の焦点が場所に限定されているように解される。(17)の「ミニチュアなマグネット」は、実際はミニチュアではなくても、ミニチュアのようにかわいくてきれいな様子を表わしていると解される。もし、これを「ミニチュアのマグネット」のように「～の」に言い変えると、その表わす意味が変わってしまう。すなわち、ミニチュアに作られたという意味で、出来上がったマグネットの様子を表現するものとして解されよう。(18)も(16)(17)に準じて解されよう。(18)の「ヘルパーな日々」も、実際ヘルパーかヘルパーでないかは問題にしておらず、ヘルパーのような心遣いで助けてあげる様子を表しており、それに対して「ヘルパーの日々」のように「～の」の形は、職業的なヘルパーとしての生活を限定して表わしているものとして解される。(16)～(18)を対象にして「～な」の形と「～の」の形の表わす意味内容の一端を検討した。(16)～(18)の「～な」の形については、規範意識が働いて本来ならば「～の」の形を取るべきところに「～な」の形が用いられたと見れ

ば、この「～な」の形は誤用であるということになる。しかし、現に用いられている用法をそのまま素直に認める立場に立てば、上の「～な」の形を単なる誤用だとは言えなくなる。上で示したような解釈が許されるならば、同一語幹から派生する「～の」の形と「～な」の形は、その意味・用法を異にする語配列であるということになるからである。以上のような検討から(16)～(18)に見られる「～な」の形は、規範意識から逸脱しているとか文法的に間違っているとかいうレベルの問題ではなく、「～な」を取りうるものが「～な」の形で実現したにすぎないということになる。いずれにしても「～な」を伴って用いられるカタカナ語には、「～の」の形とは異なった、属性・状態・様態で特徴づけられる形容性が看取されるのは否めない。

以下では、同一語幹から派生する形容動詞と形容詞、それから同一語幹から派生する形容詞と連体詞の意味的な関連性および違いを対比することにより、「名詞性のカタカナ語＋な」になぜこうした意味的特徴が付与されるのかについて、検討を試みる。

3. 「～な」形を取る語の意味的考察

もともと形容性を帯びている外国語が、日本語に受容され、外来語として日本語の語彙体系に定着し運用される場合、一般に連体修飾形として「～な」の形を取る。このような形態的特徴からこれらのカタカナ語は形容動詞として認められるのである。しかし、カタカナ語の中には、形容性よりはどちらかというと名詞性を持つ語であるにも関

わらず、連体修飾する時に「～の」ではなく「～な」の形を取るものが少からず存在する。それゆえ、このような名詞的な性格を有するカタカナ語がいかなる理由で連体修飾する時に「～な」を取るのか納得のいく説明がなされなければならない。ところが、いま指摘したような問題に対し、具体的に論じられているものは管見のかぎり見当たらない。以下、このことについて、検討を試みることにする。

3.1. 同一語幹の形容動詞と形容詞

形容詞と形容動詞の中には、次のような同一語幹から派生したものが存在する。

(19a) 列島の南に前線が停滞している影響で関東各地では1日、朝から冷たい雨に見舞われた。雪やみぞれとなったところもあり、**暖かかった**2月から一転し、3月に入って寒さがぶり返した。(朝日新聞2004.3.1)

(19b) **暖かだった**2月の反動？千葉と水戸で雪、東京でみぞれ
(朝日新聞 2004.3.1)

(19a)(19b)は同じ新聞の記事から拾ったもので、筆者は同一人物であると推察される。同一人物によって書かれた文であるにもかかわらず、(19a)では「暖かかった2月」のように、形容詞「暖かい」が、(19b)では「暖かだった2月」のように形容動詞「暖かだ」が用いられており、被修飾成分も両方とも「2月」で変わりがない。それでは、(19a)の「暖かかった2月」と(19b)の「暖かだった2月」は全く同じ意味

内容を表わしているのか、それとも両者の間には何らかの意味の差が認められるのだろうか。

このような同一語幹から派生する形容動詞と形容詞の関係について塚原鉄雄(1964)は、次のように述べている。

形容詞は、属性を抽出して記述し、形容動詞は、状態の判定を記述する。そのものに、どんな属性があるかを、抽出して表現するのが形容詞で、そのものが、どんな状態であるかを、判定して表現するのが形容動詞である。「きょうは暖かい。」といえ、
「今日」から、「暖か」という属性を抽出し、その属性によって、「今日」を説述する。「きょうは暖かだ。」といえ「今日」が、「暖か」という状態であると判定し、その判定によって、「今日」を説述する。すなわち、対応形容詞と対応形容動詞とは、言語素材を共有するけれども、その言語素材を、言語対象として規定する方法に、異同があると理解される。したがって、意味の論理構造において、相違するところがあるといわなくてはならない。だとすれば、両者が、動揺として共存するのは、言語形式の動揺としてなのではない。言語対象を規定する方法としての動揺である。そうした方法の動揺が、言語形式に定着して、対応形容詞と対応形容動詞とを、成立させたと思量する。(p. 31)

塚原(1964)に従えば、(19a)の「暖かかった～」は□□属性の抽出□□を表わすものであり、(19b)の「暖かだった～」は□□状態の判定□□を表わすものでなければならない。しかし、(19a)と(19b)はいずれも過ぎ去った2月の気候について述べており、この点からすると両者の間

にはこれといった意味の差もニュアンスの差も認められない。

それでは、他の例を見てみよう。

(20a) つまり、低温要求時間を満たしているから実るのではなく、他の要素が大きく関係しているのです。したがって、
「**暖かい**地方だから実らない」と考えるのは誤りです。

(20b) 折々、そういった大自然の**暖かな**心に触れておりますと
人間の愛が如何に小さなものかを思い知らされます。

(20a)では「暖かい地方」のように、形容詞「暖かい」が、(20b)では「暖かな心」のように形容動詞「暖かな」がそれぞれ用いられている。一見すると、(20a)の「暖かい～」と(20b)の「暖かな～」の間には(19a)と(19b)の場合のように、意味の差がないかのように見受けられる。ところが、被修飾成分に注目すると、(20a)の形容詞「暖かい」の修飾を受けている「地方」は、どちらかという、具体的で現象的な実体を意味している。これに対し、(20b)の形容動詞「暖かな」の修飾を受けている「心」は、抽象的で観念的な概念を含意しているものであると解される。両者の間には、微妙ながらこのような違いが認められる。

さらに例を見てみよう。

(21a) **柔らかい**鉛筆でデッサンする。

(21b) 絹の下着は**柔らかな**肌ざわりが好まれる。

(22a) 産後に**細かい**字を読んだり難しい勉強をして、「本当に気が狂ってしまう人」はいないと思いますが、「体調が悪く

なって、気が狂ってしまったような錯覚を起こしてしまうこと」は、あるかもしれません。

(22b) 施策の基本方向として、中学校では少人数授業を一層推進し、初めて学習する英語は、特にきめ**細かな**指導形態を図るなど、指導を充実することがあげられている。

(21a)の「柔かい～」と(21b)の「柔かな～」、それから(22a)の「細かい～」と(22b)の「細かな～」の場合も、(20a)と(20b)に準じて解されよう。つまり、(21a)の「柔かい」の修飾を受けている「鉛筆」は、いわば現象的な事物を表わしており、また(22a)の「細かい」の修飾を受けている「字」も、具体的で現象的な実体を表わしている。これに対して、(21b)の「柔かな」の修飾を受けている「肌ざわり」は、抽象的で感覚的なものを表わしており、(22b)の「細かな」の修飾を受けている「指導態度」も抽象的で主観的なものを表わしていると解される。

以上の(20)～(22)の観察結果からすると、同一語幹から派生した形容詞と形容動詞は、同義なわけではなく、上で指摘したように微妙ながらも意味的な差が認められるのである。このように形態が違えばその表わす意味も異なるというのは、当然といえば当然のことである。同一語幹から派生したという形態的な親近性から考えると、この種の語群における意味的な関連性は類義関係にある語同士のそれより近いはずである。それで違いが認められるにしても、それは微妙である上に特別な事情がない限り意味的な対立が中和され、どちらが選ばれてもおかしくない場合が大いにある。比喩的な表現をすると、両者の意味的な違いは普通は表面化しないで隠れているとも言える。それが、

必要に応じて、(例えばここでは、被修飾成分の内容によって)顕在化する場合がありうるということである。もともと、発話なり文章というのは、独立したものとして存在するのではなく、何らかの文脈なり状況に支えられ、用いられるものである。特に似かよいを見せている語どうしでは、後ろに来る成分に相応しい語が選ばれ、それらが連なっていちばん自然な発話なり文章を成すのが言語運用の成り行きであろう。

以上の考察結果を総合すると、(20)～(22)のような、同一語幹から派生した、形容詞と形容動詞は、ほぼ次のような使い分けをしていると解される。すなわち、形容詞は、被修飾成分に触発されて現象的な性格を全面に出すようになり、それに伴い後ろの名詞も具体的で現象的な意味解釈を受ける。一方、形容動詞は、後ろに来る被修飾成分により抽象的で観念的な性格を帯びてくるのではないかと解される。次に、同一語幹から派生する形容詞と形容動詞の修飾を受ける名詞の例を挙げておく。

〈表2〉 同一語幹から派生する形容詞と形容動詞の修飾を受ける名詞

暖かい	ご飯・天気・家庭・目色・建築物・関東地方シルク・映画・海雪小屋・船内・年末年始部屋・寝袋・敷物・風呂スープ	暖かな	心・春の日ざし・天気言葉・味 色・朝・秋空間・炎・思い・花束クリスマス・夕陽・午後日差し・部屋マッサージ
意地悪い	腕・眼・ことば・悪劇 考え方	意地悪な	女・読者・解釈・気・事態度・面白味・書き方表情・アメリカ人 気持ち
気軽い	やつ	気軽な	服装・性格・値段・場所物・翼・風・自分・話題

四角い	顔・人・ジャングル ゲーム・タイル・空 スポンジ・消しゴム	四角な	『四角な太陽』船・影・机 外形・結晶・四角形 囲みケイ
手荒い	歓迎・祝福・接し方 洗礼・誕生日の祝福 モード	手荒な	こと・まね・戦い・扱い 扱い・侵入・空き巣 指導員
手軽い	仕事・やり方	手軽な	食事・菓子・費用・所 論議・殺人芸術・存在 バックアップ手段 理想・幸福・方法
ひ弱い	体質・管理人・夏花 警備員・小児・感じ 都会人	ひ弱な	子供・体・男・ボス アメリカ・心・中央銀行 主人公・経済成長・ホスト 自我・感じ
生暖かい	風・プロレス空間・目 吸盤・午後紅茶・朝 液体・眼差し・精神	生暖かな	仲間・観察・日・口腔 息・優しさ・空気・ 気配 布 団・舌先・鼻息
間近い	人工視覚・大学会館 時・労働時間・フライト サービス・旅	間近な	女子大生・選手通算記録 室の話題・記録
細かい	文字・字・金・砂・雨 説明・情報・心づかい 事・配慮・夫・支障 ミス・条件・間違い 操作・指導・ サービス 学習システム	細かな	字・砂・心づかい・画像改 良 ・使い勝手・カス 注意事項・ 情報
真っ黒い	髪・温泉の正体・画面 便・温泉玉子	真っ黒な	雲・立方体・幼虫・人間画 面・髪・烏・絵・面
真っ白い	ドレス・機体・花・肌 歯・雪・チューリップ 空・ワンピース	真っ白な	歯・雪・秋田犬・ノート 壁・雪原・ 気持ち ・世界タ オル・状態
真ん丸い	月・お月様・円・虹 満月・穴	真ん丸な	組織 ・形・鏡・目の女 体・地球・目玉・断面

柔かい	背・肉・体・足音・乳房 草・声・光・筋肉・肌 雪・風・土・音・土壌 食べ物・手・掌・パン ふとん・頬・骨・料理	柔かな	肌・体・仕事・ボディー フレーム・構造物・茶色 人間・考察・声・光・雪 心・土・あたり・香り 着物・地面・手・葉・指 日差し・響き・皮膚 身のこなし・物腰
-----	---	-----	---

3.2. 同一語幹の連体詞と形容詞

同一語幹から派生し、意味上の近接性を見せているものには、ほかに次のような形容詞と連体詞のペアがある。例えば、「大きい／大きな」、「小さい／小さな」「おかしい／おかしな」のようなものがこれである。両者の形態的な違いと言え、形容詞は命令形を除いて活用形を完備しているが、連体詞は名詞のみを修飾する、いわば連体修飾機能しか持っていないという点である。意味的な違いについては、一般に、形容詞は絶対的な意味を、連体詞が相対的な意味を表わすとされている。絶対的・相対的な意味の差はあるものの、同一語幹の形容詞と連体詞においても、3.1で考察した同一語幹の形容詞と形容動詞の場合と同様、かけ離れた大きな意味的な差が認められない。しかしながら、同じ意味分野において形態的にも意味的にも酷似している二つの語が共存する以上は、何らかの意味的な差— ここではそれが絶対的な、相対的な意味の違いであるかどうかという問題については深入りしない— をもって意味領域を分け合っていると解釈される。否、もしこのような解釈が成り立たなければ、二つの形態の語の存在する意義が認められない。

では、例を見てみよう。

(23a) よく読んで**おかしい**所は直してください。

(23b) 急に彼女は現れたので**おかしな**話になっちゃった。

上の例から分かるように、連体修飾において(23a)では形容詞「おかしい」が、(23b)では連体詞「おかしな」が用いられている。それでは、(23a) (23b)のように、同一語幹から派生する形容詞と連体詞の間には、どのような違いがあるのだろうか。

(23a)の「おかしい所」では□□誤った所□□、または□□変な所□□のような意味が読み取れる。それに対して、(23b)の「おかしな話」では単なる「話」のことを表現しているのではなく、□□おかしくなった雰囲気□□を表現しており、その点から言えば読み手または話し手の感情が介在している文として解される。

(24a) もっと**おおきい**サイズの服はありませんか。

(24b) 彼は**おおきな**あたたかい心をもっている。

(25a) 日本一**ちいさい**村、愛知県富山村の面積は34.78平方キロメートルで、東京ドームに換算すると約749個分になる。

(25b) 社団法人「**ちいさな**親切」運動本部

(24a)の「おおきい」、(25a)の「ちいさい」の被修飾成分は「サイズ」と「村」で、これらは何らかの形でその全容を計ることができるようなものである。一方、(24b)の「おおきな」、(25b)の「小さな」が修飾するのは「あたたかい心」と「親切」であり、これらの成分は

どちらかと言えば抽象的な性格のものである。それでは、形容詞の用いられている(24a)(25a)と連体詞の用いられている(24b)(25b)の間には、どのような意味的な違いがあるのかを検討してみよう。(24a)の「おおきいサイズ」はサイズのおおきさを、(25a)の「ちいさい村」は□□村の面積が34.78平方キロメートル□□という村の広さをそれぞれ問題にしているところから、いわば具体的な事柄を表わしていると言えよう。これに対して、(24b)の「おおきなあたたかい心」における□□あたたかい心□□の場合は、彼から感じる表現主体の感情を示している。また、(25b)の「ちいさな親切」の場合も、親切のようなものには通常基準を立てられない一般則から察すると、やはり表現主体の感情に深い関係を持っているといえる。このような点からすると、(24b)(25b)のように、連体詞の用いられている文は表現主体の主観的な感情を表現しているものとして位置づけられよう。

このように、同一語幹の形容詞と連体詞の間には、絶対的・相対的では割りきれない、ニュアンスの違いが存在する。もし、2分法的な言い方が許されるなら、形容詞の方がより事実的な描写を表現しており、連体詞の方はより感情的な側面を表現していると解釈される。

これまでの考察の結果、同一語幹から派生する形容詞と形容動詞の「～な」、また同一語幹から派生する形容詞と連体詞「～な」において、意味的な差が存在することが明らかになった。言い換えれば、形容詞は具体的で事実的な事柄に、そして、形容動詞は抽象的な事柄に、連体詞は主観的な事柄に関連を持つということになる。

次に同一語幹から派生する形容詞と連体詞の修飾を受ける名詞の例を挙げておく。

〈表3〉 同一語幹から派生する形容詞と連体詞の修飾を受ける名詞

大きい	荷物・計画・靴・広告 サイズ・わり方・万濃 池・スプーン・国・箱 アイコン	大きな	望み・被害・不安・目 関心・混乱・公園 一歩・痛手・ポスター古 時計
おかしい	しぐさ・表現・表記 日本人の英文法・場合 ところ・投稿日・人 電算機	おかしな	顔・法律・惑星・報道 車・人々・石器人・話 もの・男・生活・やつ自 動車・家族・部屋
小さい	音・声・会社・花・村 部屋・魔女・サイズ 倉庫・デジカメ	小さな	旅・願い事・国・天使 ペット・宿・森・博物館 絵本

4. 名詞性のカタカナ語に見られる「～な」の意味的特徴

名詞性のカタカナ語が連体修飾語として用いられた場合「～の」ではなく「～な」を取りうることについては、すでに確認したとおりである。カタカナ語が「～な」の形で連体修飾する場合、これを形容動詞の連体形として認めるか、それとも連体詞として認めるかといった品詞認定上の問題はあるものの、「～な」の形は、具体的・事実的なものよりは、抽象的・感情的な概念を表わすようになる。そして、カタカナ語は主観的な感情を表わす表現、または抽象的な概念を表わす表現において、被修飾成分の内容に応じて、「～な」を取ることであり、このような意味的特徴が付与され、それが顕在化するのである。

それでは、これまでの考察をもとに、カタカナ語の中で本来ならば

名詞性を有するとされている語群が「～な」の形で連体修飾の機能を獲得し、それによりかもし出されるイメージというのはいったい何であるかについてもう一度考えてみよう。

(26) パラダイスなカフェ&レストランのレポートです。

(27) ナイトなきもち 。 - インターネットラジオ『ナイトウィザード通信』

(28) ナイトメアなもの、お見せしましょう。

(26)の「パラダイス(paradise)」は名詞的な意味以外にも、形容詞の意味的特徴である様態・属性などの情態性も含んでいる。このため、「パラダイス」は「パラダイスな」という連体修飾の形が成立するわけである。「パラダイスなカフェ&レストラン」は□□パラダイス的な雰囲気のカフェ&レストラン□□のことを表わしており、「～の」形の「パラダイスのカフェ&レストラン」が表わすような□□パラダイスにあるカフェ&レストラン□□のイメージとは趣きが異なる。(27)の「ナイト(night)なきもち」も□□朗らかで明るい気持ちとは異なる夜のような暗い気持ち□□を表わしており、「ナイトのきもち」、つまり「～の」の形が表わす□□夜に感じるきもち□□とはその趣きが違う。同じく、(28)の「ナイトメア(nightmare)なもの」は、□□ナイトメアらしい□□□□ナイトメア的な雰囲気□□のようなことを表しており、□□ナイトメアそのもの□□□□ナイトメアの所有物□□などのイメージを表わす「ナイトメアのもの」とは、意味的に違う。

(26)～(28)の「パラダイス」「ナイト」「ナイトメア」は、一般に名詞に属している語であるが、(26)～(28)のように連体修飾形に「～

な」の形を取る場合がある。これは、名詞的なものから形容動詞への転化を意味する。このような品詞間の移動の可能性は、和語系の語にはその例が稀だし、漢語系の語においても類例が少いといえる。カタカナ語に見られるこのような特有な現象については、日本語の語彙体系に占めるカタカナ語の容認度、カタカナ語の表語性など、いろいろな要因が複合的に関与していると考えられよう。ここでは問題の所在を指摘するにとどめる。

次に、語性からは名詞でありながら、連体修飾形に「～な」の形を取るカタカナ語の例を挙げる。

〈表4〉 連体修飾形に「～な」の形を取るカタカナ語

アイデア(idea)な	アクセスアップ (access up)な	アクセント(accent)な
アジア(asia)な	ヴァンパイア(vampire)な	エレガンス(elegance)な
カクテル(cocktail)な	グルメ((gourmet)な	ジュエリー(jewelry)な
スタンダード(standard)な	ニュース(news)な	ナイトメア(nightmare)な
ナチュラルテイスト (natural taste)な	ディスレクシア (dyslexia)な	バラエティー(variety)な
パラダイス(paradise)な	ヒップホップ(hiphop)な	フォーラム(forum)な
フラッシュ(flash)な	フランク(flank)な	フルーツ(fruit)な
ミニチュア(miniature)な	コリア(korea)な	サッカー(soccer)な
バイク(bike)な	ラブラブ(love love)な	テクノ(techno)な

名詞性のカタカナ語を形容動詞という状態性用言として機能させるためには、名詞的なものに「～な」を下接する手続き以外にも、その名詞的なものに「～的」をつけて形容動詞化する方法もある。

「～的」は、「名詞、特に抽象的な意味を表す漢語の名詞や体言的な

語および句について、体言または形容動詞の語幹を作る」(日本国語大辞典第二版、小学館)のような意味・職能を持っており、漢語名詞だけでなく、カタカナ語系の名詞の形容動詞化にも適用される。

(26)～(28)のような「～な」の形が用いられる文に対し、特別な意味合いを持たせるためとはいえ、異様な感じ、または違和感を感じざるをえないのに比べ、次の(26')～(28')のような「～的な」系列の形容動詞が用いられた文はより容認度が高いと言えよう。

(26') パラダイス的なカフェ&レストランのレポートです。

(27') ナイト的なきもち。－インターネットラジオ『ナイトウィザード通信』

(28') ナイトメア的なもの、お見せしましょう..

(26')～(28')の「パラダイス的な」「ナイト的な」「ナイトメア的な」は、「カタカナ語(名詞性)＋的＋な」という形態的特徴とその意味的特徴から、形容動詞と認められる。

(26')の「パラダイス的なカフェ&レストラン」は□□まるでパラダイスのようなカフェ&レストラン□□□□本当にパラダイスらしい□□に相当する意味を、また(27')の「ナイト的なきもち」は□□ナイトのようなきもち□□に相当する意味を、同じく(28')の「ナイトメア的なもの」は□□本当にナイトメアらしいもの□□のような意味をそれぞれ表わすと解される。

5. おわりに

本稿では、名詞的な性質を持つカタカナ語の中で、連体修飾する時に「～な」を取りうる類を対象とし、それらに見られる意味的特徴はといったい何であるのか検討してみた。それから、名詞性のカタカナ語が連体修飾として機能する時、いかなる理由で「～な」が可能になるのか、同一語幹から派生する形容動詞と連体詞との意味的な関連性及び違いを通して調べてみた。

連体修飾の「～な」の形は、漢語に劣らず、カタカナ語においても顕著に見られる。これは、表意文字である漢語と違って、表音文字であるカタカナ語においては、表語性を確保するためにも「～な」という、形の上での明確なしるしが必要とならざるを得なかったことに起因する。カタカナ語における「～な」の形は、形容性の語だけでなく、名詞性の語にもよく現われる。漢語を含めて外来語が日本語に受容される時、原語での意味・用法とは関わりなく、まず名詞として受け入れられる。これはカタカナ語の場合も例外ではない。したがって、カタカナ語も原語における品詞性および意味・内容とは違う様相を呈することも十分考えられる。これは、カタカナ語が日本語の語彙体系の一員として働くようになったことの証拠にもなる。その結果、カタカナ語にも、原語にはない、日本語としての新たな意味・用法が生成されるようになり、名詞的な性質を有する語も形容動詞としての使い方が必要となると、「～な」の形を取ることが可能になったのである。名詞的なカタカナ語において、属性・状態・様態などの形容性を表わそうとすると、元の品詞に拘わらず、「～な」の形を取ることにより形容動詞化させるのである。このようなことが可能なのは、

「～な」の形を取りうる他の語類、つまり、形容動詞とか連体詞が隣に控えているからである。こうした意味で、カタカナ語における、品詞性というのは、和語のそれと違って、ある程度の転換が自由であり、それが品詞という枠組みに反映されたのだといえよう。このような現象を品詞分類という、枠組みで処理しようとする、「連続している」とか「二つの用法にまたがっている」ということになるけれども、文法的な立場からは止むを得ないことであろう。また、語形の面からみると、「ゆれ」とか「みだれ」といった解釈も考えられようが、いずれも本稿での論旨とは直接関連がないため、ここではふれなかった。

同一語幹から派生し、ほぼ同じ意味をもつものどうしでは、次のような意味分担が行なわれている。形容詞を基準にした場合、形容動詞と連体詞は、どちらかという、抽象的かつ感情的な意味的特徴を帯びている。このような違いはあるものの、カタカナ語の名詞に形容性を付与しようとする場合は、カタカナ語に「～な」という形をつければ間に合ったわけである。このような過程を経て、カタカナ語の「～な」の形が用いられるようになったと解釈される。

カタカナ語が後ろに来る名詞的な成分を修飾する時は「カタカナ語(形容性)+な」、または「カタカナ語(名詞性)+的+な」の形を取るのが一般的で、文法的にも正しい。反面、規範意識から逸脱したかのような、「名詞性+な」の形も、実際はよく用いられている。文法的な立場からすると、「～的」は名詞を形容動詞化する接辞であるから、形容性の語には付かないのが一般則であろう。

第6章 形容動詞の日・韓対照

1. はじめに

韓・日両言語の間に認められる類似性は、韓国人が日本語を学習する大きな動機付けになる。その一つとして、日本語の形容動詞を挙げることができるが、それは一般に韓国語の形容詞に該当する。とりわけ漢語から由来する日本語の形容動詞「～ダ」は、韓国語の形容詞「～hada」に対応しており、ごく一部の例外を除いては両者を平行的に捉えることができる。

形態的特徴および意味的な特徴に基づいて品詞分類を行った場合、日本語では、形容詞の他に「語幹＋だ」の形を取る一群が存在しており、これは普通形容動詞と名付けられている。日本語の形容動詞は、形態上は、名詞述語である「名詞＋だ」と同じ形を取っているが、意味的にはどちらかと言えば、形容詞寄りの性格を有している。このような特徴により、形容動詞を品詞分類において一類として取り立てること、つまりその認定をめぐって、賛否が分かれており、議論が繰り返されて来ている¹⁾。

1) 形容動詞の認定問題をめぐって行われてきた議論の展開とその主要な論点をみると、大きく二つに分けることができる。一つは形容動詞擁護論である。形容動詞の発生的要因、つまりその歴史的な展開と変遷に意義を求める、いわゆる伝統的な立場からは、形容動詞は形容詞とは違った特徴を持っており、これを品詞の一類として認めざるをえない。

外国語の学習において、語彙を習得し、それを理解する際に、いちばん手取り早いのは翻訳段階における単純な対応関係に頼ることである。しかし、二言語間のいろいろなレベルでの異同の問題は、対語訳という機械的な処理では解決されない。日本語の形容動詞の連体形「～ナ」は、普通、韓国語の形容詞においては「～han」に対応する。例えば、「有名な:有名han」「簡単な:簡単han」の対比がこれに当たる。このような対応関係が認められれば、韓国語の「複雑han」に対しては、日本語の「複雑な」が連想されることになる。そして、このような一般化が成立すると、韓国語では同じ形容詞に属している「永遠hada」の「永遠han」を日本語に変えようとする、普通の韓国人だったら「永遠な」のほうを選ぶのが自然な成り行きである。しかし、韓国語の「永遠han」に対し、日本語では「永遠な」ではなくて、

もう一つの立場として、いわば共時論的な観点からの捉え方がある。それぞれの立場および研究の仕方により、若干の異同は見られるが、形容動詞廃止論がそれに当たる。例えば、「～+ダ」という外形的な特徴に重きを置く立場としては、形容名詞とし、また意味的に形容詞寄りであるということを重ねる立場としては連体修飾の際の「～ナ」を取って、これを「ナ形容詞」と名付け、形容動詞の名称およびその存在価値を否定している。

品詞分類というのは、形態・意味・職能といった基準によりなされており、「～+ダ」の帰属を決めるに当たって何を優先順位にするかによって、その結果が違ってくる。形容動詞の認定問題を巡っての議論の的はまさにここにあり、そういった面から言えば、どちらの立場が言語現象を説明する上でより整合性があり、有意義だと断定しえなくなる。例えば、現実性を求める日本語教育の立場からしても、たとえ「形容動詞」を「ナ形容詞」に変え、形容詞の下位分類に入れたとしても、所詮用語の変換にすぎない。本稿では、形容動詞の認定、否定という問題には深入りしないで、形容動詞と一括されている一類の中味について吟味することにする。すでに指摘されているように、形容動詞の中には、意味的・構文的に形容動詞の名に相応しいものもあれば、名詞述語に近いものもあり、また両者にまたがっているものもある。とりわけ漢語から由来する形容動詞の中には、形容動詞的な性格と名詞述語としての性格を合わせ持っているものがあり、これらの存在は外国人日本語学習者の頭を悩ませている。

「永遠の」のほうがより自然である。すなわち、日本人話者にとって、「永遠()+名詞」の場合、「永遠()」は形容動詞の系列の「永遠な」ではなくて、名詞述語の「永遠の」であるということである。もちろん、一部の用例からはまれに「永遠な」という形も見られる²⁾。

本稿では、「永遠han」と「永遠の」・「永遠な」との対応のしかたに着目し、両言語に見られるこのような対応関係のずれがいったい何を意味するのかについて考察する。と同時に、両言語の間に見られるこのような不一致は偶然のものであるかどうかということについても解釈を試みたい。具体的には、韓国語の「永遠han」において、韓国人は「永遠な」を選ぶのに対し、日本人は「永遠の」を選ぶ、という違いは何に起因するのか説明を試みる。また、最近、日本人の文章に現れる「永遠な」の存在について、その理由付けを行なう。

2) いま指摘したような問題は、形容詞類に限るものではなくて、用言一般にわたって散見する。同じ漢語を日本語と韓国語のそれぞれの語彙体系に取り入れて運用しているが、当の漢語が日・韓両言語において違った様相を呈しているのは、どういう理由によるものなのであろうか。例えば、「混雑」の用言化に伴って、韓国語では「混雑」が「混雑hada」のように形容詞として実現され、日本語では「混雑する」のように動詞として実現された例はただの偶然の不一致として処理すべきなのかもしれない。語彙の場合は一般化できない側面がある、というのはだれしも認めているが、そうであっても、本稿で問題にしている「永遠han: 永遠な／永遠の」の場合までも、「混雑」と同列に扱ってもいいという積極的な意味での証拠はいまだに見つからない。一般化はできないにしても、このような不一致にも何かの要因が働いているのではないかと、または我々に知られていない何かが潜んでいるのではないかと、疑ってその解明に向かって作業を続けるのが、言語学の仕事である。

2. 問題提起

韓国語の「永遠han」に対応する日本語としては、形容詞類における両言語の対応関係の一般化から、「永遠な」といった形容動詞の形が期待されるが、実際は「永遠の」という予想外の形に対応する。まず、例を見てみよう。

(1a) 두 사람은 영원한 사랑을 맹세했다.

(1b) 二人は永遠な愛を誓った。

(1c) 二人は永遠の愛を誓った。

韓国語(1a)を、日本語を母語とする日本人10人と、専門機関で5年以上の日本語学習歴を持つ韓国人10人に日本語に翻訳してもらった。日本人・韓国人両方とも日本語を専攻している。その結果を示すのが次の<表1>である。

<表1> 「永遠han」と「永遠な」・「永遠の」の比較

	永遠han-永遠な	永遠han-永遠の
韓国人(10)	8	2
日本人(10)	0	10

<表1>から分かるように、「永遠han」の対訳語として、10人の日本人はみんな「永遠の」を選んでいるが、韓国人の場合、2人だけが「永遠の」を選び、残りの8人は「永遠な」を選んでいる。8人の中には

日本での生活経験者も含まれている。この結果から、「永遠」の連体修飾形において日本人と韓国人との間に大きな違いが存在することが分かる。

(1)は韓国語を日本語に翻訳するときの結果であるが、今度は逆に日本語の文において、「永遠」の連体修飾形として、「永遠の」と「永遠な」のうちどちらが正しいと思われるのかを調べてみる。

(2) お母さんはお父さんとの**永遠の**愛を手に入れたかったんだよね。

(3) 私たちは瞬間的な愛、限られた時間内の愛を願うのではなく、**永遠な**愛を願うということなのです。

(2)と(3)はともに「愛」を修飾する語が同じく「永遠」であるが、(2)は「永遠の愛」のように「名詞＋の＋名詞」の形を取っており、(3)は「永遠な愛」のように「形容動詞の連体形＋名詞」の形を取っている。(1)の結果からすると、日本人なら(2)の「永遠の愛」は正しいが、(3)の「永遠な愛」は正しくないか、しっくりしないと判定するだろう。それに対し、韓国人なら(3)の「永遠な愛」が正しくて、(2)「永遠の愛」に対しては異様な反応を表わすと推測される。

このように日本語の「永遠の」に対して、韓国人は、なぜ「永遠な」の形を選ぶのかについては、二つの解釈が成り立つ。一つは、日本語の「永遠」の語彙的特徴が分からないが為に起こるいわば外国人である韓国人の誤用であるという解釈が挙げられる。すなわち、日本語の形容動詞と韓国語のそれに当たる語彙の間に見られる違いを十分に把握していないことによる問題である。もう一つは、日本語の形容

動詞の内部問題として、形容動詞と一括されている部類の中に、実際はいろいろなものが混在しているために起こるとの解釈である。ただし付け加えておくと、日本人の文章の中にも少数ながら「永遠な」の形が見られる。本稿では、いま提起した二つの問題について考察を進めることにする。

研究の方法としては、まず韓国人が作成した文章を対象に、「永遠」の次に名詞が来る場合、つまり「永遠」の連体修飾形として「永遠の」と「永遠な」の中でどちらの形を使うかを調べることにより、「永遠」について韓国人がいかに認識しているのかを確かめる。これは「永遠」という言葉に対する、韓国人・日本人の認識の違いにつながることになる。それから、芥川賞全集に収録されている作品と聖書、更にインターネットから拾った日本人の手による文に現れる「永遠」の連体修飾形を調べて、「永遠」に対する日本人の品詞観のあり方を捉える。それと同時に「永遠」の連体修飾形として優位に立っている「永遠の」と、最近進出してきたと思われる「永遠な」とがどういうふうに使分けられており、またその際にみられる意味的な関連性および差異は何であるかについて検討することにする。

3. 「永遠」の連体修飾形

韓国人は「永遠han」に対応する日本語として「永遠な」を選ぶが、日本人は一般に「永遠の」の方を選ぶ。日本人が「永遠」の連体修飾形として「永遠の」を使った例を見てみよう。

- (4) 金網から取り出すと、カメ虫はいずれも死んだともみえぬ姿で、かえってこれが**永遠**のいのちだといわんばかりに干からびて、わたしを薄笑ってでもいるように思えるのです。
- (5) しかし、妊娠とは**永遠**のものではない。
- (6) それは心して生きる者の初歩的にして**永遠**の課題ではあるまいか。
- (7) われわれの絶えざる闘争は、ついに敵を**永遠**の被告たらしめた。(かゝ)
- (8) もちろん、もう神や**永遠**の生命を信じてはいない。
- (9) ふいに風がおこって、おれを吹いてすぎ、その風のそよぎにおれは死の訪れを、**永遠**の平安と休息の、影のように涼しくひそやかな近づきを感じた。
- (10) そして、時間とは、どんなに不明瞭なものであろうとも、選び取られた純粹な持続であり、すべての時計を不要にしてどこまでも拡って行こうとするような、いわば**永遠**の中断への憧れを象る瞑想の軸であった。
- (11) 自分の好きな相手のことしか頭にない青年のしょげた顔を見ながら、こんなことをとりとめなく考えていると、僕はやや大げさな言い方であるが、自然の**永遠**の若さということをしみじみ感ぜざるを得なかった。

(4)～(11)は芥川賞全集から拾った用例であるが、(4)の「永遠のいのち」、(5)の「永遠のもの」、(6)の「永遠の課題」、(7)の「永遠の被告」、(8)の「永遠の生命」、(9)の「永遠の平安」、(10)の「永

遠の中断」、(11)の「永遠の若さ」いずれの場合も「永遠の」のみで、「永遠な」の形は一つも現れていない。

次に、比較的「永遠」という言葉がよく使用されている聖書の例を見てみよう。

- (12) 雲の中に虹が現れると、わたしはそれを見て、神と地上のすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた**永遠の**契約に心を留める。
- (13) あなたの太陽は再び沈むことなく／あなたの月は欠けることがない。主があなたの**永遠の**光となり／あなたの嘆きの日々は終わる。
- (14) 多くの者が地の塵の中の眠りから目覚める。ある者は**永遠の**生命に入り／ある者は永久に続く恥と憎悪の的となる。
- (15) さて、一人の男がイエスに近寄って来て言った。先生、**永遠の**命を得るには、どんな善いことをすればよいのでしょうか。
- (16) わたしはまた、別の天使が空高く飛ぶのを見た。この天使は、地上に住む人々、あらゆる国民、種族、言葉の違う民、民族に告げ知らせるために、**永遠の**福音を攜えて来て

聖書にも、(12)の「永遠の契約」、(13)の「永遠の光」、(14)の「永遠の生命」、(15)の「永遠の命」、(16)の「永遠の福音」のように、すべてが「永遠の」の形で現れており、「永遠な」の形は現れていない。

聖書に載っている「永遠」の項目を調べた結果は、次のようであ

る。

〈表2〉 聖書における「永遠の」と「永遠な」

	永遠の	永遠な
旧約	39	0
新約	68	0

〈表2〉で分かるように、聖書で「永遠」という言葉は、旧約で39個、新約で68個が記されているが、全て「永遠の」のみで、「永遠な」という形は見当たらない。

以上、芥川賞全集と聖書には「永遠の」の形だけが用いられ、「永遠な」の形は一つも用いられていないことが明らかになった。このことから、日本語を母語とする普通一般の日本人話者の語彙目録には、「永遠の」は存在するが、「永遠な」は存在しない、ということが言える。なぜ、日本人話者は「永遠の」のほうを選ぶかという、それは「永遠」が名詞であり、したがって「永遠だ」は名詞述語という認識が働いているからであると解される。これで、「永遠+()+名詞」の場合、()に「の」を取る理由が説明される。

日本人話者の「永遠」に対する、このような捉え方を知らない韓国人は、「永遠だ(形容動詞)=永遠hada(形容詞)」という一般化から、「永遠han=永遠な」という誤った対応関係を導くが、これは日本語としては非文法的であり、その意味で誤用であるとしか言いようがない。

4. 韓国人の「永遠な」使用についての解釈

韓国人の作成したと推察される文には「永遠han」の意味に当たる日本語を「永遠な」の形で表わしたものが多い。

- (17) この段階において時間が圧縮されると考えて見ると、復活と裁きの全過程が“またたきの間に、一瞬間”に起こるので、復活を度々義人に**永遠な**生命を与える意味として話したのが理解出来るのです。（聖書基本知識キリスト教の基本教理書）
- (18) 一時的に見える状況と攷えにより、**永遠な**世界に心を置けない愚かな私を見るようになりました。目ざめの夢のように、主よ、あなたは、奮い立つとき、彼らの姿をさげすまれましょう。詩篇73：20）ソ・ウンヨン（ソウル第一教会）
- (19) 私たちの究極的な希望はこの世にあるのではなく、キリストの再臨と**永遠な**御国にある。（汝矣島純福音教会）
- (20) また、合作関係っていうのは、本社と同じ会社という意味なので、一時的な関係ではなく**永遠な**関係だということを意味する。（韓国DELCAM【株】）
- (21) このような限りない輪廻の連鎖を断ち、完全で**永遠な**生をいけることはできないだろうか。（カヤサン心の脩練院、韓国）

(17)～(21)を見ると、「永遠な生命」・「永遠な世界」・「永遠な

御国」・「永遠な関係」・「永遠な生」のように、「永遠han」に該当する部分は「永遠な」の形で現れている。このように、韓国語を母語とする書き手の文に「永遠な」の形が現れるのは、韓国語において「永遠han」が形容詞として機能しているからである。

日本語の形容詞と形容動詞は、基本的に韓国語においては形容詞に対応する。特に漢語から由来する形容動詞は、韓国語の形容詞に対応しており、このような対応関係の類推から、「漢語+hada」の「漢語+han」を機械的に「漢語+な」に対応させているのである。つまり、韓国人の学習者が日本語を習得する際、日本語の形容動詞の連体形「～な」を韓国語の形容詞の冠形詞形「～han」と対応させて覚えてしまった結果、韓国人の作成した文には「永遠han=永遠な」の形が何の抵抗なしに成立するのである。

誤用の理由にはいろいろな要因が考えられる。(20)は前句に形容動詞の連体形である「一時的な」が用いられており、その後にくる「永遠」も韓国人の感覚からは形容動詞だという認識が働き、その結果、「永遠だ」の連体形として「永遠な」の形が選ばれたのだとも解釈できる。それに、「一時的な関係」と「永遠な関係」が意味的に対をなしていることも一つの要因であろう。(21)もその延長線で解釈できよう。「完全で永遠な」のように、「永遠」に前接した「完全」が形容動詞であり、しかもその後ろに来る「永遠」が、韓国人にとっては—それが誤った情報であろうとも—形容動詞として認識されるに支障がないため「永遠な」として実現したと解釈される。

いずれにしても、(17)～(21)に見られる「永遠な」という形は、「永遠hata」が韓国語では形容詞であるということ、そして、その連体形「～han」は一般に日本語では「～な」に対応するということか

ら自然に導かれた結果である。いわば、誤った情報による誤用であるということである。

このように、いわゆる形容詞類においては、韓国語の「～han」に対して、日本語では「～な」の形は許されず、「～の」の形が対応する例が存在する。さらに、例を見てみよう。

(22a) 병이 나은지 얼마 안 되는 아버지는, 의사에게 **과도한** 운동을 금지 당했습니다.

(22b) 病み上がりの父は、医者から**過度の**運動を禁止されています。

(23a) 21시에는 모임을 해산하고, 아직 **혼잡한** 중화거리를 삼삼오오 뒤로했다.

(23b) 21:00には散会し、まだ**混雑の**中華街を三々五々あとにした。

(22a)の「過度han」は、韓国語においては形容詞として機能しているが、対応する日本語は(22b)の「過度の」のように「名詞＋の」の形になっている。同じく(23a)の「混雑han」も韓国語においては形容詞であるが、日本語としては(23b)の「混雑の」のように「名詞＋の」の形に対応している。韓国の「混雑hada」は形容詞であるのに対して、日本語の「混雑する」は動詞であるという品詞間の異同もさることながら、「混雑の」のような名詞としての用法も存在することが韓国人には分からないのである。

逆に、「～の／～な=～han」のように、日本語では「～の」のように名詞述語と「～な」のように形容動詞とが共に可能な例が存在する

가、韓国語では両方とも「～han」に対応する。

- (24a) パキスタン及びインドに対する**緊急**の経済支援
- (24b) 파키스탄 및 인도에 대한 **긴급(한)** 경제지원
- (25a) 「官僚腐敗構造」の**緊急な**改革を求める
- (25b) 「관료부패구조」의 긴급한 개혁을 요구한다.
- (26a) 話し言葉は、そのまま書き言葉と一致するものではなく、
話す場合にはそれなりに用語上の制約を受けるのは**当然の**
ことである。
- (26b) 구어체의 말은 그대로 문장체의 말과 일치하는 것이 아
니라 이야기 할 경우에는 그 나름대로 용어상의 제약을
받는 것은 **당연한** 일이다.
- (27a) 国字改革運動はもともと甘い見通しのもとに行はれたもの
であるから、現実には直面して何らなすところなく終つてし
まったのも**当然な**ことと言へよう。
- (27b) 국자개혁운동은 원래 낙관적인 전망을 바탕으로 행하여
진 것이기 때문에 현실에 직면해서 아무것도 이룬 것 없
이 끝나버리는 것도 **당연한** 일이라고 말할 수 있다.
- (28a) 六〇〇〇キロを無着陸飛行に成功したことは、飛行機の**無
限**の可能性を全世界に示した。
- (28b) 6000킬로미터를 무착륙비행에 성공한 것은, 비행기의 **무
한한** 가능성을 전 세계에 나타냈다.
- (29a) 若い方達にも『夢を追い続ける事の**無限な**可能性』を少し
でもお伝え出来たらと想っています。
- (29b) 젊은 분들에게도 『계속 꿈을 좇는 일의 **무한한** 가능성』

을 조금이라도 전할 수 있다면 하고 생각하고 있습니다.

「緊急」は、日本語では(24a)「緊急の」のように名詞述語としても、それから(25a)の「緊急な」のように形容動詞としても可能である。それに対して、韓国語は両方ともに「緊急han」が対応する。同様に(26a)の「当然の」と(27a)の「当然な」は「当然han」に対応しており、(28a)の「無限の」と(29a)の「無限な」は「無限han」に対応している。このような結果は、日本語を韓国語に翻訳する際「～の」であれ「～な」であれ、自然な韓国語の流れに応じて「～han」が選ばれたのである。しかし、逆に韓国語の(24b) (25b) (26b) (27b) (28b) (29b)を日本語に訳そうとすると、形容詞類における「～han=～な」という普通の一般的な知識からは、上の例の「～han」に対して「～な」の形が選ばれるのがごく自然であろう。上の韓国語の例の「～han」に対し、もし「～の」の形を選ぶとなると、それは、日本語に関して相当の知識を有していることになる。

これは韓・日両言語の形容詞類の対応関係において、普通の韓国人学習者は「～han」=「～な」という情報を持っているからである。要するに、「永遠han=永遠の」のような情報を知識として持っていない韓国人にとっては「永遠な」が誤用だという意識がない。

日本語教育現場では形容動詞に対し、「～だ=～hada」「～な=～han」という図式的な説明ですましているが、日本語の形容動詞の中味を観察していくと、そのように簡単にはいかない。漢語から由来する形容動詞と「名詞+だ」の間に線を画することが難しいとされているのも、漢語の有する意味によるもので、形容動詞認定を巡る議論が、勝敗なしの水掛け論に終わってしまったのも已むを得ないことであ

る。

この意味では、韓国語を母語とする学習者にとって、形容動詞認定問題は、所詮無意味な議論であると言わざるを得ない。韓国人を対象とする日本語教育現場でいちばん大事なのは、名詞を修飾するとき、漢語系の形容動詞が「～な」を取るのか、「～な」と「～の」をともに取りうるのかといったことを語彙目録と一緒に提示することであり、また一見形容動詞と考えられるものの中には名詞述語「名詞＋だ」のように振る舞うものも少ないという情報を与えることである。

その次は、可能であればこのような形態的特徴を持っている語彙の中に潜んでいる共通性を見い出し、それを一般化することである。

次に、韓国語では形容詞として機能しているものが後接する名詞を修飾するとき、「～han」になるのを集め、それに対して、日本語ではどのような形を取るのかを整理しておく。

〈表3〉 韓国語の「～han」と日本語との対応関係

韓国語	～の	～の ・ ～な	～な
～han	過度・混雑 永遠	閑寂・可能・緊急・当然 突然・無限・温暖・純粹 小心・真実・迅速・正確 正当・早急・疎遠・対等 適正・特殊・鈍感・非常 病弱・貧弱・無限・明瞭 有限・有名・冷静	陰鬱・鋭利・円滑・婉曲 穩健・快活・快適・過酷 頑固・貴重・奇妙・急激 頑固・強烈・厳格・謙虚 嚴重・健全・厳密・賢明 重大・柔軟・重要・深刻 濃厚・平易・優秀・雄大 有力・容易・流麗・冷厳 露骨・矮小

5. 「名詞述語」の連体修飾形に現れる「～な」

それでは、冒頭で触れたように、日本人は「永遠＋の＋名詞」の形だけを使い、「永遠＋な＋名詞」のような形は絶対使わないのか、ということについて検討してみる。〈表3〉に、その結果が記されているが、ここではその可能性について確かめることにする。

日本語の形容動詞の連体形の現れ方から、また漢語系形容動詞とそれに対応する韓国語の形容詞間に見られる類似点からすると、日本語においても「永遠な」という形があってもおかしくはない。しかし、芥川賞全集と聖書からは「永遠な」という用例は見つからなかった。

「永遠な」の存在の可能性を考える前に、今度は「名詞述語」としての性質を有していながら、その連体修飾形が「～の」ではなくて、「～な」を取る例を見てみよう。

(30) 結論の出ない**愚痴な**話

(31) マレーシア・魅力な国、**未知な**国

(32) 「年金を担保に融資を行います。」や「年金立替」等の
キャッチフレーズで年金を受けている方に対し**違法な**融資
を行い、法外な利息を要求する金融業者の存在が全国で確
認されています。

(33) その結果、このノックアウトマウスはほとんど骨形成を認
めずCbfbが骨格形成に**必須な**遺伝子であることを発見し
た。

(34) ところで、このことは心理療法などでみられるように、**苦
痛な**感情を積極的に表現するために、親が教師を必要とし

ているとは限らないのである。

(30)～(34)の「愚痴」「未知」「違法」「必須」「苦痛」はすべてが名詞(名詞述語)であって、連体修飾形は「～の」を取るのが一般的である。しかし、上の用例では、期待に反して「～の」ではなく、「～な」で現れている。これでは、形容動詞の連体修飾形は「～な」であり、名詞の連体修飾形は「～の」である、という文法的な説明が成り立たなくなってしまう。

「名詞」の連体修飾形に「～な」がついた形について鈴木(1986)は次のように述べている。

「高額」は辞書類では名詞とされるが、“ 桁はずれの高額な報酬であった。”のように、「高額な」と使われれば、「形容動詞」と認定されることになるのであろうか。それは余りにも単純な、形式だけを頼りにする分類でしかなく、職能や意味内容を見無視したやり方であると筆者は考える。

この文面からは、鈴木(1986)は「高額な」を形容動詞と認めているかどうか明らかなではないが、とにかく、日本語の品詞分類に問題があることだけは指摘していると見受けられる。「高額」が辞書の分類通り、名詞だとすると、「高額」に「～な」が付いた形については新たな説明が必要であるが、辞書類ではそこまで配慮していない。

名詞類の構文的な特徴としては、名詞が連体修飾語として働く場合は、「～の」を取るのが一般的で、もし「～な」が付くと、名詞としての性質から逸脱してしまうことになる。それにもかかわらず、上の

(30)～(34)はすべて「～な」の形を取っている。それでは、(30)～(34)における「～な」はすべて誤用なのか。もし、誤用であるとすれば、このような誤用が発生する理由は何であろうか。

名詞の中にも「大人」「人参」「食物」など、実質的な概念を有するもの(その意味では名詞らしい名詞の場合)には「～な」という形を許さない。一方、「高額」は実体を表わしているのではなく、金額が高いという一種の状態の意味を表わしている名詞類として解される。これらを見ると、名詞類にも性質の異なるグループが存在することになる。たとえば、「大人」「人参」「食物」などのようなグループと「愚痴」「未知」「違法」「必須」「苦痛」などのようなグループが名詞という枠組みに同居しているのである。言葉を品詞分類するときには、形態・意味・職能といった基準に従うのであるが、個別的に見ていくと、全ての名詞が三つの基準を全部満たしているとは限らない。それぞれの名詞の文法的な意味とその構文的な役割まで考慮に入れるのは容易くないが、精密な文法記述のためには、これからは辞書類のような機械的な処理にとどまらず、より詳しい情報が必要となってくる。

さて、体言の意味機能について塚原鉄雄(1970)は次のように述べている。

国語の体言-名詞には、根底的に、三種の意味機能を具有している。三種の意味とは、事物と様態と事態とである。換言すれば、国語の名詞は、根源的に「モノ」と「サマ」と「コト」とを表現しうる。そして、そのいずれを具現するかは、文脈-場面が決定する。

これに対し、鈴木英夫(1986)は、

筆者は、体言を塚原氏より広く考え、やはり三種に分けてはと考える。その三種とは、次のようなものである。

- 1 実体性(モノ)の概念を表わす語... 実体性体言
- 2 情態性(サマ)の概念を表わす語... 情態性体言
- 3 動作性(コト)の概念を表わす語... 動作性体言

この三種に、一般に行われている品詞の認定法をあてはめると、次のようになる。

- 1 実体性体言... 名詞
- 2 情態性体言... 形容動詞の語幹・副詞
- 3 動作性体言... サ変複合動詞の語幹

体言の中には、この三種の意味機能のうち、一種しか有しないものもあれば、二種あるいは三種を有するものもある。

のように述べている。

鈴木英夫(1986)に従うと、名詞には事物・事実・事態などの意味を含んでいる実質概念と情態・様態・属性などの意味を含んでいる情態概念、それから動作・作用の意味の動作概念が認められることになる。

名詞類の中には、「大人」「人参」「食物」など、絶対的な実質概念を有しているものがある一方、「健康」「幸福」「自由」など、属性と様態という情態概念を有しているものも数多く存在する。そして、実際、品詞分類する時、これらのものは、それぞれの立場や観点により、名詞に一括されるか、もしくは名詞と形容動詞との二つの品詞

にまたがっているものとして処理される。これは、いわば、便宜上の分け方にすぎない。

「愚痴」「未知」「違法」「必須」「苦痛」などの類は辞書に名詞として登載されているが、これらの言葉は意味的に、様態・属性概念を有している。このことから、名詞でありながら、必要に応じては、潜在的な形容動詞としての機能が顕現化し、その結果「～な」の形が実現するものであると解される。

このように見てくると、状態とか属性とかの意味を含んだ名詞類は、いわば実質概念を有する名詞とは違った振る舞いをするのが当然のことながら予想される。名詞類の中には、名詞らしい名詞もあれば、名詞的な性質と形容動詞としての性質を併せ持っているものもあるということになる。後者の場合、いろいろな文法的な操作の結果、名詞か形容動詞かにその帰属が決まるが、それぞれの言葉が実際どのように運用されるかは別の問題である。名詞類を小分けすると、名詞的なもの、名詞と形容動詞との性質を兼備しているものになるが、名詞の性質と形容動詞のそれとを兼備しているものの中にも、どちらの度合いがより強いかわかりによって、細かい分類も可能なことは可能である。しかし、日本語内部におけるこのような序列関係の解明も大事であるが、それと同時に、韓国における日本語教育現場で今まで指摘してきたような事実を踏まえての教育が行われなければならない。

「永遠(だ)」は、韓国語で「永遠(hada)」に対応するが、その連体修飾形は「永遠の=永遠han」になるのが一般的である。それに対し、上の「愚痴」「未知」「違法」「必須」「苦痛」は、韓国語で普通「違法だ=違法ida」のように名詞述語として機能しているが、日本語では「～な」という形容動詞的な振る舞いをしている場合がある。日本

語としては、両者はほぼ同じ振る舞いをしているように見えるが、韓国語との対照までを考慮に入れると、「永遠」グループと「愚痴」「未知」「違法」「必須」「苦痛」グループとは、異った部類として処理すべきであるという結論に至る。

次に「永遠な」の形が用いられる例を挙げ、「永遠だ」を品詞分類する場合、どこに入れるべきかという、その帰属問題を考えてみる。

6. 「永遠」の分析

6.1. 「永遠」の形容動詞的特徴

用例の中には、「永遠な」の形がいくつか見出される。

- (35) 例えば**永遠な**世界のことばかりを説いて、ではどのようにしたら良いのだというと、その方法の説かれてないようなものもあります。
- (36) おまえたち、**永遠な**者たちよ。インコティーを飲み終えたら、しばらく去れ。しかし、帰ってこい。
- (37) 今日では宇宙は単に**永遠な**構造ではなく、生まれ成長しそして死を迎える<歴史>を持ったものとして語られる。(経営情報科学Vol. 2No. 3(1989. 12)pp. 235-254、プラトンの宇宙論における<時間>の諸問題、岩野秀明)
- (38) 人間は死ぬからしっかりと生きていられるんだよ。もし、

永遠な命なんて物があつたら、人間達は、死なないと言う
余裕から、どんな悪いことをするかわからなくなってしまう
かもしれない。

(39) たとえば永遠な時間、あるいはその遡及性のようなものが
表現できたら、と思っています。

(40) 永遠な気持ち 作詞、曲、編曲：中山 塁

(35)～(40)は「永遠」が「永遠な」の形で連体修飾している例で、
これは、芥川賞全集と聖書から出てくる「永遠の」とはその様相が異
なる。「永遠の」と「永遠な」の存在に対し、品詞レベルで判定する
と、「永遠の」は「名詞＋の」の構造を取っているから名詞と解され
る。それに対し、上の(35)～(40)の例の存在を考慮にいれると、「永
遠な」は「永遠だ(形容動詞)」の連体形であるから、「永遠だ」は形
容動詞として解される。

「永遠だ」を意味を抜きにして純粹に形態的に分析した場合、他の
形容動詞「自由だ」「可能だ」「健康だ」と同じ構造を持っている点
から形容動詞であるということになる。また、「永遠だ」を「美人だ
」「学生だ」のような「名詞＋断定の助動詞」に分析しようとすれば
、できないこともないから、名詞述語であるということにもなる。ど
ちらにもなるのは「自由だ」の類と「美人だ」の類の区別が形態的な
ものによってなされているわけではないからである。

意味的には、「永遠」は、ときが無限につづく状態を表わしている
ことから、形容動詞と同じ意味内容をもっていると言える。

以上のことを総合して判断すると、「永遠」を名詞と認定する立場
からは「永遠な」は明らかに誤用になるが、「永遠だ」を形容動詞と

認定する立場からは「永遠な」は形容動詞の連体形として位置づけられ、何の問題も生じないのである。

実際の用例に当たってみると、「永遠だ」の連体形としての「永遠な」は少数であるが、「永遠だ」の連用形の「永遠に」は「永遠な」に比べて多く用いられていることが分かる。

次に「永遠だ」の連用修飾形「永遠に」が用いられた例を挙げる。

- (41) 『君が望む**永遠に**思うこととか』
- (42) Masterpiece…**永遠に**愛されるファンタジー
- (43) **永遠に**治らない病気ではない
- (44) 仮面舞踏会は**永遠に**続く
- (45) ここには、**永遠に**消えない炎がある。ケネディ元大統領のお墓だ。
- (46) 人との交際は、短時間でも密度が濃ければ、それは**永遠に**続くものです。
- (47) プレートの表面には、お名前・出生年月日・死亡年月日が刻印され、故人の生きた証は**永遠に**残ります。
- (48) しかし、「ファイティング・アイリッシュ」と呼ばれる不屈の魂を持つアイルランドの民衆にとって、代表チームの「ハート&ソウル」だったキーンは**永遠に**英雄として名前を刻むことになりそうだ。

(41)～(48)の「永遠に」は、「**永遠に**思う」(41)・「**永遠に**愛される」(42)・「**永遠に**治らない」(43)・「**永遠に**続く」(44、46)・「**永遠に**消えない」(45)・「**永遠に**残ります」(47)・「**永遠に**英雄として

名前を刻むことになりそうだ」(48)で分かるように、全部「～に」の形で後ろの述語を修飾・限定する働きをしている。この点からすると、(41)～(48)の「永遠に」は形容動詞の連用形であり、また、この「永遠に」と連動して「永遠だ」は形容動詞としての資格をもつことになる。

ここまでの観察の結果、「永遠」が連体修飾語として働く場合は、普通「～の」の形を取り、連用修飾語として働く場合は「～に」の形を取る、普通の活用体系から逸脱した振る舞いをみせている。このような逸脱した現象を品詞という枠組みに入れようとする、「永遠の」の形で連体修飾語として機能するときの「永遠」は名詞であり、「永遠に」の形で連用修飾語として機能するときの「永遠だ」は形容動詞であるといったその場しのぎの説明になってしまう。このように、そもそも均整のとれない活用体系を持つ言葉を、無理に品詞の枠組み内で処理しようとしても言語現象を説明する上では何の役にも立たない。いかなる文法的な操作をしても、「永遠」という語が、連体修飾の場合は名詞の特徴を、連用修飾の場合は形容動詞の特徴を取るといって、活用体系から逸脱した姿を見せていることは否定できない。ただ言えるのは、「永遠」という語が他の語類と違った機能、つまり、連体修飾のときは名詞的な振る舞いをし、連用修飾のときは形容動詞的な振る舞いをしているということだけである。このような現象は、規範意識に基づく文法からは異様なものかもしれないが、言語運用面から見た場合、使い方によって形を変えることができる、つまり名詞述語の活用体系と形容動詞の活用体系をうまく使い分けている点で、ある意味では言語を効率的に運用しているとも言える。本稿では、「永遠」のありのままの姿を言葉の言語運用面から検討する。

参考までに辞書類においては、「永遠」の使い分けをいかに処理しているかを見てみよう。

〈表4〉 辞書類における「永遠」の品詞分類

辞書類	永遠
新明解国語辞典(1972、三省堂)	名詞
現代国語例解辞典(1985、小学館)	名詞・(形容動詞)
大辞林(1988、三省堂)	名詞・(形容動詞)
日本語大辞典(1989、講談社)	名詞・形容動詞
現代国語辞典(1989、三省堂)	名詞・(形容動詞)
日英辞典(1992、研究社)	名詞・形容動詞
例外新国語辞典(1993、三省堂)	名詞
広辞苑(1998、岩波書店)	名詞・(形容動詞)
明鏡(2002、大修館書店)	名詞・形容動詞

〈表4〉で分かるように、辞書類では、新明解国語辞典(1972、三省堂)と例外新国語辞典(1993、三省堂)を除いて、「永遠」を「名詞・形容動詞」と登録している。しかし、「名詞・形容動詞」として処理している辞書の場合も名詞的な用例のみで、形容動詞としての用例は提示されていない。

辞書類の区分に従うと、「永遠」は名詞でも形容動詞でも使えるから、連体修飾の形が「永遠の」を取っても、また「永遠な」を取っても、文法的には間違っていないことになる。

しかし、実際の使用実態をみると、「永遠の」のほうが「永遠な」より正しいとされている。この意味で、辞書類の扱い方をそのまま受

け入れることには賛同しがたい。なぜならば、辞書類では、現実世界における「永遠」の使用について、何ら具体的な情報を提供していないからである。さらに、辞書類の記述によると、「永遠の」と「永遠な」を同等同列に扱うことになるから、両者の存在に対し、説明ができなくなってしまう。

次に、「永遠な」の文の分析を通して、「永遠な」の形がいかなる理由で用いられるようになったかについて検討していく。

6.2. 「永遠な」の文の分析

まず、「永遠な」が用いられている文を挙げる。

- (49) 人間は無限性と有限性との、時間的なものと**永遠な**ものの、自由と必然との総合、要するにひとつの総合である。総合というのは、ふたつのあいだの関係である。（キルケゴールの「死にいたる病」 柘田啓三郎訳：中央公論社）
- (50) Modernite（現代性）とは、一時的なもの、うつろい易いもの、偶発的なもので、これが芸術の半分をなし、他の半分为、**永遠な**もの、不易なものである。
- (51) さらにそれでさえも絶対的で**永遠な**美でありえないことに気付いてしまったことから、呪われた詩人の不幸な宿命が始まるだろう。（「ボードレールと想像力、視力、人文学部文学科仏文学専攻3年柿並良佑」）
- (52) さらに、それらの舞台となる「日本」は近未来SFの様相を帯び、しかも、東洋の神秘が同居する、あまりにも複雑で

永遠な謎なのである。(抽象化された娯楽映画製作リュック・ベッソン『WASABI』)

- (53) この無限で**永遠な**空の中で、一つの風景になって坐っている。あの枯木も山茶花も、そしてあなたも私も、みんな一つになって楽しげに、そこにあるではないか。(出典：鹿児島県竹友断酒会機関誌「竹友」第15号「咳をしてもひとり」)

(49)～(53)はいずれも日本語を母語にする人によって書かれた文で、連体修飾語に「永遠な」の形が用いられている。(49)は、「永遠なもの」のように「永遠な」が「もの」を修飾しており、その「永遠なもの」の前の句は「時間的なもの」である。「時間的だ」は普通形容動詞として認められるから、その連体形が「時間的な」になるのはごく自然である。(49)の「永遠な」は、「時間的なものと**永遠なもの**」という言葉の連鎖の中で、前の句の「時間的な」に影響され、または類推され、潜在的な「永遠だ」の形容動詞性が発動して「～な」を取ったものとして解される。(50)も、「永遠」が「一時的なもの、……偶発的なもので……**永遠なもの**、不易なもの」という連鎖の中に用いられており、(49)と同じ理由で「永遠な」の形が選ばれたものとして解釈できる。さらに、(51)～(53)も(49)(50)と同様の解釈が可能である。(51)の「絶対的で**永遠な**美」、(52)の「複雑で**永遠な**謎」、(53)の「この無限で**永遠な**空」をみると、「永遠」の前接した語彙は「絶対的だ」「複雑だ」「無限だ」で、どちらも形容動詞として機能している語である。(51)(52)(53)は、二つの形容動詞が連結して後ろの名詞を修飾している構造である。この場合も、言葉の連鎖による、選

択性が働いたと解釈される。

従って、(49)～(53)の「永遠な」は、いずれも「永遠」の隣接した形容動詞の影響で潜在的な「永遠」の形容動詞性が発動した結果であると解釈される。

同一人物による文の中に、「永遠の」と「永遠な」とが混在している例もある。

(54) 愛は、あらゆる転変から永久に解き放たれ、**永遠**の不滅の内に神に寄りすがり、より激しく燃える。そしてより深く親密な交友を結ぶ(カッシアヌス・ドミニコと最初期の説教者たちの霊的指導者、スール・マリア・アンシッラ、朱門岩夫 訳、1997年2月発表)

(55) 愛よりも貴重なもの、完全なもの、崇高なもの、そして言うなれば**永遠**なものは、なにもありません！(カッシアヌス・ドミニコと最初期の説教者たちの霊的指導者、スール・マリア・アンシッラ、朱門岩夫訳、1997年2月発表)

(56) 先の見えない不況の御時世、人は**永遠**のものを求めているのでしょうか？

(http://ww9.tiki.ne.jp/~novi/diary/clm/clm_04.html)

(57) **永遠**なものとすれば、それは既に起こってしまった事実。完結してしまった物語なのではないでしょうか。

(http://ww9.tiki.ne.jp/~novi/diary/clm/clm_04.html)

(58) 崩落の2週間前にたまたま撮影したのだそうだが、金沢も鉄を使った**永遠**の存在の象徴としてWTCを撮影したのだろう。

(小林はくどう、成安造形大学映像クラス教授)

- (59) **永遠な**時間を所有しようとする建造物の建設に工事現場の鉄パイプは不可欠なもので、完成時には取り外されてしまう対称的な美である。(小林はくどう、成安造形大学映像クラス教)
- (60) **永遠の**命とは病や罪による苦しみのない**永遠な**幸福を意味します。(主日礼拝メッセージ、1998. 10. 18、講師：Caleb Kim)

(54)～(59)は日本人の書いた文で、(60)だけが韓国人の書いた文である。(54)(55)は朱門岩夫による翻訳文であるが、「永遠の」と「永遠な」の二つの形が用いられている。(56)(57)、(58)(59)ともに同一人物による文でありながら、「永遠の」と「永遠な」の二つの形が用いられている点は、(54)(55)と同じである。

(54)(55)では、「永遠の」と「永遠な」がともに用いられているが、(55)は「愛よりも貴重なもの、完全なもの、崇高なもの、そして言うなれば**永遠な**ものは」のように、言葉の連鎖からの影響で「永遠な」になったと解される。しかし、(56)(57)では、「永遠」の修飾する言葉が、両方とも「もの」であるが、(56)は「永遠の」を、(57)は「永遠な」が用いられている。

以上見てきたように、「永遠」が連体修飾語として機能する場合、「永遠の」と「永遠な」の二つの形が実際用いられている。また、同一人物が「永遠の」と「永遠な」を区別しないで用いる例もある。このような例が存在する以上、もはや「永遠な」という形が誤用であるとは言いがたい。それでは、はたして「永遠の」と「永遠な」には意味的な差があるのかどうか、もしあるとすれば、どのような違いであ

るのかを説明しなければならない。これを考察する前にまず、「永遠の」と「永遠な」の使用状況をインターネットの用例を通じて調べる。

〈表5〉「永遠の」と「永遠な」の使用状況

	永遠の	永遠な		永遠の	永遠な
もの	3690	670	愛	21100	59
謎	10200	3	空	434	2
世界	5760	24	者	62	8
生	1190	11	少年	4040	4
生命	6610	27	別れ	8500	6
命	19500	26	美	2880	1
幸福	1180	18	眠り	9300	2
時間	2480	28	真理	11	0

〈表5〉で示された数字から見ると、全体的に「永遠」の連体修飾語としては「永遠の」が多数を占めており、「永遠な」は少数であることがわかる。しかし、「永遠の」「永遠な」の後ろに何が来るかによって、数の上で両者の間にバラツキが見られる。

後ろに「もの」が来た場合は、「永遠の」が3,690、「永遠な」が670で、「永遠の」の頻度がほかの言葉よりはやや高い。ここで「永遠のもの」と「永遠なもの」とを比較してみる。

(61) 私にとって歌は**永遠**のもの、どんな時でもいつもそばにあるもの。

(62) 恋愛を**永遠**のものにしたいのであれば、決して成就させて

はいけない。

(63) ウェブ上に存在するたくさんの占いサイト。これだけ文明が発達した現代でも占いの人気が衰えないのは、ミステリアスなものにひかれる人間の気持ちが**永遠**のものだから。

(64) 死んだものも死ぬものも**永遠な**ものと溶けあって、今、はっきりと、そして永遠に残り続けるにちがいない風景ではないか。

(65) あなたが今まで出会ったものの中に**永遠な**ものがありましたか？

(66) ようやくわたしは口を開き、問い返した。「そう、絶対と完璧と永遠……絶対的で、完璧で、**永遠な**ものなんて何ひとつないはずなのに」…もう十五年も前の話だ。

(61)～(63)では連体修飾語に「永遠の」が用いられており、(64)～(66)では「永遠な」が用いられている。(61)(62)(63)で「永遠のもの」の「もの」が指し示しているのは「歌」「恋愛」「人間の気持」のことで、所有できるような意味内容を表わしている。それが実際に永遠か否かということとは関係なく、永遠になることを期待している含みを表現しているとも言える。

これに対して、(64)(65)(66)の「永遠なもの」の「もの」の場合は、実体をつかみにくい、所有できない、その意味で存在の無限で永続的なものを表わしていると言える。例えば、(64)の「死んだものも死ぬものも」というのは実体を持っている生命体を表わしており、それが「永遠なもの」と溶けあって、と述べ「永遠なもの」は実体の範

囲を飛び越えた「永遠な」ということになるのである。(65)は「あなたが出会ったもの」の場合は、実体として存在するものを表わしている。「あなたが出会ったもののなかで永遠なものはない」とは、実体性を持っているものの中で永遠なものはないという意味で、「永遠なもの」は実体性を持っているものと対応関係を有していると言える。(66)の「永遠なもの」の「永遠」も(64)と(65)の「永遠」とほぼ同じ概念で用いられていると解される。

いま指摘したことを「永遠」の品詞性と関連して言うならば、次のようになる。名詞は事実・事態・実体を表わしていて、多少制限的で所有できるものであるのに対し、形容動詞は属性・様態・情態を表わしていて、抽象的な意味内容を含んでいると特徴づけられる。ここで、「永遠の」と「永遠な」とを、品詞的な概念、つまり、名詞的であるか、形容動詞的であるかに分けて表現することが許されるならば、「永遠の」は制限的で所有できることに関係しており、「永遠な」は抽象的で、永遠性が強調された概念を表わしていることに関係しているということになる。

冒頭に挙げた(2)(3)にも同じことが言える。

(2) お母さんはお父さんとの**永遠**の愛を手に入れたかったんだよね。

(3) 私たちは瞬間的な愛、限られた時間内の愛を願うのではなく、**永遠な**愛を願うということなのです。

(2)の「永遠の愛」は「お父さんとの愛」のことを意味しており、ここで「お父さんとの愛」というのは、お母さんとお父さんが所有で

きる愛を表現していると解される。それに対し、(3)の「永遠な愛」は「〈時間的な制限がある愛〉の対立的な概念としての永遠な愛」のことを意味しており、(2)のような制限的で所有できるという意味はその分弱くなってしまう。

このような解釈が成り立つのならば、「永遠の」がすでに存在していて、それで十分用が足りるはずの意味分野において、新たなる「永遠な」という形が用いられるようになった説明が付く。もちろん、その前提においては、もはや「永遠な」は誤用ではないという認識がある。このような解釈がどのくらいの日本人話者の直感を反映しているものかについては、判断を保留するが、少なくとも、現に「永遠な」の形が用いられていることに対し、正当な判断を下すことにはなるのではなかろうか。このような見方に立つと、「永遠の」と「永遠な」は微妙な意味上の違いに支えられて、両者の間に意味役割分担が行われているとも言えよう。

7. おわりに

本章は、調査の結果、「永遠han」の対訳語として日本人は「永遠の」を選んでいるのに、韓国人の場合は「永遠な」を選ぶ傾向が強いということに着目し、両言語に見られるこのような対応関係上のずれがいったい何を意味するのかについて考察したものである。

この問題は、韓国人のただの誤用として解釈できる側面がある一方で、日本語の形容動詞の内部問題として捉えることもできる。前者の

立場からは、日本語母語話者の「永遠」に対する捉え方を知らない韓国人が、「永遠だ(形容動詞)=永遠hada(形容詞)」という一般化に支えられて、「永遠han=永遠な」という誤った対応関係を導いたと捉える。この場合、日本語としては非文法的で、その意味で誤用とせざるをえない。

一方、日本語形容動詞の連体形の現れ方から、また漢語系形容動詞とそれに対応する韓国語の形容詞間に見られる類似性からすると、日本語においても「永遠な」という形があってもおかしくはない。意味的には、「永遠」は、ときが無限につづく状態を表わしているから、形容動詞と同じ意味内容をもっている。「永遠」を名詞と認定する立場からは「永遠な」は明らかに誤用になるが、「永遠だ」を形容動詞と認定する立場からは「永遠な」は形容動詞の連体形として位置づけられ、何の問題も生じないわけである。実際の用例を当たってみると、芥川賞全集と聖書からは「永遠な」という用例は見つからなかったものの、「永遠だ」の連体形としての「永遠な」が少なからず発見できた。そして、「永遠だ」の連用形「永遠に」は「永遠な」に比べ、多く用いられている。このことから、本稿では、「永遠の」がすでに定着している意味分野において、新たに「永遠な」という形が用いられるようになった理由について述べた。「永遠な」が公認された語形として受け入れたわけではないが、その実用性について新しい解釈が要求されると考えるからである。

第7章 結 論

本論文は、日本語の形容動詞について網羅的な意味記述を行うことを目的とし、先学の研究成果を吟味し、その補正を求めつつ、日本語形容動詞のもつ形態的特徴と意味的特徴を明らかにすることをはじめとして、日本語形容動詞についての新たな解釈を試みたものである。それぞれの章は独立した形をとっているため、それぞれの結論に相当するものをここに改めてまとめておく。

第1章は、日本語の形容動詞を捉える本論文における基本的な立場と、それぞれの章における内容を簡単に述べた部分である。

本論文の立場は、形容動詞に対する従来の認定・否定といった二分法的な分け方から脱皮し、実際に用いられている形容動詞の語形を認める立場からの考察である。

第2章は、先学の研究成果に則って、日本語の形容動詞を改めて整理し直してみたものである。

日本語の形容動詞は文語においては「○○+ナリ・タリ」の形態をしており、口語では「○○+ダ」の形態を取っている。

形態に起因する優れた生産性と経済性は新たな語彙を数多く形成した。とりわけ、漢語と外来語の形容動詞の数が急激に増加した。

形容動詞の成立は語彙の数の増加という肯定的な評価と共に、品詞

の分類においては多くの論議を引き起こすこととなった。これは「形容動詞語幹+語尾(だ)」と「名詞+助動詞(だ)」が、二つとも「○○+だ」という同じ形態をしているからである。

このような、形態的な特徴は、形容動詞の認定と否定という対立を引き起こしたのであり、形容動詞の研究において中心的な論題になった。

大槻文彦(1897)と芳賀矢一(1904)から「形容動詞」という名称がはじまっており、吉沢義則(1932)と橋本進吉(1935)によって形容動詞が一品詞として定着した。

しかし、佐久間鼎(1940)は形容詞と形容動詞を一括して「性状語」とした。

時枝誠記(1950)は、「○○+だ」形を「体言+助動詞」と見て形容動詞を全面的に否定した。

時枝誠記以後も、形容動詞を否定する研究が進められたが、一方、認定・否定の問題ではなく、形容動詞の用法と意味についての研究も進められた。

新たに意味概念による名詞と形容動詞の区別がなされ、名詞は実体概念を表し、形容動詞は情態概念を表すと指摘された。

本章で考察した形容動詞の研究の流れは、語の形態的特徴から出発して意味的な内容へと移って行く。これからの形容動詞の研究も意味的な側面が強調された研究が行われていくと思われる。

第3章は、名詞と形容動詞語幹について述べたが、2章でも取り扱ったように、「名詞+助動詞(だ)」と「形容動詞語幹+語尾(だ)」が、同じ語形をしているため形容動詞の研究において論議の中心となっ

てきた。名詞と形容動詞は用法においても類似した形が多くあるため、区別するのが容易ではない。状態性の名詞の場合は特に、そうである。

名詞と形容動詞語幹の形態的な違いは、格助詞が付くかどうか・連体修飾語をとるか連用修飾語をとるか・連体修飾の形が「～の」になるか「～な」になるか・「～さ」を付けて名詞になるか、ということで要約できるが、例外的なものも少なくない。例えば、「殆どの京菓子は**新鮮**が一番です。」「そこには進行の**厳密**がある。」などは、形容動詞に格助詞が付いた例であり、「彼女は**すこぶる**美人だ」「水に入ったら**てんで**金槌だ」「彼は**すごく**封建主義だ」は副詞が名詞を修飾している。副詞は一般的に用言の修飾に使われるものである。

「恋はいつも**未知**なもの」の「未知」は名詞であるが連体修飾形として「な」をとる例である。

名詞と形容動詞のゆれは、用法だけではなく、名詞と形容動詞の意味においても現れる。

意味的な側面からの名詞と形容動詞は、名詞が実体的な概念を表す一方、形容動詞語幹は様態・状態・属性などの情態概念を表す。しかし、「苦痛」「必須」「独身」などは、様態や属性や状態などの情態概念を表しているから形容動詞に属すべきであるが、品詞は名詞である。また、文の全般的な意味からみると、語自体は実体概念の語であるが、文の中では情態概念を表す名詞文も多く見られる。例えば、「数学はここが**山**だ」「明日から**学校**だ」の「山」「学校」は実体概念の名詞であるが、文の中では情態概念を表している。従って、名詞と形容動詞語幹の区別は、形態、または意味の一部分では判断し難いのである。

また、形容動詞の中には、名詞にも属しているものが多いが、名詞と形容動詞の品詞性を共に帯びている語であっても意味と用法が全て一致するわけではない。〈表3〉～〈表5〉で見た通り、辞書的分类には、名詞と形容動詞の性格を共に持っていても、名詞的な要素が強い語がある一方、形容動詞的な要素が強い語もある。

また、名詞的な要素が強い語は名詞の用法が多く、形容動詞の用法としてはあまり用いられない。逆に形容動詞的な要素が強い語は、名詞の用法があまりなく、形容動詞の用法で用いられる。名詞性と形容性というのは使う人の主観的な価値が作用するから、一律的に線を引くのが難しく、品詞の分類においても、辞書によって名詞と形容動詞の境界に違いが現れるのである。

第4章は、形容動詞化する接尾辞「的」について、語の形成と意味・用法について、そして、連体修飾形「的な」と「～の」「～な」との意味的な関係を検討してみた。

この章で、主に扱おうとしたのは、

- ① 語形成において「的」が後続する語の種類
- ② 「的」の意味と用法
- ③ 連体修飾語に用いられる「的な」と「的な」
- ④ 連体修飾形の「的な」と、「～の」・「～な」の関係及び意味の違い、の四つである。

「的」は本来、漢字名詞に接続する接尾辞であるが、現在は漢字のみならず、和語・外来語・混種語にまで接続した形態が多く現れていて、「的」形の語の領域を広げている。「的」の形態的な領域が広がるにつれて、意味的な機能も、多様化した。「的」が移入された初期

は、「の」の意味機能しか持っていなかったが、次第に意味の拡張が行われて、今は、(ア)それ自体ではないもので、それに近い性質、そのような性質を持ったものの意をあらわす(イ)それに準ずる能力、その許す範囲内、それらしい、の意をあらわす(ウ)それに関する、それについての、その方面に関わるなど、の意を表わすようになった。活用においては、主に、連体修飾形と連用修飾形の「～的な+体言」と「～的に+用言」の形態が用いられており、他の活用形は見られない。また、連体修飾は「～的な+体言」の形態であるが、「的」の場合是一般の形容動詞の連体修飾と異なり、語尾「～な」が付かない形態の「～的+体言」も存在するし、語尾「～な」の代わりに「～の」が用いられる「～的の+体言」の形態もある。連体修飾の「～的な」「～的の」「～的」は、形態上、「～的の」から「～的な」に移行し、「～的」は「～な」が省略した形態で、意味上は違いがないと見られる。

また、「的」の接続により評価義も現れる。つまり、「的」の接続で、原語が持っている固有の意味の他、プラスあるいはマイナスという評価義が加わって、文の意味に影響を与える場合がある。

連体修飾に使われる語形に「～的な」の他に、「～な」と「～の」がある。「～的な」が名詞から作られた語だとすると、この名詞の連体修飾は「～の」になるであろう。つまり、「N+的な」と「N+の」ができるのである。そして、Nが実体概念と属性概念を共に帯びている語なら、Nは形容動詞の語幹にもなる。この場合の連体修飾は「N+な」になる。従って、語によっては、連体修飾形に「～の」「～的な」「～な」が全て用いられることもある。

この場合、意味に違いが現れる。「N+の」は対象に対する事実・実

体を、「N+な」は対象に対する状態・様態を表している。「N+的な」は対象に対する状態を表してはいるが、「N+な」とは違って、その状態がはっきりしていない場合、あるいは状態の基準としての意味を表していると言えよう。このように、同じ語源だからといっても、語性と用法によって意味の違いが現れるのである。

第5章は、名詞性のカタカナ語の連体修飾に用いられる「～な」を中心に、「～な」に含まれている意味的特徴はいったい何であるかについて検討してみた。それから、名詞性のカタカナ語の連体修飾として用いられる「～な」を、同一語幹から派生する形容動詞と連体詞との意味的な関連性及び違いを通して調べてみた。

連体修飾の「～な」の形は、漢語だけでなく、カタカナ語においても顕著に見られる。カタカナ語における「～な」の形は、形容性の語だけでなく、名詞性の語にもよく現われる。外来語が日本語に受容される時、まず名詞として受け入れられるから、カタカナ語の場合も原語における品詞性および意味・内容とは違う日本語としての新たな意味・用法が生成されるのである。

名詞的な性質を有する語が、形容性を表そうとすると、「～な」を付ける傾向があるが、これは「な」形の他の語類、形容動詞と連体詞が存在するからである。

同一語幹の形容詞と形容動詞、形容詞と連体詞では、次のような意味分担が行なわれている。形容詞を基準にした場合、「な」形の形容動詞と連体詞は、抽象的かつ感情的な意味的特徴を帯びている。このように、「な」形の語が有する意味的な特徴を、名詞性のカタカナ語に付与しようとする場合、カタカナ語に「～な」という形をつければ

よいのである。このような過程を経て、カタカナ語の「～な」の形が用いられるようになったと解釈される。

第6章は、連体修飾形において日・韓の対応について考察したものである。一般的に、日本語の形容動詞「～だ・～な」の韓国語の対応は、「～hada・～han」で現されるが、韓国語の「～hada・～han」の日本語の対応は、「～だ・～な/～の」で現される。このように、日本語と韓国語の連体修飾語にはずれが生じている。韓国語「永遠han」の対訳語として日本人は「永遠の」を選んでいるのに、韓国人の場合は「永遠な」を選ぶ傾向が強い。それゆえ、韓国語「永遠hansalang」を日本語に訳すのに当たって、韓国人は「永遠な愛」を選ぶのであるが、「永遠の愛」の方が正しい表現である。

言語と言語の対応において、同一系列どうしに対応するのが自然なことであるとしたら、韓国語の形容詞「永遠han」の日本語対応は当然形容動詞の「永遠な」になるべきである。しかし実際は名詞の「永遠+の」になるのである。

韓国語の「～han」の対応において日本語の「～な」ではなくて「～の」を取る語彙を調査した結果、「永遠」だけではなく、「過度・混雑」があり、「～han」が「～の」と「～な」を同時に取るものには、「小心・真実・迅速・正確・正当・早急・疎遠」などがある。

「永遠」のようなものは、韓国人の誤用として解釈できる側面がある一方で、日本語の形容動詞の内部問題として捉えることもできる。

意味的には、「永遠」は、ときが無限につづく状態を表わしている情態概念の語だから、「永遠だ」を形容動詞と認める立場から見れば、「永遠な」は誤用だとは言えない。

「永遠」の辞書の品詞分類をみても、9種類の辞書の中、7種で品詞が名詞と形容動詞に跨っている。また、用例をみても、「永遠の」のほどではないが、「永遠な」の形も多く見られる。特に、「もの」が後接した語の場合、「永遠の」と「永遠な」の数は、インターネットの検索結果「永遠のもの」が3690、「永遠なもの」が670となっている。

そして、「永遠だ」の連用形「永遠に」は「永遠な」に比べ、多く用いられている。これらのことから、本章では、「永遠の」がすでに存在しており、それで十分用が足りるはずの意味分野において、「永遠な」という形が形容詞性を誘発されることで現れるようになったと解釈した。ただし、「永遠な」という形が一般的に認められたというのではなく、もはや誤用とは言えなくなったのではないかという程度の主張である。

◀参考文献一覧▶

奥田達也(2000)「形容動詞のデ形の一用法について」『日本文化学報』、韓国日本文化学会

浅野信(1963)『日本文法語法論』、桜楓社

磯辺弥一郎(1906)「国文に及ぼせる英語の感化」『文章世界』、明治新聞雑誌文庫蔵

今泉忠義(1944)「大きな人・大きい人―ゆかいなこと・ゆかいのことと『現代語の性格』」、三教書院

岩崎卓(1995)「ニとデー時を表わす格助詞一」『日本語類留議表現の文法(上)』、くろしお出版

宇佐美恵美子(2001)「接尾辞『一的』について」『津田塾大学紀要』

33

永野賢(1965)『口語文法講座 6』、明治書院

遠藤織枝(1984)「接尾語『的』の意味と用法」『日本語教育』53号、日本語教育学会

大槻文彦(1897)『広日本文典別記』、大槻文彦

岡沢鉦次郎(1900)『初等日本文典』、吉川半七

奥津敬一郎(1964)「『の』のいろいろ」『口語文法講座3』、明治書院

奥田達也(2000)「形容動詞のデ形の一用法について」『日本文化学報』、韓国日本文化学会

亀井孝(1955)『概説文語文法』、吉川弘文館

北原保雄(1981)『日本語の文法』、中央公論社

金田一春彦(1955)『世界言語概説』下巻、研究社辞書部

(1957)「日本語のアクセント」『講座現代国語学』、筑摩書房

黒沢翁満(1856)『言霊のしるべ』、河内屋喜兵衛

此島正年(1953)「形容動詞の連体法」『国学院雑誌』、国学院大学出版部

小島俊夫(1984)「形容動詞とは何か」『研究資料日本文法』3用言編(二)形容詞形容動詞、明治書院

小林好日(1922)『標準語法精説』、育英書院

小松英雄(1999)『日本語はなぜ変化するか』、笠間書院

阪倉篤義(1985)『改稿日本文法の話 第2版』、教育出版株式会社

佐久間鼎(1940)『現代日本語法の研究』、厚生閣

桜井光昭(1964)「『名誉の』と『名誉な』」『口語文法講座 3』、明治書院

佐藤喜代治(1977)『日本文法要論』、朝倉書店

鈴木一彦(1973)「近代文法書および辞書の形容動詞一覧」『品詞別文法講座4形容詞・形容動詞』、明治書院

鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』、むぎ書房

鈴木重幸(1996)『形態論・序説』、むぎ書房

鈴木英夫(1986)「『形容動詞』をめぐる二、三の問題」『国語学論集』、明治書院

鈴木朗(1979)『言語四種論』、勉誠社

田中義廉(1874)『小学日本文典』、猫窠書屋

塚原鉄雄(1964)「『暖かい』と『暖かだ』」『口語文法講座 3』、明治書院

(1970)「形容動詞と体言と副詞」『月刊文法』四月号

鶴田常吉(1924)『尋常小学国語読本を資材とした日本口語法』、南郊社

寺村秀夫(1984)『日本語シンタクスと意味Ⅱ』、くろしお出版

- 富樫広陰(1891)『詞玉橋』、桑名皇学会
- 時枝誠記(1950)「いわゆる形容動詞の取り扱い方」『日本文法 口語編』、岩波書店
- 時枝誠記(1954)「いわゆる形容動詞語幹」『日本文法 文語編』、岩波書店
- 柏谷嘉弘(1973)「形容動詞の成立と展開」『品詞別 日本文法講座』第四卷 形容詞形容動詞、明治書院
- 西田直敏(1967)「形容動詞について」『講座日本語の文法(品詞各論)』、明治書院
- 西田直敏(1970)『資料日本文法研究史』、桜楓社
- 芳賀矢一(1904)『中等教科明治文典』、富山房
- 橋本進吉(1935)「国語の形容動詞について」『藤岡博士功績記念論文集』、岩波書店
- 橋本進吉(1950)『新文典別記 口語編』、岩波書店
- 橋本進吉(1979)『日本の言語学第4巻』、大修館書店
- 春日和男(1964)「形容動詞」『口語文法の問題点』、明治書院
- 春日和男(1971)「形容動詞は一品詞か」『月刊文法』、明治書院
- 春日和男(1978)『国語史概説』、有精堂
- 広田栄太郎(1969)「『的』という語の発生」『近代訳語考』、東京堂出版
- 林和比古(1958)『続日本文法講座1』、明治書院
- 福島邦道(1965)『口語文法講座 2』、明治書院
- 富士谷成章(1778)『あゆひ抄』、平安[京]:山田屋卯兵衛:勝村治右衛門:西村平八:秋田屋平左衛門:武村嘉兵衛:天王寺屋市郎兵衛
- 松尾捨次郎(1931)『国文法論纂』、文学社

- 松下厚(1975)「自由の女神」「自由な女神」『新・日本語講座2』、
汐文社
- 松下大三朗(1928)『改撰標準日本文法』、紀元社
- 松下大三朗(1961)『標準日本口語法』、白帝社
- 松村明(1984)『国語史概説』、秀英出版
- 森重敏(1959)『日本文法通論』、風間書房
- 藤居信雄(1957)「的ということば」『言語生活』71号、筑波書房
- 藤居信雄(1961)「的の意味」『言語生活』、岩波書店
- 堀口和吉(1992)「助辞『～的』の受容、『山辺道』36号天理大学国語
国文学会
- 三矢重松(1908)『高等日本文法』、明治書院
- 三尾砂(1942)『話言葉の文法』、法政大学出版局
- 三上章(1959)『新訂版現代語法序章』、刀江書院
- 水谷静夫(1951)「形容動詞辨」『国語と国文学』二八巻五号、東京大
学国語国文学会
- 水野義道(1987)「漢語系接辞の機能」『日本語学』6-2、明治書院
- 南雲千歌(1993)「現代日本語の『的』について」一雑誌『中央公論』
、1992、11『ICU日本語教育研究センター紀要』3、国際基
督教大学日本語教育センター
- 宮島達夫(1994)『語彙論研究』、むぎ書房
- 宮田幸一(1948)『日本語文法の輪郭』、三省堂
- 飯豊毅一(1973)「形容詞・形容動詞の語幹・各活用形の用法」『品詞
別日本文法講座』第四巻 形容詞 形容動詞、明治書院
- 森田良行(1996)『意味分析の方法』、ひつじ書房
- 山口佳紀(1985)『古代日本語文法の成立の研究』、有精堂
- 山崎良幸(1965)「日本語の文法機能に関する体系的研究」、風間書房

- 山下喜代(1999)「字音接尾辞『的』について」『日本語研究と日本語教育』森田良行教授古希記念論文集刊行会、明治書院
- 山田巖(1961)「発生期における的ということば」『言語生活』120号、筑波書房
- 山田孝雄(1908)『日本文法論』、宝文館出版
- 山田孝雄(1926)『日本文法講義』(改正反)、宝文館出版
- 山田孝雄(1936)『日本文法学概論』、宝文館出版
- 山田孝雄(1954)『日本口語法講義』、宝文館出版
- 山中信彦(1997)「『まじめ』の意味分析」『言語学』191集
- 吉岡郷甫(1912)『文語口語対照語法』、光風館書店
- 吉沢義則(1932)「所謂形容動詞に就いて」『国語国文』二卷一号、京都大学国文学会
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘(2001)『日本語文法ハンドブック』、スリーエーネットワーク
- 権善和(2004)「カタカナ語の連体修飾形『な』について」『日本学報』61輯、韓国日本学会
- 朴大王(2000)「接尾辞『的』について一話し言葉における『的』を中心に」『言語と文化』創刊号、名古屋大学大学院国際文化研究科
- 王淑琴(2000)「接尾語『的』の意味と『的』が付く語基との関係について一名詞修飾場合」『日本語教育』104
- 李成圭(2003)『일본어 어휘론 구축을 위하여』、불이문화
『일본어 어휘 I』、불이문화
- 李成圭・権善和(2000)「漢語動詞와日本語教育」『日本学報』45輯、韓国日本学会
- 李成圭・権善和(2003)「日本語形容動詞の一問題-『永遠han』と『永

遠の』・『永遠な』の対照的考察-」『日本学報』56輯、韓国
日本学会

李成圭・権善和(2004a)『일본어 조동사 연구Ⅰ』、불이문화

李成圭・権善和(2004b)『일본어 조동사 연구Ⅱ』、불이문화

李仁淳(2001)「韓国語における『的』について一日本語『的』との対
照を通して」『日語日文学研究』39

◀参考辞典・雑誌・文集類▶

『学研国語大辞典』(1988)、学習研究社

『現代形容詞用法辞典』(1991)、東京堂出版

『現代国語辞典』(1989)、三省堂

『国語学大辞典』(1982)、東京堂出版

『広辞苑』(1998)、岩波書店

『新明解国語辞典』(1989)、三省堂

『日本国語大辞典』(1978)、小学館

『日本語基本動詞用法辞典』(1989)、大修館書店

『日本語教育事典』(1982)、大修館書店

『日本語文型辞典』(1998)、くろしお出版

『日本文法事典』(1981)、有精堂

『日本文法大辞典』(1971)、明治書院

『明鏡』(2002)、大修館書店

『例解新国語辞典』(1993)、三省堂

『日本語能力試験出題基準』(1994)国際交流基金、凡人社

『分類語彙表』(1964)国立国語研究所、秀英出版

『動詞・形容詞問題語用例集』（1972）国立国語研究所資料集、秀英出版

『形容詞の意味・用法の記述的研究』（1987）国立国語研究所資料集、秀英出版

◀用例出典目録▶

林史典・つる岡昭夫編（1992）『15万例文・成句現代国語用例辞典』、教育社

『天声人語』（1989～1991）、朝日新聞社

『蒼茫』石川達三

『コシヤマイン記』鶴田知也

『城外』小田嶽夫

『地中海』富沢有為男

『暢気眼鏡』尾崎一雄

『猫』尾崎一雄

『或出産』尾崎一雄

『芳兵衛』尾崎一雄

『キョトコ』尾崎一雄

『世話やき』尾崎一雄

『擬態』尾崎一雄

『灯火管制』尾崎一雄

『父祖の地』尾崎一雄

『五年』尾崎一雄

以上『芥川賞全集第一巻』（1994）、文芸春秋に所収

『糞尿譚』火野葦平

『厚物咲』中山義秀

『乗合馬車』中里恒子

『日光室』中里恒子

『あさくさの子供』長谷健

『鶏騒動』半田義之

『密猟者』寒川光太郎

以上『芥川賞全集第三巻』（1994）文芸春秋に所収

『平賀源内』桜田常久

『長江デルタ』多田裕計

『青果の市』芝木好子

『連絡員』倉光俊夫

『纏足の頃』石塚喜久三

『和紙』東野辺薫

『劉広福』八木義徳

『登攀』小尾十三

『雁立』清水基吉

以上『芥川賞全集第二巻』（1994）、文芸春秋に所収

『本の話』由起しげ子

『確証』小谷剛

『闘牛』井上靖

『異邦人』 辻亮一

『春の草』 石川利光

『壁－S・カルマ氏の犯罪』 安部公房

『広場の孤独』 堀田善衛

『漢奸』 堀田善衛

以上『芥川賞全集第四巻』（1994）文芸春秋に所収

『山塔』 斯波四良

『夜と霧の隅で』 北杜夫

『忍ぶ川』 三浦哲郎

『鯨神』 宇能鴻一郎

『美談の出発』 川村晃

『少年の橋』 後藤紀一

『蟹』 河野多恵子

以上『芥川賞全集第六巻』（1994）文芸春秋に所収

『されどわれらが日々ー』 柴田翔

『玩具』 津村節子

『北の河』 高井有一

『夏の流れ』 丸山健二

『カクテル・パーティー』 大城立裕

『徳山道助の帰郷』 柏原兵三

以上『芥川賞全集第七巻』（1994）文芸春秋に所収

『三匹の蟹』 大庭みな子

『年の残り』 丸谷オ一

『赤頭巾ちゃん気をつけて』 庄司薫

『深い河』 田久保英夫

『アカシヤの大連』 清岡卓行

『プレオー8の夜明け』 古山高麗男

『杳子』 吉井由吉

以上『芥川賞全集第八巻』（1994）文芸春秋に所収

『オキナワの少年』 東峰夫

『砧をうつ女』 李恢成

『いつか汽笛を鳴らして』 畑山博

『誰かが触った』 宮原昭夫

『ベティさんの庭』 山本道子

『れくいえむ』 郷静子

以上『芥川賞全集第九巻』（1994）文芸春秋に所収

『草の剣』 野呂邦暢

『土の器』 坂田寛夫

『あの夕陽』 日野啓三

『祭りの場』 林京子

『岬』 中上健次

『志賀島』 岡松和夫

以上『芥川賞全集第十巻』（1994）文芸春秋に所収

『九月の空』 高橋三千綱

『伸予』 高橋揆一郎

『やまあいの煙』 重兼芳子

『愚者の夜』 青野

『モッキングバードのいる町』 森礼子

『父が消えた』 尾辻克彦

『小さな貴婦人』 吉行理恵

以上『芥川賞全集第十二巻』（1992）文芸春秋に所収

『ネコババのいる町で』 滝沢美恵子

『村の名前』 辻原登

『妊娠カレンダー』 小川洋子

『自動起床装置』 辺見庸

『背負い水』 荻野アンナ

『運転士』 藤原智美

『犬婿入り』 多和田葉子

『石の来歴』 奥泉光

以上『芥川賞全集第十五巻』（1994）文芸春秋に所収

日本語 形容動詞의 研究

權善和

日本語 形容動詞은 사물의 성질이나 상태를 표현하는 기능을 가지고 있어 의미적으로는 形容詞과 유사하나 다른 말과의 접속 등의 측면에서는 動詞과 같은 기능을 가지고 있다.

형용동사는 일본어 형용사의 부족 부분을 보충하기 위하여 만들어진 것으로 平安시대 이후 漢語의 유입으로 漢語 형용동사의 수가 급격히 증가했고 20세기에 들어서면서 서구와의 교류가 활발해짐에 따라 カタカナ語의 형용동사가 생겨났으며, 그 수도 계속 증가하고 있다.

형용동사는 文語와 口語에서 語尾의 모양을 각각 달리하고 있다. 文語에 있어서는 「形容動詞語幹+語尾(なり・たり)」의 형태를, 口語에서는 「형용동사어간+어미(だ)」의 형태를 취하고 있어, 文語의 「名詞+助動詞(なり・たり)」와 口語의 「名詞+助詞(だ)」와 같은 형태인 것이다. 이러한 형태적인 특징은 형용동사 어간을 명사로, 어미를 조동사로 보는 견해를 생겨나게 해 형용동사를 인정하지 않는 형용동사의 否定論을 대두시켰다. 이는, 형용동사 特設論에 대립하는 입장으로 형용동사의 연구에 있어서 해결되지 않은 문제점으로 제기되고 있다고 할 수 있다.

형용동사 特設論은, 형용동사의 어간은 주어가 될 수 없고, 格助詞가 접속되지 않으며, 連體 修飾에 있어 어미 「な」의 형태를 취

하며, 連用 修飾을 받는다는 점에서 명사와는 구별된다는 입장이다. 이에 대한 형용동사의 否定論은, 일반적인 언어 인식으로는 소위 형용동사의 어간을 독립적인 것으로 보고 있으며, 辭典에 등록되어 있는 것이 어간의 형태이므로, 어간 부분을 一語로 보아야한다는 입장이다. 특히, 敬語 表現에 있어서 「静かだ」의 경어 표현이 「静かです」이며, 이는 「静か」에 조동사 「です」가 접속된 형태로, 「静かです」가 「静か+です」라면, 「静かだ」도 「静か+だ」로, 「静か」를 一語로 인정해야 한다는 입장이다.

이렇듯 형용동사는 형태적인 특성이나 용법 등이 명사와 유사한 관계로, 品詞 인정에 있어서 논란이 되어 왔다.

명사와 형용동사를 구별 짓는 특징적인 차이를 든다면, 연체수식형의 예를 들 수 있는데, 「平和の象徴・平和な村」「自由の女神像・自由な暮らし」에서와 같이 명사의 연체 수식형은 「~の」를 취하고, 형용동사의 경우는 「~な」를 취하는 것이다.

그러나 이러한 연체 수식의 「名詞+の」「形容動詞+な」의 형태는 漢語에서는 비교적 잘 지켜지고 있으나 カタカナ語에서는 「~な」가 형용동사뿐만 아니라 명사에도 접속하는 예가 많이 있다.

이것은, 「な」가 형용동사의 연체형이므로, 「な」형태를 취함으로 인하여 形容性を 부여받게 된다는 생각에서 비롯된 것이라고 할 수 있다. 「な」의 형용성 의미 부여에 대해서는, 同一 語幹의 形容詞와 形容動詞, 形容詞와 連体詞에서 찾아 볼 수 있다. 동일 어간의 형용사와 형용동사, 형용사와 연체사에서 형용사를 기준으로 「な」형의 형용동사와 연체사는, 추상적이며 감정적인 의미 특징을 띠고 있어, 의미 분담이 이루어지고 있는 것을 알 수 있다. 이와 같이 명사성의 カタカナ語에 「~な」를 접속시킴으로써, 「な」형의 어휘가 지고 있

는 형용사적인 의미적인 특징을 부여받게 되는 것이라 해석할 수 있다.

形容動詞化하는 방법 중에 하나인 「～的だ」는, 원래 추상적인 의미를 나타내는 한어 명사나 体言에 붙어 형용동사 어간을 만드는 역할을 하지만, 和語・カタカナ語에도 「気持ち的」「受身的」「アイドル的」「ボランティア的」 등과 같이 「的」형의 형용동사가 생겨났고, 그 수도 증가하고 있다. 「的」形の 語彙의 증가는 「的」자체의 의미뿐만 아니라, 「的」의 접속에 의한 문장에서의 새로운 評價義도 생겨나게 하였다. 즉, 「科学的な考え方」의 경우는 「科学的」에 後接하는 「考え方」에 의해 「科学的」은 ‘이치에 맞는’ ‘합리적’이라는 의미로 플러스의 評價義를 더하게 되고, 「機械的に覚える」의 경우는, 後接하는 「覚える」에 의해 본래의 「機械的」이라는 의미와는 다른 ‘개성적이지 않은’이라는 의미를 나타내서 마이너스의 評價義를 더하게 된다.

형용동사의 연체 수식형은 「～な」이지만, 이것이 実体概念과 情態概念을 함께 나타낸다고 하면, 연체 수식형에 「～の」와 「～的な」의 형태도 쓰일 수 있다. 따라서, 語彙에 따라서는, 연체수식형에 「～の」「～的な」「～な」가 모두 쓰일 수도 있다. 이런 경우 연체수식의 형태에 따라 의미의 차이가 나타나는데 어휘를 「N」이라 했을 때, 「N+の」는 대상에 대한 事実・実体を 나타내고 「N+な」는 대상에 대한 状態・様態을 나타낸다. 「N+的な」는 대상에 대한 상태를 나타내고는 있지만, 「N+な」와는 달리 그 상태가 확실하지 않은 경우, 또는 상태의 기준으로서의 의미를 나타내고 있다고 할 수 있다. 이와 같이, 같은 語源의 어휘라도 語性和 用法에 의해 문장에서의 의미 차이가 나타난다고 할 수 있다.

<Abstract>

A Study of Japanese *Keiyoudousi*

Written by Sun Hwa Kwon

Japanese *Keiyoudousi* is semantically similar to adjective because of its functions expressing the properties or conditions of a thing, but there inhere the functions of verb such as particles to other parts.

Keiyoudousi was invented to fill the want of adjectives in Japanese language. The introduction of Sino-Japanese words in Heian age increased the number of *Keiyoudousi* with Sino-Japanese words. The 20th century interchange with western countries brought out *Keiyoudousi* from *katakana*, the number of which has been still increasing.

Keiyoudousi alternates its suffixes according to the change between colloquial language and literal language. While this takes the form of “*Keiyoudousi* stem + suffix(*nari/tari*)” in literal style, the form of “*Keiyoudousi* stem + suffix(*da*)” is used in colloquial style. This takes the same system as “noun+auxiliary verb(*nari/tari*)” in literal style and “noun+postposition(*da*)” in colloquial style. It is in this morphological characteristic which appeared the negation of *Keiyoudousi*, an interpretation that *Keiyoudousi* stem and suffix can be considered each as noun and auxiliary verb. This interpretation is in opposition to *Keiyoudousi* hypothesis, and the two theories have been the most debated point in *Keiyoudousi* studies.

Keiyoudousi special theory takes the following stance. The stem differs from noun in that *Keiyoudousi* stem cannot be a subject in sentence and cannot be connected to case particles; it also takes the form of “+*na*” and adnominal-modifiers. In response to this argument, the negation theory states that the stem should be considered as one word because the general linguistic awareness assumes that *Keiyoudousi* stem is independent, and *Keiyoudousi* is listed as a stem in dictionary.

Especially, in case of honorific expressions, the honorific form of *sizukada* is *sizukadesu*. This takes the form of “*sizuka*(silent) + auxiliary verb(*desu*).” Therefore, if it is possible that *sizukadesu* is *sizuka+desu*, it should be accepted that *sizukada* becomes *sizuka+da* and *sizuka* becomes one word.

As seen above, the morphological properties or usage similar to those of noun have provoked many arguments.

One of characteristic differences between noun and *Keiyoudousi*, for example, is the form of adnominal-modifier. As in *heiwano shouchou/heiwana mura*(symbol of peace/peaceful village) and *ziyuno megamizou/ziyuna kurasi*(the Statue of Liberty/free life), the adnominal-modifier takes “+no” and *Keiyoudousi* “+na.”

The forms of “noun +no” and “*Keiyoudousi* +na” are strictly followed in Sino-Japanese words, but in *katakana* words “+na” is occasionally added not only to *Keiyoudousi* but also to noun and the number of its usage is increasing steadfastly.

This formation originates from the assumption that *Keiyoudousi* is adjectivally qualified by taking *na* form because *na* is the adnominal-modifier of *Keiyoudousi*. Adjectival attribution to *na* can be found in adjectives and *Keiyoudousi*, and adjectives and unconjugated adjectives, of the same stem. In adjectives and *Keiyoudousi* of the same stem, and adjectives and unconjugated adjectives of the same stem, there is semantic sharing among them because the form of *Keiyoudousi+ na* implies abstract and emotional semantic nuances. So, by adding *na* to nominal *katakana* words, this interpretation obtains plausibility, *Keiyoudousi* is endowed with the semantic characteristics of adjective.

The form of “+tekida,” one of methods of making *Keiyoudousi*, plays the role of providing the stem of *Keiyoudousi* by adding itself to Sino-Japanese words which convey abstract meanings, but in native Japanese words appeared many *Keiyoudousi* with *teki* such as *kimochiteki*(emotional), *ukemiteki*(passive), *idolteki*(heroic), and *volunteerteki*(volunteer). Its number is growing. The increase of the vocabulary with *teki* endows not only *teki* but also the sentence of *teki*

with new evaluative meaning. In other words, while *kagakutekinakangae*(scientific thinking) obtains the plus semantic feature of evaluative meanings such as “reasonable” and “rational” by suffixing *kanggae*(thinking) to *kagakuteki*(scientific), *kikaitekinioboeru*(to think mechanically) obtains the minus feature of “with less personality” different from the original *kikaiteki* (mechanical) by suffixing *oboeru* .

The nominal-modifier form of *Keiyoudousi* is “+ *na*,” but expressing substantial and static concepts simultaneously “+*no*” and “+*tekina*” can be used in *Keiyoudousi*. Therefore, all of “+*no*,” “+*tekina*,” and “+*na*” can be applied according to the word in use. In this case meanings differ according to forms of nominal-modifiers. If the word is N, “N+*no*” expresses the reality/substance and “N+*na*” expresses the state/mode, of the given object. “N+*tekina*” expresses the conditions of the object, but, if the conditions are unclear, it expresses a meaning based on the conditions. Consequently, though etymologically same, two words can have different meanings in sentences according to their usage and character.